

さうして金縁の眼鏡を掛けて、物を見るときには、顎を前へ出して、心持仰向く癖があつた。代助は此男を見たとき、何所か見覺のある様な気がした。が、ついに思ひ出さうと力めても見なかつた。其伴侶は若い女であつた。代助はまだ廿になるまいと判定した。羽織を着ないで、普通よりは大きく胸を出して、多くは顎を襟元へびたりと着けて坐つてゐた。

代助は苦しいので、何返も席を立つて、後の廊下へ出て、狭い空を仰いだ。兄が來たら、嫂と縫子を引き渡して早く歸りたい位に思つた。一遍は縫子を連れて、其所等をぐるぐる運動して歩いた。仕舞には些と酒でも取り寄せて飲まうかと思つた。

兄は日暮とすれ／＼に來た。大變遅かつたぢやありませんかと云つた時、帯の間から、金時計を出して見せた。實際六時少し回つた許であつた。兄は例の如く、平氣な顔をして、方々見回してゐた。が、飯を食ふ時、立つて廊下へ出たぎり、中々歸つて來なかつた。しばらくして、代助が不圖振り返つたら、一軒置いて隣の金縁の眼鏡を掛けた男の所へ這入つて、話をしてゐた。若い女にも時々話しかける様であつた。然し女の方では笑ひ顔を一寸見せる丈で、すぐ舞臺の方へ眞面目に向き直つた。代助は嫂に其人の名を聞かうと思つたが、兄は人の集る所へさへ出れば、

何所へでも斯の如く平氣に這入り込む程、世間の廣い、又世間を自分の家の様に心得てゐる男であるから、氣にも掛けずに黙つてゐた。

すると幕の切れ目に、兄が入口迄歸つて來て、代助一寸來いと云ひながら、代助を其金縁の男の席へ連れて行つて、愚弟だと紹介した。それから代助には、是が神戸の高木さんと云つて引合した。金縁の紳士は、若い女を顧みて、私の姪ですと云つた。女はしとやかに御辭義をした。其時兄が、佐川さんの令嬢だと口を添へた。代助は女の名を聞いたとき、旨く掛けられたと腹の中で思つた。が何事も知らぬものゝ如く装つて、好加減に話してゐた。すると嫂が一寸自分の方を振り向いた。

五六分して、代助は兄と共に自分の席に返つた。佐川の娘を紹介される迄は、兄の見え次第逃げる氣であつたが、今では左様不可なくなつた。餘り現金に見えては、却つて好くない結果を引き起しさうな気がしたので、苦しいのを我慢して坐つてゐた。兄も芝居に就ては全く興味がなささうだつたけれども、例の如く鷹揚に構えて、黒い頭を燻す程、葉巻をくゆらした。時々評をすると、縫子あの幕は綺麗だらう位の所であつた。梅子は平生の好奇心にも似ず、高木に就ても、



佐川の娘に就ても、何等の質問を掛けず、一言の批評も加へなかつた。代助には其澄した様子  
却つて滑稽に思はれた。彼は今日迄、嫂の策略にかゝつた事が時々あつた。けれども、只の一返  
も腹を立てた事はなかつた。今度の狂言も、平生ならば、退屈紛らしの遊戯程度に解釋して、笑  
つて仕舞つたかも知れない。夫許ではない。もし自分が結婚する氣なら、却つて、此狂言を利用  
して、自ら人巧的に、御目出度喜劇を作り上げて、生涯自分を嘲けつて満足する事も出来た。然  
し此姉迄が、今の自分を、父や兄と共に謀して、漸々窮地に誘なつて行くかと思ふと、流石が此  
所作をたゞの滑稽として、觀察する譯には行かなかつた。代助は此先、嫂が此事件を何う發展さ  
せる氣だらうと考へて、少々弱つた。家のものゝ中で、嫂が一番斯んな計畫に興味をもつてゐた  
からである。もし嫂が此方面に向つて代助に肉薄すればする程、代助は漸々家族のものと疎遠に  
ならなければならぬと云ふ恐れが、代助の頭の何處かに潜んでゐた。

芝居の仕舞になつたのは十一時近くであつた。外へ出て見ると、風は全く歇んだが、月も星も  
見えない静かな晩を、電燈が少し許り照らしてゐた。時間が遅いので茶屋では話をする暇もな  
かつた。三人の迎は來てゐるが、代助はつい車を眺へて置くのを忘れた。面倒だと思つて、嫂の勸

を斥けて、茶屋の前から電車に乗つた。數寄屋橋で乗り易え様と思つて、黒い路の中に、待ち合  
はしてゐると、小供を負つた神さんが、退儀さうに向から近寄つて來た。電車は向ふ側を二三度  
通つた。代助と軌道の間には、土か石の積んだものが、高い土手の様に挟まつてゐた。代助は始  
めて間違つた所に立つてゐる事を悟つた。

「御神さん、電車へ乗るなら、此所ぢや不可ない。向側だ」と教へながら歩き出した。神さん  
は禮を云つて跟いて來た。代助は手探でもする様に、暗い所を好加減に歩いた。十四五間左の方  
へ濠際を目標に出たら、漸く停留所の柱が見付つた。神さんは其所で、神田橋の方へ向いて乗つ  
た。代助はたつた一人反對の赤坂行へ這入つた。

車の中では、眠くて寐られない様な氣がした。揺られたながらも今夜の睡眠が苦になつた。彼は  
大いに疲労して、白晝の凡てに、惰氣を催うすにも拘はらず、知られざる何物かの興奮の爲に、  
静かな夜を恣にする事が出来ない事がよくあつた。彼の腦裏には、今日の日中に、交るゝ痕  
を殘した色彩が、時の前後と形の差別を忘れて、一度に散らつてゐた。さうして、それが何の  
色彩であるか、何の運動であるか慥かに解らなかつた。彼は眼を眠つて、家へ歸つたら、又キス



キーの力を借りやうと覺悟した。

彼は此取り留めのない花やかな色調の反照として、三千代の事を思ひ出さざるを得なかつた。さうして其所にわが安住の地を見出した様な氣がした。けれども其安住の地は、明らかに、彼の眼に映じて出なかつた。たゞ、かれの心の調子全體で、それを認めた丈であつた。従つて彼は三千代の顔や、容子や、言葉や、夫婦の關係や、病氣や、身分を一纏にしたものを、わが情調にしつくり合ふ對象として、發見したに過ぎなかつた。

翌日代助は但馬にゐる友人から長い手紙を受取つた。此友人は學校を卒業すると、すぐ國へ歸つたが、親の命令で已を得ず、故郷に封じ込められて仕舞つたのである。夫でも一年許の間は、もう一返親父を説き付けて、東京へ出る出ると云つて、うるさい程手紙を寄こしたが、此頃は漸く斷念したと見えて、大した不平がましい訴もしない様になつた。家は所の舊家で、先祖から持ち傳へた山林を年々伐り出すのが、重なる用事になつてゐるよしであつた。今度の手紙には、彼の日常生活の様子が委しく書いてあつた。それから、一ヶ月前町長に擧げられて、年俸を三百

圓頂戴する身分になつた事を、面白半分、殊更に眞面目な句調で吹聴して來た。卒業してすぐ中學の教師になつても、此三倍は貰へると、自分と他の友人との比較がしてあつた。

此友人は國へ歸つてから、約一年許りして、京都のある財産家から嫁を貰つた。それは無論親の云ひ付であつた。すると、少時して、直子供が生れた。女房の事は貰つた時より外に何も云つて來ないが、子供の生長には興味があると見えて、時々代助が可笑くなる様な報知をした。代助はそれを讀むたびに、此子供に對して、満足しつゝある友人の生活を想像した。さうして、此子供の爲に、彼の細君に對する感想が、貰つた當時に比べて、どの位變化したかを疑つた。

友人は時々鮎の乾したのや、柿の乾したのを送つてくれた。代助は其返禮に大概は新しい西洋の文學書を遣つた。すると其返事には、それを面白く讀んだ證據になる様な批評が屹度あつた。けれども、それが長くは續かなかつた。仕舞には受取つたと云ふ禮状さへ寄こさなかつた。此方からわざ／＼問ひ合せると、書物は難有く頂戴した。讀んでから禮を云はうと思つて、つい遅くなつた。實はまだ讀まない。白狀すると、讀む閑がないと云ふより、讀む氣がないのである。もう一層露骨に云へば、讀んでも解らなくなつたのである。といふ返事が來た。代助は夫から書



物を廢めて、其代りに新しい玩具を買つて送る事にした。

代助は友人の手紙を封筒に入れて、自分と同じ傾向を有つてゐた此舊友が、當時とは丸で反對の思想と行動とに支配されて、生活の音色を出してゐると云ふ事實を、切に感じた。さうして、命の絃の震動から出る二人の響を審かに比較した。

彼は理論家として、友人の結婚を肯つた。山の中に住んで、樹や谷を相手にしてゐるものは、親の取り極めた通りの妻を迎へて、安全な結果を得るのが自然の通則と心得たからである。彼は同じ論法で、あらゆる意味の結婚が、都會人士には、不幸を持ち來すものと斷定した。其原因を云へば、都會は人間の展覽會に過ぎないからであつた。彼は此前提から此結論に達する爲に斯う云ふ徑路を辿つた。

彼は肉體と精神に於て美の類別を認める男であつた。さうして、あらゆる美の種類に接觸する機會を得るのが、都會人士の權能であると考へた。あらゆる美の種類に接觸して、其たび毎に、甲から乙に氣を移し、乙から丙に心を動かさぬものは、感受性に乏しい無鑑賞家であると斷定した。彼は是を自家の經驗に徴して争ふべからざる眞理と信じた。その眞理から出立して、都會的

生活を送る凡ての男女は、兩性間の引力に於て、悉く隨縁臨機に、測りがたき變化を受けつゝあるとの結論に到着した。それを引き延ばすと、既婚の一對は、雙方ともに、流俗に所謂不義の念に冒されて、過去から生じた不幸を、始終嘗めなければならぬ事になつた。代助は、感受性の尤も發達した、又接觸點の尤も自由な、都會人士の代表者として、藝妓を選んだ。彼等のあるものは、生涯に情夫を何人取り替へるか分らないではないか。普通の都會人は、より少なき程度に於て、みんな藝妓ではないか。代助は渝らざる愛を、今の世に口にするものを偽善家の第一位に置いた。

此所迄考へた時、代助の頭の中に、突然三千代の姿が浮んだ。其時代助はこの論理中に、或因數は數へ込むのを忘れたのではなからうかと疑つた。けれども、其因數は何うしても發見する事が出来なかつた。すると、自分が三千代に對する場合も、此論理によつて、たゞ現代的のものに過ぎなくなつた。彼の頭は正にこれを承認した。然し彼の心は、慥かに左様だと感ずる勇氣がなかつた。



代助は嫂の肉薄を恐れた。又三千代の引力を恐れた。避暑にはまだ間があつた。凡ての娛樂には興味を失つた。讀書をしても、自己の影を黒い文字の上に認める事が出来なくなつた。落付いて考へれば、考へは蓮の糸を引く如くに出るが、出たものを纏めて見ると、人の恐ろしがるもの許であつた。仕舞には、斯様に考へなければならぬ自分が怖くなつた。代助は蒼白く見える自分の脳髓を、ミルクセーキの如く廻轉させる爲に、しばらく旅行しやうと決心した。始めは父の別荘に行く積であつた。然し、是は東京から襲はれる點に於て、牛込に居ると大した變りはないと思つた。代助は旅行案内を買つて来て、自分の行くべき先を調べて見た。が、自分の行くべき先は天下中何處にも無い様な氣がした。しかし、無理にも何處かへ行かうとした。それには、支度を調へるに若くはないと極めた。代助は電車に乗つて、銀座迄來た。朗かに風の往來を渡る午後であつた。新橋の勸工場を一回して、廣い通りをぶら／＼と京橋の方へ下つた。其時代助の眼には、向ふ側の家が、芝居の書割の様に平たく見えた。青い空は、屋根の上へ塗塗り付けられ

てゐた。

代助は二三の唐物屋を冷かして、入用の品を調べた。其中に、比較的高い香水があつた。資生堂で練齒磨を買はうとしたら、若いものが、欲しくないと云ふのに自製のものを出して、頻に勧めた。代助は顔をしかめて店を出た。紙包を腋の下に抱へた儘、銀座の外れ迄遣つて来て、其所から大根河岸を回つて、鍛冶橋を丸の内へ志した。當もなく西の方へ歩きながら、是も簡便な旅行と云へるかも知れないと考へた揚句、草臥れて車をも思つたが、何處にも見當らなかつたので又電車へ乗つて歸つた。

家の門を這入ると、玄關に誠太郎のらしい履が叮嚀に并べてあつた。門野に聞いたら、へえ左様です、先方から待つて御出ですといふ答であつた。代助はすぐ書齋へ來て見た。誠太郎は、代助の坐る大きな椅子に腰を掛けて、洋卓の前で、アラスカ探險記を讀んでゐた。洋卓の上には、蕎麥饅頭と茶盆が一所に乗つてゐた。

「誠太郎、何だい、人のゐない留守に來て、御馳走だね」と云ふと、誠太郎は、笑ひながら、先づアラスカ探險記をポケットへ押し込んで、席を立つた。



「其所に居るなら、ゐても構はないよ」と云つても、聞かなかつた。  
代助は誠太郎を捕まへて、例の様に調戲ひ出した。誠太郎は此間代助が歌舞伎座でした欠伸の  
數を知つてゐた。さうして、

「叔父さんは何時奥さんを貰ふの」と、又先達てと同じ様な質問を掛けた。

此日誠太郎は、父の使に來たのであつた。其口上は、明日の十一時迄に一寸來て呉れと云ふの  
であつた。代助はさう／＼父や兄に呼び付けられるのが面倒であつた。誠太郎に向つて、半分怒  
つた様に、

「何だい、苛いぢやないか。用も云はないで、無暗に人を呼びつけるなんて」と云つた。誠  
太郎は矢つ張りにや／＼してゐた。代助はそれぎり話を外へそらして仕舞つた。新聞に出てゐる  
相撲の勝負が、二人の題目の重なるものであつた。

晩食を食つて行けと云ふのを學校の下調があると云つて辭退して誠太郎は歸つた。歸る前に、

「それぢや、叔父さん、明日は來ないんですか」と聞いた。代助は已を得ず、

「うむ。何うだか分らない。叔父さんは旅行するかも知れないからつて、歸つてさう云つて呉

れ」と云つた。

「何時」と誠太郎が聞き返したとき、代助は今日明日のうちと答へた。誠太郎はそれで納得し  
て、玄關迄出て行つたが、沓脱へ下りながら振り返つて、突然

「何處へ入らつしやるの」と代助を見上げた。代助は、

「何處つて、まだ分るもんか。ぐる／＼回るんだ」と云つたので、誠太郎は又によ／＼しなが

ら、格子を出た。

代助は其夜すぐ立たうと思つて、グラッドストーンの中を門野に掃除さして、携帶品を少し詰  
め込んだ。門野は少なからざる好奇心を以て、代助の革靴を眺めてゐたが、

「少し手傳ひませうか」と突立つたまゝ聞いた。代助は、

「なに、譯はない」と斷わりながら、一旦詰め込んだ香水の壺を取り出して、封被を剝いで、  
栓を抜いて、鼻に當て、嗅いで見た。門野は少し愛想を盡した様な具合で、自分の部屋へ引取つ  
た。二三分すると又出て來て、

「先生、車を左様云つとききますかな」と注意した。代助はグラッドストーンを前へ置いて、顔



を上げた。

「左様、少し待つて呉れ給へ」

庭を見ると、生垣の要目の頂に、まだ薄明るい日足がうろついてゐた。代助は外を覗きながら、是から三十分のうちに行く先を極めやうと考へた。何でも都合のよささうな時間に出る汽車に乗つて、其汽車の持つて行く所へ降りて、其所で明日迄暮らして、暮らしてゐるうちに、又新しい運命が、自分を攫ひに来るのを待つ積であつた。旅費は無論充分でなかつた。代助の旅装に適した程の宿泊を續けるとすれば、一週間も保たない位であつた。けれども、さう云ふ點になると、代助は無頓着であつた。愈となれば、家から金を取り寄せる氣でゐた。それから、本來が四邊の風氣を換へるのを目的とする移動だから、贅澤の方面へは重きを置かない決心であつた。興に乗れば、荷持を雇つて、一日歩いて可いと覺悟した。

彼は又旅行案内を開いて、細かい數字を丹念に調べ出したが、少しも決定の運に近寄らないうちに、又三千代の方に頭が滑つて行つた。立つ前にもう一遍様子を見て、それから東京を出やうと云ふ氣が起つた。グラッドストーンは今夜中に始末を付けて、明日の朝早く提げて行かれる様

にして置けば構はない事になつた。代助は急ぎ足で玄關迄出た。其音を聞き付けて、門野も飛び出した。代助は不斷着の儘、掛釘から帽子を取つてゐた。

「又御出掛ですか。何か御買物ぢやありませんか。私で可ければ買つて來ませう」と門野が驚ろいた様に云つた。

「今夜は已めだ」と云ひ放した儘、代助は外へ出た。外はもう暗かつた。美しい空に星がぼつぼつ影を増して行く様に見えた。心持の好い風が袂を吹いた。けれども長い足を大きく動かし、た代助は、二三町も歩かないうちに額際に汗を覺えた。彼は頭から烏打を脱つた。黒い髪を夜露に打たして、時々帽子をわざと振つて歩いた。

平岡の家の近所へ來ると、暗い人影が蝙蝠の如く靜かに其所、此所に動いた。粗末な板塀の隙間から、洋燈の灯が往來へ映つた。三千代は其光の下で新聞を讀んでゐた。今頃新聞を讀むのかと聞いたら、二返目だと答へた。

「そんなに閑なんですか」と代助は座蒲團を敷居の上に移して、椽側へ半分身體を出しながら、障子へ倚りかゝつた。



平岡は居なかつた。三千代は今湯から歸つた所だと云つて、團扇さへ膝の傍に置いてゐた。平生の頬に、心持暖い色を出して、もう歸るでせうから緩くりしてゐらつしやいと、茶の間へ茶を入れに立つた。髪は西洋風に結つてゐた。

平岡は三千代の云つた通りには中々歸らなかつた。何時でも斯んなに遅いのかと尋ねたら、笑ひながら、まあ左んな所でせうと答へた。代助は其笑の中に一種の淋しさを認めて、眼を正して、三千代の顔を凝と見た。三千代は急に團扇を取つて袖の下を煽いだ。

代助は平岡の經濟の事が氣に掛つた。正面から、此頃は生活費には不自由はあるまいと尋ねて見た。三千代は左様ですと云つて、又前の様な笑ひ方をした。代助がすぐ返事をしなかつたものだから、

「貴方には、左様見えて」と今度は向ふから聞き直した。さうして、手に持つた團扇を放り出して、湯から出たての綺麗な織い指を、代助の前に廣げて見せた。其指には代助の贈つた指環も、他の指環も穿めてゐなかつた。自分の記念を何時でも胸に描いてゐた代助には、三千代の意味がよく分つた。三千代は手を引き込めると同時に、ぼつと赤い顔をした。

「仕方がないんだから、堪忍して頂戴」と云つた。代助は憐れな心持がした。

代助は其夜九時頃平岡の家を辭した。辭する前、自分の紙入の中に有るものを出して、三千代に渡した。其時は、腹の中で多少の工夫を費やした。彼は先づ何氣なく懷中物を胸の所で開けて、中にある紙幣を、勘定もせずば攪んで、是を上げるから御使なさいと無雜作に三千代の前へ出した。三千代は、下女を憚かる様な低い聲で、

「そんな事を」と、却つて兩手をびたりと身體へ付けて仕舞つた。代助は然し自分の手を引き込めなかつた。

「指環を受取るなら、これを受取つても、同じ事でせう。紙の指環だと思つて御貰ひなさい」代助は笑ひながら、斯う云つた。三千代はでも、餘りだからとまだ躊躇した。代助は、平岡に知れると叱られるのかと聞いた。三千代は叱られるか、賞められるか、明らかに分らなかつたので、矢張り愚圖々々してゐた。代助は、叱られるなら、平岡に黙つてゐたら可からうと注意した。三千代はまだ手を出さなかつた。代助は無論出したものを引き込める譯に行かなかつた。已を得ず、少し及び腰になつて、掌を三千代の胸の側迄持つて行つた。同時に自分の顔も一尺許の距



離に近寄せて、

「大丈夫だから、御取んなさい」と確りした低い調子で云つた。三千代は顎を襟の中へ埋める様に後へ引いて、無言の儘右の手を前へ出した。紙幣は其上に落ちた。其時三千代は長い睫毛を二三度打ち合はした。さうして、掌に落ちたものを帯の間に挟んだ。

「又来る。平岡君によろしく」と云つて、代助は表へ出た。町を横断して小路へ下ると、あたりは暗くなつた。代助は美しくい夢を見た様に、暗い夜を切つて歩いた。彼は三十分と立たないうちに、吾家の門前に来た。けれども門を潜る氣がしなかつた。彼は高い星を戴いて、静かな屋敷町をぐる／＼徘徊した。自分では、夜半迄歩きつゞけても疲れる事はなからうと思つた。兎角するうち、又自分の家の前へ出た。中は静かであつた。門野と婆さんは茶の間で世間話をしてゐたらしい。

「大變遅うがしたな。明日は何時の汽車で御立ちですか」と玄關へ上るや否や問を掛けた。代助は、微笑しながら、

「明日も御已めだ」と答へて、自分の室へ這入つた。そこには床がもう敷いてあつた。代助は

先刻栓を抜いた香水を取つて、括枕の上に一滴垂らした。夫では何だか物足りなかつた。壘を持つた儘、立つて室の四隅へ行つて、そこに一二滴づゝ振りかけた。斯様に打ち興じた後、白地の浴衣に着換へて、新しい小搔卷の下に安かな手足を横たへた。さうして、薔薇の香のする眠に就いた。

眼が覺めた時は、高い日が椽に黄金色の震動を射込んでゐた。枕元には新聞が二枚揃えてあつた。代助は、門野が何時、雨戸を引いて、何時新聞を持つて来たか、丸で知らなかつた。代助は長い伸を一つして起き上つた。風呂場で身體を拭いてゐると、門野が少し狼狽へた容子で遣つて来て、

「青山から御兄いさんが御見えになりました」と云つた。代助は今直行く旨を答へて、奇麗に身體を拭き取つた。座敷はまだ掃除が出来てゐるか、ゐないかであつたが、自分で飛び出す必要もないと思つたから、急ぎもせず、いつもの通り、髪を分けて剃を中て、悠々と茶の間へ歸つた。そこでは流石にゆつくりと膳につく氣も出なかつた。立ちながら紅茶を一杯啜つて、タエルで一寸口髭を摩つて、それを、其所へ放り出すと、すぐ客間へ出て、

らかれそ



「やあ兄さん」と挨拶をした。兄は例の如く、色の濃い葉巻の、火の消えたのを、指の股に挟んで、平然として代助の新聞を讀んでゐた。代助の顔を見るや否や、

「此室は大變好い香がする様だが、御前の頭かい」と聞いた。

「僕の頭の見える前からでせう」と答へて、昨夜の香水の事を話した、兄は、落ち付いて、

「は、あ、大分洒落た事をやるな」と云つた。

兄は滅多に代助の所へ来た事のない男であつた。たまに來れば必ず來なくつてならない用事を持つてゐた。さうして、用を済ますとさつさと歸つて行つた。今日も何事か起つたに違ないと代助は考へた。さうして、それは昨日誠太郎を好加減に胡魔化して返した反響だらうと想像した。五六分雑談をしてゐるうちに、兄はとう／＼斯う云ひ出した。

「昨夕誠太郎が歸つて來て、叔父さんは明日から旅行するつて云ふ話だから、出て來た」

「え、實は今朝六時頃から出やうと思つてね」と代助は嘘の様な事を、至極冷靜に答へた。兄も眞面目な顔をして、

「六時に立てる位な早起の男なら、今時分わざわざ青山から遣つて來やしない」と云つた。改

めて用事を聞いて見ると、矢張り豫想の通り肉薄の遂行に過ぎなかつた。即ち今日高木と佐川の娘を呼んで午餐を振舞ふ筈だから、代助にも列席しろと云ふ父の命令であつた。兄の語る所によると、昨夕誠太郎の返事を聞いて、父は大いに機嫌を悪くした。梅子は氣を揉んで、代助の立たない前に逢つて、旅行を延ばさせると云ひ出した。兄はそれを留めたさうである。

「なに彼奴が今夜中に立つものか、今頃は革靴の前へ坐つて考へ込んでゐる位のものだ。明日になつて見ろ、放つて置いても遣つて來るからつて、己が姉さんを安心させたのだよ」と誠吾は落付拂つてゐた。代助は少し忌々しくなつたので、

「ぢや、放つて置いて御覽なされば好いのに」と云つた。

「所が女と云ふものは、氣の短かいもので、御父さんに悪いからつて、今朝起きるや否や、己をせびるんだからね」と誠吾は可笑い様な顔もしなかつた。寧ろ迷惑さうに代助を眺めてゐた。代助は行くとも、行かないとも決答を與へなかつた。けれども兄に對しては、誠太郎同様に、要領を握らせないで返して仕舞ふ勇氣も出なかつた。其上午餐を斷つて、旅行するにしても、もう自分の懷中を當にする譯には行かなかつた。矢張り、兄とか嫂とか、もしくは父とか、いづれ反



對派の誰かを痛めなければ、身動が取れない位地にゐた。そこで、即かず離れずに、高木と佐川の娘の評判をした。高木には十年程前に一遍逢つた限であつたが、妙なもので、何處かに見覚えがあつて、此間歌舞伎座で眼に着いた時は、はてなと思つた。これに反して、佐川の娘の方は、ついで先達で、寫眞を手にした許であるのに、實物に接しても、丸で聯想が浮ばなかつた。寫眞は奇體なもので、先づ人間を知つてゐて、その方から、寫眞の誰彼を極めるのは容易であるが、その逆の、寫眞から人間を定める方は中々六づかしい。是を哲學にすると、死から生を出すのは不可能だが、生から死に移るのは自然の順序であると云ふ眞理に歸着する。

「私は左様考へた」と代助が云つた。兄は成程と答へたが別段感心した様子もなかつた。葉巻の短くなつて、口髭に火が付きさうなのを無暗に啣へ易えて、

「それで、必ずしも今日旅行する必要もないんだらう」と聞いた。

代助はないと答へざるを得なかつた。

「ぢや、今日餐を食ひに来てほしいんだらう」

代助は又好いと答へない譯に行かなかつた。

「ぢや、己はこれから、一寸他所へ廻るから、間違のない様に來てくれ」と相變らず多忙に見えた。代助はもう度胸を据ゑたから、何うでも構はないといふ氣で、先方に都合の好い返事を與へた。すると兄が突然、

「一體何うなんだ。あの女を貰ふ氣はないのか。好いぢやないか貰つたつて。さう撰り好みをする程女房に重きを置くと、何だか元祿時代の色男の様で可笑しいな。凡てあの時代の人間は男に限りず非常に窮屈な戀をした様だが、左様でもなかつたのかい。——まあ、どうでも好いから、成る可く年寄を怒らせない様に遣つてくれ」と云つて歸つた。

代助は座敷へ戻つて、しばらく、兄の警句を咀嚼してゐた。自分も結婚に對しては、實際兄と同意見であるとしたか考へられない。だから、結婚を勧める方でも、怒らないで放つて置くべきものだと、兄とは反對に、自分に都合の好い結論を得た。

兄の云ふ所によると、佐川の娘は、今度久し振に叔父に連れられて、見物旁上京したので、叔父の商用が濟み次第又連れられて國へ歸るのださうである。父が其機會を利用して、相互の關係に、永遠の利害を結び付やうと企てたのか、又は先達での旅行先で、此機會をも自發的に拵え



て歸つて来たのか、どつちにしても代助はあまり研究の餘地を認めなかつた。自分はたゞ是等の人と同じ食卓で、旨さうに午餐を味はつて見れば、社交上の義務は其所に終るものと考へた。もしそれより以上に、何等かの發展が必要になつた場合には、其時に至つて、始めて處置を付けるより外に道はないと思案した。

代助は婆さんと呼んで着物を出さした。面倒だと思つたが、敬意を表するために、紋付の夏羽織を着た。袴は一重のがなかつたから、家に行つて、父か兄かの穿く事に極めた。代助は神経質な割に、子供の時から習慣で、人中へ出るのを餘り苦しなかつた。宴會とか、招待とか、送別とかいふ機會があると、大抵は都合して出席した。だから、ある方面に知名な人の顔は大分覚えてゐた。其中には伯爵とか子爵とかいふ貴公子も交つてゐた。彼は斯んな人の仲間入をして、其仲間なりの交際に、損も得も感じなかつた。言語動作は何處へ出ても同じであつた。外部から見ると、其所が大變能く兄の誠吾に似てゐた。だから、よく知らない人は、此兄弟の性質を、全く同一型に屬するものと信じてゐた。

代助が青山に着いた時は、十一時五分前であつたが、御客はまだ來てゐなかつた。兄もまだ歸

らなかつた。嫂文がちやんと支度をして、座敷に坐つてゐた。代助の顔を見て、

「あなたも、随分亂暴ね。人を出し抜いて旅行するなんて」と、いきなり遣り込めた。梅子は場合によると、決して論理を有ち得ない女であつた。此場合にも、自分が代助を出し抜いた事は丸で氣が付いてゐない挨拶の仕方であつた。それが代助には愛嬌に見えた。で、直そこへ坐り込んで梅子の服装の品評を始めた。父は奥にゐると聞いたが、わざと行かなかつた。強ひられたとき、

「今に御客さんが來たら、僕が奥へ知らせに行く。其時挨拶をすれば好からう」と云つて、矢つ張り平常の様な無駄口を叩いてゐた。けれども佐川の娘に關しては、一言も口を切らなかつた。梅子は何とかして、話を其所へ持つて行かうとした。代助には、それが明らかに見えた。だから、猶空とぼけて離を取つた。

其うち待ち設けた御客が來たので、代助は約束通りすぐ父の所へ知らせに行つた。父は、案のじよう、

「左様か」とすぐ立ち上がった丈であつた。代助に小言を云ふ暇も何も無かつた。代助は座敷



へ引き返して来て、袴を穿いて、それから應接間へ出た。客と主人とはそこで悉く顔を合はせた。父と高木とが第一に話を始めた。梅子は重に佐川の令嬢の相手になつた。そこへ兄が今朝の通りの服装で、のつそりと這入つて来た。

「いや、何うも遅くなりまして」と客の方に挨拶をしたが、席に就いたとき、代助を振り返つて、「大分早かつたね」と小さな聲を掛けた。

食堂には應接室の次の間を使つた。代助は戸の開いた間から、白い卓布の角の際立つた色を認めて、午餐は洋食だと心づいた。梅子は一寸席を立つて、次の入口を覗きに行つた。それは父に、食卓の準備が出来上つた旨を知らせる爲であつた。

「では何うぞ」と父は立ち上がった。高木も會釋して立ち上がった。佐川の令嬢も叔父に繼いで立ち上がった。代助は其時、女の腰から下の、比較的細く長い事を發見した。食卓では、父と高木が、真中に向き合つた。高木の右に梅子が坐つて、父の左に令嬢が席を占めた。女同志が向き合つた如く、誠吾と代助も向き合つた。代助は五味臺を中に、少し斜に反れた位地から令嬢の顔を眺める事になつた。代助は其頬の肉と色が、著るしく後の窓から射す光線の影響を

受けて、鼻の境に暗過ぎる影を作つた様に思つた。其代り耳に接した方は、明らかに薄紅であつた。殊に小さい耳が、日の光を透してゐるかの如くデリケートに見えた。皮膚とは反對に、令嬢は黒い蔦色の大きな眼を有してゐた。此二つの對照から華やかな特長を生ずる令嬢の顔の形は、寧ろ丸い方であつた。

食卓は、人數が人數だけに、左程大きくはなかつた。部屋の廣さに比例して、寧ろ小さ過ぎる位であつたが、純白な卓布を、取り集めた花で綴つて、其中に肉刀と肉匙の色が冴えて輝いた。

卓上の談話は重に平凡な世間話であつた。始のうちは、それさへ餘り興味に乗らない様に見える。父は斯う云ふ場合には、よく自分の好きな書畫骨董の話を持ち出すのを常としてゐた。さうして氣が向けば、いくらでも、藏から出して来て、客の前に陳べたものである。父の御蔭で、代助は多少斯道に好悪を有てる様になつてゐた。兄も同様の原因から、畫家の名前位は心得てゐた。たゞし、此方は掛物の前に立つて、はあ仇英だね、はあ應舉だねと云ふ丈であつた。面白い顔もしないから、面白い様にも見えなかつた。それから眞偽の鑑定の爲に、虫眼鏡などを振り舞はさない所は、誠吾も代助も同じ事であつた。父の様に、こんな波は昔の人は描かないものだから、



法にかなつてゐない杯といふ批評は、雙方共に、未だ嘗て如何なる畫に對しても加へた事はなかつた。

父は乾いた會話に色彩を添へるため、やがて好きな方面の問題に觸れて見た。所が一二言で、高木はさう云ふ事に丸で無頓着な男であるといふ事が分つた。父は老巧の人だから、すぐ退却した。けれども雙方に安全な領分に歸ると、雙方共に談話の意味を感じなかつた。父は已を得ず、高木に何んな娛樂があるかを確めた。高木は特別に娛樂を持たない由を答へた。父は萬事休すといふ體裁で、高木を誠吾と代助に託して、しばらく談話の圈外に出た。誠吾は、何の苦もなく、神戸の宿屋から、楠公神社やら、手當り次第に話題を開拓して行つた。さうして、其中に自然令嬢の演すべき役割を拵えた。令嬢はたゞ簡単に、必要な言葉文を點じては逃げた。代助と高木とは、始め同志社を問題にした。それから亞米利加の大學の状況に移つた。最後にエマーソンやホーソーンの名が出た。代助は、高木に斯う云ふ種類の知識があるといふ事を確めたけれども、ただ確めた丈で、それより以上に深入もしなかつた。従つて文學談は單に二三の人名と書名に終つて、少しも發展しなかつた。

梅子は固より初から断えず口を動かしてゐた。其努力の重なるものは、無論自分の前にゐる令嬢の遠慮と沈黙を打ち崩すにあつた。令嬢は禮義上から云つても、梅子の間断なき質問に應じない譯に行かなかつた。けれども積極的に自分から梅子の心を動かさうと力めた形迹は殆んどなかつた。たゞ物を云ふときに、少し首を横に曲げる癖があつた。それすら代助には媚を賣るとは解釋出来なかつた。

令嬢は京都で教育を受けた。音楽は、始めは琴を習つたが、後にはピアノに易えた。ヴィオリンも少し稽古したが、此方は手の使ひ方が六づかしので、まあ遣らないと同じである。芝居は滅多に行つた事がなかつた。

「先達の歌舞伎座は如何でした」と梅子が聞いた時、令嬢は何とも答へなかつた。代助には夫が劇を解しないと云ふより、劇を輕蔑してゐる様を取れた。それなのに、梅子はつゞけて、同じ問題に就いて、甲の役者は何うだの、乙の役者は何だのと評し出した。代助は又嫂が論理を踏み外したと思つた。仕方がないから、横合から、

「芝居は御嫌ひでも、小説は御讀みになるでせう」と聞いて芝居の話を已めさせた。令嬢は其



時始めて、一寸代助の方を見た。けれども答は案外に判然してゐた。

「いえ小説も」

令嬢の答を待ち受けてゐた、主客はみんな聲を出して笑つた。高木は令嬢の爲に説明の勞を取つた。その云ふ所によると、令嬢の教育を受けたミス何とか云ふ婦人の影響で、令嬢はある點では殆んど清教徒の様に仕込まれてゐるのださうであつた。だから餘程時代後れだと、高木は説明のあとから批評さへ付け加へた。其時は無論誰も笑はなかつた。耶蘇教に對して、あまり好意を有つてゐない父は、

「それは結構だ」と賞めた。梅子は、さう云ふ教育の價値を全く解する事が出来なかつた。にも拘はらず、

「本當にね」と趣味に適はない不得要領の言葉を使つた。誠吾は梅子の言葉が、あまり重い印象を先方に與へない様に、すぐ問題を易えた。

「ぢや英語は御上手でせう」

令嬢はいゝえと云つて、心持顔を赤くした。

食事が済んでから、主客は又應接間に戻つて、話を始めたが、蠟燭を繼ぎ足した様に、新しい方へは急に火が移りさうにも見えなかつた。梅子は立つて、ピアノの蓋を開けて、

「何か一つ如何ですか」と云ひながら令嬢を顧みた。令嬢は固より席を動かさなかつた。

「ぢや、代さん、皮切に何か御遣り」と今度は代助に云つた。代助は人に聞かせる程の上手でないのを自覺してゐた。けれども、そんな辯解をすると、問答が理窟臭く、しつこくなる許だから、

「まあ、蓋を開けて御置なさい。今に遣るから」と答へたなり、何かなしに、無關係の事を話して置いてゐた。

一時間程して客は歸つた。四人は肩を揃へて玄關迄出た。奥へ這入る時、

「代助はまだ歸るんぢやなからうな」と父が云つた。代助はみんなから一足後れて、鴨居の上に両手が届く様な伸を一つした。それから、人のゐない應接間と食堂を少しうろ／＼して座敷へ来て見ると、兄と嫂が向き合つて何か話をしてゐた。

「おい、すぐ歸つちや不可ない。御父さんが何か用があるさうだ。奥へ御出」と兄はわざとら



しい眞面目な調子で云つた。梅子は薄笑ひをしてゐる。代助は黙つて頭を掻いた。

代助は一人で父の室へ行く勇氣がなかつた。何とか蚊とか云つて、兄弟夫婦を引張つて行かうとした。それが旨く成功しないので、とうとう其所へ坐り込んで仕舞つた。所へ小間使が来て、

「あの、若旦那様に一寸、奥迄入つしやる様に」と催促した。

「うん、今行く」と返事をして、それから、兄弟夫婦に斯ういふ理窟を述べた。——自分一人で父に逢ふと、父があゝ云ふ氣象の所へ持つて来て、自分がこんな圖法螺だから、殊によると大いに老人を怒らして仕舞ふかも知れない。さうすると、兄弟夫婦だつて、後から面倒くさい調停をしたり何かしなければならぬ。其方が却て迷惑になる譯だから、骨惜をせず今一寸一所に行つて呉れたら宜からう。

兄は議論が嫌な男なので、何んだ下らないと云はぬ許の顔をしたが、

「ぢや、さあ行かう」と立ち上がった。梅子も笑ひながらすぐに立つた。三人して廊下を渡つて父の室に行つて、何事も起らなかつたかの如く着坐した。

そこでは、梅子が如才なく、代助の過去に父の小言が飛ばない様な手加減をした。さうして談

話の潮流を、成るべく今歸つた來客の品評の方へ持つて行つた。梅子は佐川の令嬢を大變大人しさうな可い子だと賞めた。是には父も兄も代助も同意を表した。けれども、兄は、もし亞米利加のミスの教育を受けたといふのが本當なら、もう少しは西洋流にはきくしさうなものだと云ふ疑を立てた。代助は其疑にも賛成した。父と嫂は黙つてゐた。そこで代助は、あの大人しさは、羞恥む性質の大人さだから、ミスの教育とは獨立に、日本の男女の社交的關係から來たものだらうと説明した。父はそれも左うだと云つた。梅子は令嬢の教育地が京都だから、あゝなんぢやないかと推察した。兄は東京だつて、御前見た様な許はゐないと云つた。此時父は嚴正な顔をして灰吹を叩いた。次に、容色だつて十人並より可いちやありませんかと梅子が云つた。是には父も兄も異議はなかつた。代助も賛成の旨を告白した。四人は夫から高木の品評に移つた。温健の好人物と云ふ事で、其方はすぐ方付いて仕舞つた。不幸にして誰も令嬢の父母を知らなかつた。けれども、物堅い地味な人だと云ふ丈は、父が三人の前で保證した。父はそれを同縣下の多額納税議員の某から確めたのださうである。最後に、佐川家の財産に就ても話が出た。其時父は、あゝ云ふのは、普通の實業家より基礎が確りしてゐて安全だと云つた。



令嬢の資格が略定まつた時、父は代助に向つて、  
「大した異存もないだらう」と尋ねた。其語調と云ひ、意味と云ひ、何うするかね位の程度ではなかつた。代助は、

「左様ですな」と矢つ張り煮え切らない答をした。父はじつと代助を見てゐたが、段々皺の多い額を曇らした。兄は仕方なしに、

「まあ、もう少し善く考へて見るが可い」と云つて、代助の爲に餘裕を付けて呉れた。

十三

四日程してから、代助は又父の命令で、高木の出立を新橋迄見送つた。其日は眠い所を無理に早く起されて、寐足らない頭を風に吹かした所爲か、停車場に着く頃、髪の毛の中に風邪を引いた様な気がした。待合所に這入るや否や、梅子から顔色が可くないと云ふ注意を受けた。代助は何にも答へずに、帽子を脱いで、時々濡れた頭を抑えた。仕舞には朝奇麗に分けた髪がもぢやもぢやになつた。

プラットホームで高木は突然代助に向つて、

「何うです此汽車で、神戸迄遊びに行きませんか」と勧めた。代助はたゞ難有うと答へた丈であつた。愈汽車の出る間に、梅子はわざと、窓際に近寄つて、とくに令嬢の名を呼んで、

「近い内に又是非入らつしやい」と云つた。令嬢は窓のなかで、叮嚀に會釋したが、窓の外へは別段の言葉も聞えなかつた。汽車を見送つて、又改札場を出た四人りは、それぎり離れく々になつた。梅子は代助を誘つて青山へ連れて行かうとしたが、代助は頭を抑えて應じなかつた。

車に乗つてすぐ牛込へ歸つて、それなり書齋へ這入つて、仰向に倒れた。門野は一寸其様子を覗きに來たが、代助の平生を知つてゐるので、言葉も掛けず、椅子に引つ掛けてある羽織丈を抱へて出て行つた。

代助は寐ながら、自分の近き未來を何うなるものだらうと考へた。斯うして打遣つて置けば、是非共嫁を貰はなければならなくなる。嫁はもう今迄に大分斷つてゐる。此上斷れば、愛想を盡かされるか、本當に怒り出されるか、何方かになるらしい。もし愛想を盡かされて、結婚勧誘をこれ限り斷念して貰へれば、それに越した事はないが、怒られるのは甚だ迷惑である。と云つて、



進まぬものを貰ひませうと云ふのは今代人として馬鹿氣てゐる。代助は此デレンマの間に徘徊した。

彼は父と違つて、當初からある計畫を拵らえて、自然を其計畫通りに強ひる古風な人ではなかつた。彼は自然を以て人間の拵えた凡ての計畫よりも偉大なものと信じてゐたからである。だから父が、自分の自然に逆らつて、父の計畫通りを強ひるならば、それは、去られた妻が、離縁状態を楯に夫婦の關係を證據立てやうとする一般であると考へた。けれども、そんな理窟を、父に向つて述べる氣は、丸でなかつた。父を理攻にする事は困難中の困難であつた。其困難を冒した所で、代助に取つては何等の利益もなかつた。其結果は父の不興を招く丈で、理由を云はずに結婚を拒絶するのと撰む所はなかつた。

彼は父と兄と嫂の三人の中で、父の人格に尤も疑を置いた。今度の結婚にしても、結婚其物が必ずしも父の唯一の目的ではあるまいと迄推察した。けれども父の本意が何處にあるかは、固より明かに知る機會を興へられてゐなかつた。彼は子として、父の心意を斯様に揣摩する事を、不徳義とは考へなかつた。従つて自分丈が、多くの親子のうちで、尤も不幸なものであると云ふ様

な考は少しも起さなかつた。たゞ是がため、今日迄の程度より以上に、父と自分の間が隔つて來さうなのを不快に感じた。

彼は隔離の極端として、父子絶縁の状態を想像して見た。さうして其所に一種の苦痛を認めた。けれども、其苦痛は堪え得られない程度のもではなかつた。寧ろそれから生ずる財源の杜絶の方が恐ろしかつた。

もし馬鈴薯が金剛石より大切になつたら、人間はもう駄目である、代助は平生から考へてゐた。向後父の怒に觸れて、萬一金錢上の關係が絶えたとすれば、彼は厭でも金剛石を放り出して、馬鈴薯に嚙り付かなければならない。さうして其償には自然の愛が残る丈である。其愛の對象は他人の細君であつた。

彼は寐ながら、何時迄も考へた。けれども、彼の頭は何時迄も何處へも到着する事が出来なかつた。彼は自分の壽命を極める權利を持たぬ如く、自分の未來をも極め得なかつた。同時に、自分の壽命に、大抵の見當を付け得る如く、自分の未來にも多少の影を認めた。さうして、徒らに其影を捕捉しやうと企てた。



其時代助の腦の活動は、夕闇を驚ろかす蝙蝠の様な幻像をちらり／＼と産み出すに過ぎなかつた。其羽搏の光を追ひ掛けて寐てゐるうちに、頭が床から浮き上がつて、ふわ／＼する様に思はれて来た。さうして、何時の間にか軽い眠に陥つた。

すると突然誰か耳の傍で半鐘を打つた。代助は火事と云ふ意識さへまだ起らない先に眼を醒ました。けれども跳ね起きもせず寝てゐた。彼の夢に斯んな音の出るのは殆んど普通であつた。ある時はそれが正氣に返つた後迄も響いてゐた。五六日前彼は、彼の家の大いに揺れる自覺と共に眠を破つた。其時彼は明らかに、彼の下に動く壘の様を、肩と腰と脊の一部に感じた。彼は又夢に得た心臓の鼓動を、覺めた後迄持ち傳へる事が屢あつた。そんな場合には聖徒の如く、胸に手を當て、眼を開けた儘、じつと天井を見詰めてゐた。

代助は此時も半鐘の音が、じいんと耳の底で鳴り盡して仕舞ふ迄横になつて待つてゐた。それから起きた。茶の間へ来て見ると、自分の膳の上に簀垂が掛けて、火鉢の傍に据ゑてあつた。柱時計はもう十二時廻つてゐた。婆さんは、飯を済ました後と見えて、下女部屋で御櫃の上に肱を突いて居眠りをしてゐた。門野は何處へ行つたか影さへ見えなかつた。

代助は風呂場へ行つて、頭を濡らしたあと、獨り茶の間の膳に就いた。そこで、淋しい食事を済して、再び書齋に戻つたが、久し振りに今日は少し書見をしやうと云ふ心組であつた。

かねて讀み掛けてある洋書を、葉の挟んである所で開けて見ると、前後の關係を丸で忘れてゐた。代助の記憶に取つて斯う云ふ現象は寧ろ珍らしかつた。彼は學校生活の時代から一種の讀書家であつた。卒業の後も、衣食の煩なしに、購讀の利益を適意に收め得る身分を誇りにしてゐた。一頁も眼を通さないで、日を送ることがあると、習慣上何となく荒廢の感を催ふした。だから大抵な事故があつても、成るべく都合して、活字に親んだ。ある時は讀書そのものが、唯一なる自己の本領の様な氣がした。

代助は今茫然として、烟草を煙らしながら、讀み掛けた頁を二三枚あとへ繰つて見た。そこに何んな議論があつて、それが何う續くのか、頭を拵える爲に一寸骨を折つた。其努力は解から棧橋へ移る程樂ではなかつた。食ひ違つた断面の甲に迷付いてゐるものが、急に乙に移るべく餘儀なくされた様であつた。代助はそれでも辛抱して、約二時間程眼を頁の上に曝してゐた。が仕舞にと／＼堪え切れなくなつた。彼の讀んでゐるものは、活字の集合として、ある意味を以て、



彼の頭に映ずるには違ないが、彼の肉や血に廻る気色は一向見えなかつた。彼は氷囊を隔て、氷に食ひ付いた時の様に物足らなく思つた。

彼は書物を伏せた。さうして、こんな時に書物を讀むのは無理だと考へた。同時にもう安息する事も出来なくなつたと考へた。彼の苦痛は何時ものアンニユイではなかつた。何も爲るのが憊いと云ふのとは違つて、何か爲なくてはゐられない頭の状態であつた。

彼は立ち上がつて、茶の間へ来て、疊である羽織を又引掛た。さうして玄關に脱ぎ棄てた下駄を穿いて馳け出す様に門を出た。時は四時頃であつた。神樂坂を下りて、當もなく、眼に付いた第一の電車に乗つた。車掌に行先を問はれたとき、口から出任せの返事をした。紙入を開けたら、三千代に遣つた旅行費の餘りが、三折の深底の方にまだ這入つてゐた。代助は乗車券を買つた後で、札の數を調べて見た。

彼は其晩を赤坂のある待合で暮らした。其所で面白い話を聞いた。ある若くて美しい女が、去る男と關係して、其種を宿した所が、愈子を生む段になつて、涙を零して悲しがつた。後から其譚を聞いたら、こんな年で子供を生まれられるのは情ないからだと答へた。此女は愛を専ら

にする時機が餘り短か過ぎて、親子の關係が容赦もなく、若い頭の上を襲つて來たのに、一種の無定を感じたのであつた。それは無論堅氣の女ではなかつた。代助は肉の美と、靈の愛にのみ己れを捧げて、其他を顧みぬ女の心理状態として、此話を甚だ興味あるものと思つた。

翌日になつて、代助はどう／＼又三千代に逢ひに行つた。其時彼は腹の中で、先達て置いて來た金の事を、三千代が平岡に話したらうか、話さなかつたらうか、もし話したとすれば何んな結果を夫婦の上に生じたらうか、それが氣掛りだからと云ふ口實を拵らえた。彼は此氣掛が、自分を驅つて、凝と落ち付かれない様に、東西を引張回した揚句、遂に三千代の方に吹き付けるのだと解釋した。

代助は家を出る前に、昨夕着た肌着も單衣も悉く改めて氣を新にした。外は寒暖計の度盛の日を逐ふて騰る頃であつた。歩いてゐると、濕つばい梅雨が却つて待ち遠しい程熾んに日が照つた。代助は昨夕の反動で、此陽氣な空氣の中に落ちる自分の黒い影が苦になつた。廣い鍰の夏帽を被りながら、早く雨季に入れば好いと云ふ心持があつた。其雨季はもう二三日の眼前に逼つてゐた。彼の頭はそれを豫報するかの様に、どんよりと重かつた。



平岡の家の前へ来た時は、曇つた頭を厚く掩ふ髪の根元が息切れてゐた。代助は家に入る前に先づ帽子を脱いだ。格子には締めがしてあつた。物音を目的に裏へ回ると、三千代は下女と張物をしてゐた。物置の横へ立て掛けた張板の中途から、細い首を前へ出して、曲みながら、苦茶苦茶になつたものを丹念に引き伸ばしつゝあつた手を留めて、代助を見た。一寸は何とも云はなかつた。代助も、しばらくは唯立つてゐた。漸くにして、

「又来ました」と云つた時、三千代は濡れた手を振つて、馳け込む様に勝手から上がつた。同時に表へ回れと眼で合圖をした。三千代は自分で沓脱へ下りて、格子の締を外しながら、

「無用心だから」と云つた。今迄日の透る澄んだ空の下で、手を動かしてゐた所爲で、頬の所が熱つて見えた。それが額際へ来て何時もの様に蒼白く變つてゐる邊に、汗が少し煮染み出した。代助は格子の外から、三千代の極めて薄手な皮膚を眺めて、戸の開くのを靜かに待つた。三千代は、

「御待遠さま」と云つて、代助を誘ふ様に、一足横へ退いた。代助は三千代とすれ／＼になつて内へ這入つた。座敷へ来て見ると、平岡の机の前に、紫の座蒲團がちやんと据ゑてあつた。代

助はそれを見た時一寸厭な心持がした。土の和れない庭の色が黄色に光る所に、長い草が見苦しく生えた。

代助は又忙がしい所を、邪魔に来て濟まないといふ様な尋常な云譯を述べながら、此無趣味な庭を眺めた。其時三千代をこんな家へ入れて置くのは實際氣の毒だといふ氣が起つた。三千代は水いぢりで爪先の少しふやけた手を膝の上に重ねて、あまり退屈だから張物をしてゐた所だと云つた。三千代の退屈といふ意味は、夫が始終外へ出てゐて、單調な留守居の時間を無聊に苦しむと云ふ事であつた。代助はわざと、

「結構な身分ですね」と冷かした。三千代は自分の荒涼な胸の中を代助に訴へる様子もなかつた。黙つて、次の間へ立つて行つた。用筆筒の環を響かして、赤い天鵝絨で張つた小さい箱を持つて出て来た。代助の前へ坐つて、それを開けた。中には昔し代助の遣つた指環がちやんと這入つてゐた。三千代は、たゞ

「可いでせう、ね」と代助に謝罪する様に云つて、すぐ又立つて次の間へ行つた。さうして、世の中を憚る様に、記念の指環をそこ／＼に用筆筒に仕舞つて元の座に戻つた。代助は指環に



就ては何事も語らなかつた。庭の方を見て、

「そんなに閑なら、庭の草でも取つたら、何うです」と云つた。すると今度は三千代の方が黙つて仕舞つた。それが、少時續いた後で代助は又改ためて聞いた。

「此間の事を平岡君に話したんですか」

三千代は低い聲で、

「いゝえ」と答へた。

「ぢや、未だ知らないんですか」と聞き返した。

其時三千代の説明には、話さうと思つたけれども、此頃平岡はついぞ落ちついて宅にゐた事がないので、つい話しそびれて未だ知らせずと云ふ事であつた。代助は固より三千代の説明を嘘とは思はなかつた。けれども、五分の閑さへあれば夫に話される事を、今日迄それなりに爲てあるのは、三千代の腹の中に、何だか話し悪い或蟠まりがあるからだと思はずにはゐられなかつた。自分は三千代を、平岡に對して、それだけ罪のある人にして仕舞つたと代助は考へた。けれども夫は左程に代助の良心を螫すには至らなかつた。法律の制裁はいざ知らず、自然の制裁と

して、平岡も此結果に對して明かに責を分たなければならぬと思つたからである。

代助は三千代に平岡の近來の模様を尋ねて見た。三千代は例によつて多くを語る事を好まなかつた。然し平岡の妻に對する仕打が結婚當時と變つてゐるのは明かであつた。代助は夫婦が東京へ歸つた當時既にそれを見抜いた。夫から以後改まつて兩人の腹の中を聞いた事はないが、それが日毎に好くない方に、速度を加へて進行しつゝあるのは殆んど争ふべからざる事實と見えた。夫婦の間に、代助と云ふ第三者が點ぜられたがために、此疎隔が起つたとすれば、代助は此方面に向つて、もつと注意深く働らいたかも知れなかつた。けれども代助は自己の悟性に訴へて、さうは信ずる事が出来なかつた。彼は此結果の一部分を三千代の病氣に歸した。さうして、肉體上の關係が、夫の精神に反響を與へたものと斷定した。又其一部分を子供の死亡に歸した。それから、他の一部分を平岡の遊蕩に歸した。又他の一部分を會社員としての平岡の失敗に歸した。最後に、残りの一部分を、平岡の放埒から生じた經濟事狀に歸した。凡てを概括した上で、平岡は貫ふべからざる人を貫ひ、三千代は嫁ぐべからざる人に嫁いだのだと解決した。代助は心の中で痛く自分が平岡の依頼に應じて、三千代を彼の爲に周旋した事を後悔した。けれども自分が三千



代の心を動かすが爲に、平岡が妻から離れたとは、何うしても思ひ得なかつた。

同時に代助の三千代に對する愛情は、此夫婦の現在の關係を、必須條件として募りつゝある事もまた一方では否み切れなかつた。三千代が平岡に嫁ぐ前、代助と三千代の間柄は、どの位の程度迄進んでゐたかは、しばらく措くとしても、彼は現在の三千代には決して無頓着である譯には行かなかつた。彼は病氣に冒された三千代をたゞの昔の三千代よりは氣の毒に思つた。彼は小供を亡くした三千代をたゞの昔の三千代よりは氣の毒に思つた。彼は夫の愛を失ひつゝある三千代をたゞの昔の三千代よりは氣の毒に思つた。彼は生活難に苦しみつゝある三千代をたゞの昔の三千代よりは氣の毒に思つた。但し、代助は此夫婦の間を、正面から永久に引き放さうと試みる程大膽ではなかつた。彼の愛はさう逆上してはゐなかつた。

三千代の眼のあたり、苦しんでゐるのは經濟問題であつた。平岡が自力で給し得る丈の生活費を勝手の方へ回さない事は、三千代の口吻で慥であつた。代助は此點文でもまづ何うかしなければなるまいと考へた。それで、

「一つ私が平岡君に逢つて、能く話して見やう」と云つた。三千代は淋しい顔をして代助を見

た。旨く行けば結構だが、遣り損なへば益三千代の迷惑になる許だとは代助も承知してゐたので、強ひて左様しやうとも主張しなかつた。三千代は又立つて次の間から一封の書狀を持つて來た。書狀は薄青い狀袋へ這入つてゐた。北海道にゐる父から三千代へ宛たものであつた。三千代は狀袋の中から長い手紙を出して、代助に見せた。

手紙には向ふの思はしくない事や、物價の高くて活計にくい事や、親類も縁者もなくて心細い事や、東京の方へ出たいが都合はつくまいかと云ふ事や、——凡て憐れな事ばかり書いてあつた。代助は叮嚀に手紙を巻き返して、三千代に渡した。其時三千代は眼の中に涙を溜めてゐた。

三千代の父はかつて多少の財産と稱へらるべき田畠の所有者であつた。日露戦争の當時、人の勸に應じて、株に手を出して全く遣り損なつてから、潔く祖先の地を賣り拂つて、北海道へ渡つたのである。其後の消息は、代助も今此手紙を見せられる迄一向知らなかつた。親類はあれども無きが如しだとは三千代の兄が生きてゐる時分よく代助に語つた言葉であつた。果して三千代は、父と平岡ばかりを便に生きてゐた。

「貴方は羨ましいのね」と瞬きながら云つた。代助はそれを否定する勇氣に乏しかつた。しば



らくしてから又、

「何だつて、まだ奥さんを御貫ひなさらないの」と聞いた。代助は此間にも答へる事が出来なかつた。

しばらく黙然として三千代の顔を見てゐるうちに、女の頬から血の色が次第に退ぞいて行つて、普通よりは眼に付く程蒼白くなつた。其時代助は三千代と差向で、より長く坐つてゐる事の危険に、始めて気が付いた。自然の情合から流れる相互の言葉が、無意識のうちに彼等を驅つて、準繩の埒を踏み超えさせるのは、今二三分の裡にあつた。代助は固より夫より先へ進んでも、猶素知らぬ顔で引返し得る、會話の方を心得てゐた。彼は西洋の小説を讀むたびに、そのうちに出て来る男女の情話が、あまりに露骨で、あまりに放肆で、且つあまりに直線的に濃厚なのを平生から怪んでゐた。原語で讀めば兎に角、日本には譯し得ぬ趣味のものと考へてゐた。従つて彼は自分と三千代との關係を發展させる爲に、舶來の臺詞を用ひる意志は毫もなかつた。少なくとも二人の間では、尋常の言葉で充分用が足りたのである。が、其所に、甲の位地から、知らぬ間に乙の位置に滑り込む危険が潜んでゐた。代助は辛うじて、今一步と云ふ際どい所で、踏み留まつた。

歸る時、三千代は玄關迄送つて来て、

「淋しくつて不可ないから、又來て頂戴」と云つた。下女はまだ裏で張物をしてゐた。

表へ出た代助は、ふら／＼と一丁程歩いた。好い所で切り上げたといふ意識があるべき筈であるのに、彼の心にはさう云ふ満足が些とも無かつた。と云つて、もつと三千代と對坐してゐて、自然の命ずるが儘に、話し盡して歸れば可かつたといふ後悔もなかつた。彼は、彼所で切り上げた時、五分十分の後切り上げて、必竟は同じ事であつたと思ひ出した。自分と三千代との現在の關係は、此前逢つた時、既に發展してゐたのだと思ひ出した。否、其前逢つた時既に、と思ひ出した。代助は二人の過去を順次に遡ぼつて見て、いづれの斷面にも、二人の間に燃る愛の炎を見出さない事はなかつた。必竟は、三千代が平岡に嫁ぐ前、既に自分に嫁いでゐたのも同じ事だと考へ詰めた時、彼は堪えがたき重いものを、胸の中に投げ込まれた。彼は其重量の爲に、足がふらつた。家に歸つた時、門野が、

「大變顔の色が悪い様です、何うかなさいましたか」と聞いた。代助は風呂場へ行つて、蒼い額から奇麗に汗を拭き取つた。さうして、長く延び過ぎた髪を冷水に浸した。



それから二日程代助は全く外出しなかつた。三日目の午後、電車に乗つて、平岡を新聞社に尋ねた。彼は平岡に逢つて、三千代の爲に充分話をする決心であつた。給仕に名刺を渡して、埃だらけの受付に待つてゐる間、彼はしばしば袂から手帛を出して、鼻を掩ふた。やがて、二階の應接間へ案内された。其所は風通しの悪い、蒸し暑い、陰氣な狭い部屋であつた。代助は此所で烟草を一本吹かした。編輯室と書いた戸口が始終開いて、人が出たり這入たりした。代助の逢ひに来た平岡も其戸口から現はれた。先達て見た夏服を着て、相變らず奇麗な襟とカフスを掛けてゐた。忙しさに、

「やあ、暫く」と云つて代助の前に立つた。代助も相手に唆かされた様に立ち上がった。二人は立ちながら一寸話をした。丁度編輯のいそがしい時で緩くり何うする事も出来なかつた。代助は改めて平岡の都合を聞いた。平岡はポケットから時計を出して見て、

「失敬だが、もう一時間程して来てくれないか」と云つた。代助は帽子を取つて、又暗い埃だらけの階段を下りた。表へ出ると、夫でも涼しい風が吹いた。

代助はあてもなく、其所いらを逍遙いた。さうして、愈平岡と逢つたら、どんな風に話を切

り出さうかと工夫した。代助の意は、三千代に刻下の安慰を、少しでも與へたい爲に外ならなかつた。けれども、夫が爲に、却つて平岡の感情を害する事があるかも知れないと思つた。代助は其悪結果の極端として、平岡と自分の間に起り得る破裂をさへ豫想した。然し、其時は何んな具合にして、三千代を救はうかと云ふ成案はなかつた。代助は三千代と相對づくで、自分等二人の間をあれ以上に何うかする勇氣を有たなかつたと同時に、三千代のために、何かしなくては居られなくなつたのである。だから、今日の會見は、理知の作用から出た安全の策と云ふよりも、寧ろ情の旋風に捲き込まれた冒険の働きであつた。其所に平生の代助と異なる點があらはれてゐた。けれども、代助自身は夫に氣が付いてゐなかつた。一時間の後彼は又編輯室の入口に立つた。さうして、平岡と一所に新聞社の門を出た。

裏通りを三四丁來た所で、平岡が先へ立つて或家に這入つた。座敷の軒に釣葱が懸つて、狭い庭が水で一面に濡れてゐた。平岡は上衣を脱いで、すぐ胡坐をかいた。代助は左程暑いとも思はなかつた。團扇は手にした丈で済んだ。

會話は新聞社内の有様から始まつた。平岡は忙しい様で却つて樂な商賣で好いと云つた。其語



氣には別に負惜みの様子も見えなかつた。代助は、それは無責任だからだらうと調戲つた。平岡は眞面目になつて、辯解をした。さうして、今日の新聞事業競争の烈しくて、機敏な頭を要するものはないと云ふ理由を説明した。

「成程たゞ筆が達者な丈ぢや仕様があるまいよ」と代助は別に感服した様子を見せなかつた。すると、平岡は斯う云つた。

「僕は經濟方面の係りだが、單にそれ丈でも中々面白い事實が擧がつてゐる。ちと、君の家の會社の内幕でも書いて御覽に入れやうか」

代助は自分の平生の觀察から、斯んな事を云はれて、驚ろく程ぼんやりしては居なかつた。

「書くのも面白いだらう。其代り公平に願ひたいな」と云つた。

「無論嘘は書かない積だ」

「いえ、僕の兄の會社ばかりでなく、一列一體に筆誅して貰ひたいと云ふ意味だ」

平岡は此時邪氣のある笑ひ方をした。さうして、

「日糖事件丈ぢや物足りないからね」と奥齒に物の挾まつた様に云つた。代助は黙つて酒を飲

んだ。話は此調子で段々はすみを失ふ様に見えた。すると平岡は、實業界の内狀に關聯するとも思つたものか、何かの拍子に、ふと、日清戦争の當時、大倉組に起つた逸話を代助に吹聴した。その時、大倉組は廣島で、軍隊用の食料品として、何百頭かの牛を陸軍に納める筈になつてゐた。それを毎日何頭かづゝ、納めて置いては、夜になると、そつと行つて偷み出して來た。さうして、知らぬ顔をして、翌日同じ牛を又納めた。役人は毎日々々同じ牛を何遍も買つてゐた。が仕舞に氣が付いて、一遍受取つた牛には焼印を押した。所がそれを知らずに、又偷み出した。のみならず、それを平氣に翌日連れて行つたので、とう／＼露見して仕舞つたのださうである。

代助は此話を聞いた時、その實社會に觸れてゐる點に於て、現代的滑稽の標本だと思つた。平岡はそれから、幸徳秋水と云ふ社會主義の人を、政府がどんなに恐れてゐるか云ふ事を話した。幸徳秋水の家の前と後に巡查が二三人宛晝夜張番をしてゐる。一時は天幕を張つて、其中から覗つてゐた。秋水が外出すると、巡查が後を付ける。萬一見失ひでもしやうものなら非常な事件になる。今本郷に現はれた、今神田へ來たと、夫から夫へと電話が掛つて東京市中大騒ぎである。新宿警察署では秋水一人の爲に月々百圓使つてゐる。同じ仲間の館屋が、大道で飴細工を拵えて



ゐると、白服の巡查が、館の前へ鼻を出して、邪魔になつて仕方がない。是も代助の耳には、眞面目な響を興へなかつた。

「矢つ張り現代的滑稽の標本ぢやないか」と平岡は先刻の批評を繰り返しながら、代助を挑んだ。代助はさうさと笑つたが、此方面にはあまり興味が無いのみならず、今日は平生の様に普通の世間話をする氣でないで、社會主義の事はそれなりにして置いた。先刻平岡の呼ぼうと云ふ藝者を無理に已めさせたのも是が爲であつた。

「實は君に話したい事があるんだが」と代助は遂に云ひ出した。すると、平岡は急に様子を變へて、落ち付かない眼を代助の上に注いだ。が、卒然として、

「そりや、僕も疾うから、何うかする積なんだけれども、今の所ちや仕方がない。もう少し待つて呉れ玉へ。其代り君の兄さんや御父さんの事も、斯うして書かすにゐるんだから」と代助は意表な返事をした。代助は馬鹿々々しいと云ふより、寧ろ一種の憎惡を感じた。

「君も大分變つたね」と冷かに云つた。

「君の變つた如く變つちまつた。斯う摺れちや仕方がない。だから、もう少し待つて呉れ給へ」

と答へて、平岡はわざとらしい笑ひ方をした。

代助は平岡の言語の如何に拘はらず、自分の云ふ事は云はうと極めた。なまじい、借金の催促に來たんぢやない扱と辯明すると、又平岡が其裏を行くのが癪だから、向ふの疝違は、疝違で構はないとして置いて、此方は此方の歩を進める態度に出た。けれども第一に困つたのは、平岡の勝手元の都合を、三千代の訴へによつて知つたと切り出しては、三千代に迷惑が掛るかも知れない。と云つて、問題が其所に觸れなければ、忠告も助言も全く無益である。代助は仕方なしに迂回した。

「君は近來斯う云ふ所へ大分頻繁に出はいりを見ると見えて、家のものとは、みんな御馴染だね」

「君の様に金回りが好くないから、さう豪遊も出來ないが、交際だから仕方がないよ」と云つて、平岡は器用な手付をして猪口を口へ着けた。

「餘計な事だが、それで家の方の經濟は、收支償なふのかい」と代助は思ひ切つて猛進した。「うん。まあ、好い加減にやつてるさ」



斯う云つた平岡は、急に調子を落して、極めて氣のない返事をした。代助は夫限食ひ込めなくなつた。已を得ず、

「不斷は今頃もう家へ歸つてゐるんだらう。此間僕が訪ねた時は大分遅かつた様だが」と聞いた。すると、平岡は矢張問題を回避する様な語氣で、

「まあ歸つたり、歸らなかつたりだ。職業が斯う云ふ不規則な性質だから、仕方がないさ」と、半ば自分を辯護するためらしく、曖昧に云つた。

「三千代さんは淋しいだらう」

「なに大丈夫だ。彼奴も大分變つたからね」と云つて、平岡は代助を見た。代助は其眸の内に危しい恐れを感じた。ことによると、此夫婦の關係は元に戻せないと思つた。もし此夫婦が自然の斧で割き限に割かれるとすると、自分の運命は取り歸しの付かない未來を眼の前に控えてゐる。夫婦が離れれば離れる程、自分と三千代はそれ文接近しなければならぬからである。代助は即座の衝動の如くに云つた。――

「そんな事が、あらう筈がない。いくら、變つたつて、そりや唯年を取つた丈の變化だ。成る

べく歸つて三千代さんに安慰を與へて遣れ」

「君はさう思ふか」と云ひさま平岡はぐいと飲んだ。代助は、たゞ、

「思ふかつて、誰だつて左様思はざるを得んぢやないか」と半ば口から出任せに答へた。

「君は三千代を三年前の三千代と思つてるか。大分變つたよ。あゝ、大分變つたよ」と平岡は又ぐいと飲んだ。代助は覺えず胸の動悸を感じた。

「同なじだ、僕の見るところでは全く同じだ。少しも變つてゐやしない」

「だつて、僕は家へ歸つても面白くないから仕方がないぢやないか」

「そんな筈はない」

平岡は眼を丸くして又代助を見た。代助は少し呼吸が逼つた。けれども、罪あるものが雷火に打たれた様な氣は全たくなかつた。彼は平生にも似ず論理に合はない事をたゞ衝動的に云つた。然しそれは眼の前にゐる平岡のためだと固く信じて疑はなかつた。彼は平岡夫婦を三年前の夫婦にして、それを便に、自分を三千代から永く振り放さうとする最後の試みを、半ば無意識的に遣つた丈であつた。自分と三千代の關係を、平岡から隠す爲の、糊塗策とは毫も考へてゐなかつた。



代助は平岡に對して、左程に不信な言動を敢てするには、餘りに高尚であると、優に自己を評價してゐた。しばらくしてから、代助は又平生の調子に歸つた。

「だつて、君がさう外へ許出てゐれば、自然金も要る。従つて家の經濟も旨く行かなくなる。段々家庭が面白くなくなる丈ぢやないか」

平岡は、白襦衣の袖を腕の中途迄捲り上げて、

「家庭か。家庭もあまり下さつたものぢやない。家庭を重く見るのは、君の様な獨身者に限る様だね」と云つた。

此言葉を聞いたとき、代助は平岡が悪くなつた。あからさまに自分の腹の中を云ふと、そんなに家庭が嫌なら、嫌でよし、其代り細君を奪つちまふぞと判然知らせたかつた。けれども二人の間答は、其所迄行くには、まだ中々間があつた。代助はもう一遍外の方面から平岡の内部に觸れて見た。

「君が東京へ來たてに、僕は君から説教されたね。何か遣れつて」

「うん。さうして君の消極な哲學を聞かされて驚ろいた」

代助は實際平岡が驚ろいたらうと思つた。その時の平岡は、熱病に罹つた人間の如く行爲に渴いてゐた。彼は行爲の結果として、富を冀つてゐたか、もしくは名譽、もしくは權勢を冀つてゐたか。夫でなければ、活動としての行爲其物を求めてゐたか。それは代助にも分らなかつた。

「僕の様に精神的に敗殘した人間は、已を得ず、あゝ云ふ消極な意見も出すが。——元來意見があつて、人がそれに則るのぢやない。人があつて、其人に適した様な意見が出て來るのだから、僕の説は僕に通用する丈だ。決して君の身の上を、あの説で、何うしやうの斯うしやうのと云ふ譯ぢやない。僕はあの時の君の意氣に敬服してゐる。君はあの時自分で云つた如く、全く活動の人だ。是非共活動して貰ひたい」

「無論大いに遣る積だ」

平岡の答はたゞ此一句限であつた。代助は腹の中で首を傾けた。

「新聞で遣る積かね」

平岡は一寸躊躇した。が、やがて、判然云ひ放つた。——

「新聞にゐるうちは、新聞で遣る積だ」



「大いに要領を得てゐる。僕だつて君の一生涯の事を聞いてゐるんぢやないから、返事はそれで澤山だ。然し新聞で君に面白い活動が出来るかね」

「出来る積だ」と平岡は簡明な挨拶をした。

話は此所迄来ても、たゞ抽象的に進んだ丈であつた。代助は言葉の上でこそ、要領を得たが、平岡の本體を見届ける事は些とも出来なかつた。代助は何となく責任のある政府委員か辯護士を相手にしてゐる様な氣がした。代助は此時思ひ切つた政略的な御世辭を云つた。それには軍神廣瀬中佐の例が出て来た。廣瀬中佐は日露戦争のときに、閉塞隊に加はつて斃れたため、當時の人から偶像視されて、とう／＼軍神と迄崇められた。けれども、四五年後の今日に至つて見ると、もう軍神廣瀬中佐の名を口にするものも殆んどなくなつて仕舞つた。英雄の流行廢はこれ程急劇なものである。と云ふのは、多くの場合に於て、英雄とは其時代に極めて大切な人といふ事で、名前丈は偉さうだけれども、本來は甚だ實際的なものである。だから其大切な時機を通り越すと、世間は其資格を段々奪ひにかゝる。露西亞と戦争の最中こそ、閉塞隊は大事だらうが、平和克復の時は、百の廣瀬中佐も全くの凡人に過ぎない。世間は隣人に對して現金である如く、英雄に

對しても現金である。だから、斯う云ふ偶像にも亦常に新陳代謝や生存競争が行はれてゐる。さう云ふ譯で、代助は英雄などに擔がれたい見は更にない。が、もし茲に野心があり霸氣のある快男子があるとすれば、一時的の劍の力よりも、永久的の筆の力で、英雄になつた方が長持がする。新聞は其方面の代表的事業である。

代助は此所迄述べて見たが、元來が御世辭の上に、云ふ事があまり書生らしいので、自分の内心には多少滑稽に取れる位、氣が乗らなかつた。平岡は其返事に、

「いや難有う」と云つた丈であつた。別段腹を立てた様子も見えなかつたが、些とも感激してゐないのは、此返事でも明かであつた。

代助は少々平岡を低く見過ぎたのに恥ぢ入つた。實は此側から、彼の心を動かして、旨く油の乗つた所を、中途から轉がして、元の家庭へ滑り込ませるのが、代助の計畫であつた。代助は此迂遠で、又尤も困難の方法の出立點から、程遠からぬ所で、蹉跌して仕舞つた。

其夜代助は平岡と遂に愚圖々々で分れた。會見の結果から云ふと、何の爲に平岡を新聞社に訪ねたのだから、自分にも分らなかつた。平岡の方から見れば、猶更左様であつた。代助は必竟何し



に新聞社迄出掛て来たのか、歸る迄ついに問ひ詰めぐに済んで仕舞つた。

代助は翌日になつて獨り書齋で、昨夕の有様を何遍となく頭の中で繰り返した。二時間も一所に話してゐるうちに、自分が平岡に對して、比較的眞面目であつたのは、三千代を辯護した時丈であつた。けれども其眞面目は、單に動機の眞面目で、口にした言葉は矢張り加減な出任せに過ぎなかつた。嚴酷に云へば、嘘許と云つても可かつた。自分で眞面目だと信じてゐた動機でさへ、必竟は自分の未來を救ふ手段である。平岡から見れば、固より眞摯なものとは云へなかつた。まして、其他の談話に至ると、始めから、平岡を現在の立場から、自分の望む所へ落とし込まうと、たくらんで掛つた、打算のものであつた。従つて平岡を何うする事も出来なかつた。

もし思ひ切つて、三千代を引合に出して、自分の考へ通りを、遠慮なく正面から述べ立てたら、もつと強い事が云へた。もつと平岡を動搖する事が出来た。もつと彼の肺腑に入る事が出来た。に違ない。其代り遣り損へば、三千代に迷惑がかゝつて来る。平岡と喧嘩になる。かも知れない。代助は知らず／＼の間に、安全にして無能力な方針を取つて、平岡に接してゐた事を腑甲斐なく思つた。もし斯う云ふ態度で平岡に當りながら、一方では、三千代の運命を、全然平岡に委ね

て置けない程の不安があるならば、それは論理の許さぬ矛盾を、厚顔に犯してゐたと云はなければならぬ。

代助は昔の人が、頭腦の不明瞭な所から、實は利己本位の立場に居りながら、自らは固く人の爲と信じて、泣いたり、感じたり、激したり、して、其結果遂に相手を、自分の思ふ通りに動かし得たのを羨ましく思つた。自分の頭が、その位のぼんやりさ加減であつたら、昨夕の會談にも、もう少し感激して、都合のいゝ効果を収める事が出来たかも知れない。彼は人から、ことに自分の父から、熱誠の足りない男だと云はれてゐた。彼の解剖によると、事實は斯うであつた。——人間は熱誠を以て當つて然るべき程に、高尚な、眞摯な、純粹な、動機や行爲を常住に有するものではない。夫よりも、すつと下等なものである。其下等な動機や行爲を、熱誠に取り扱ふのは、無分別なる幼稚な頭腦の所有者か、然らざれば、熱誠を街つて、己れを高くする山師に過ぎない。だから彼の冷淡は、人間としての進歩とは云へまいが、よりよく人間を解剖した結果には外ならなかつた。彼は普通自分の動機や行爲を、よく吟味して見て、其あまりに、狡黠くつて、不眞面目で、大抵は虚偽を含んでゐるのを知つてゐるから、遂に熱誠な勢力を以てそれを遂行する氣に



なれなかつたのである。と、彼は断然信じてゐた。

此所で彼は一のデレンマに達した。彼は自分と三千代との關係を、直線的に自然の命する通り發展させるか、又は全然其反對に出で、何も知らぬ昔に返るか。何方かにしなければ生活の意義を失つたものと等しいと考へた。其他のあらゆる中途半端の方法は、偽に始つて、偽に終るより外に道はない。悉く社會的に安全であつて、悉く自己に對して無能無力である。と考へた。彼は三千代と自分の關係を、天意によつて、——彼はそれを天意としか考へ得られなかつた。

——醗酵させる事の社會的危險を承知してゐた。天意には叶ふが、人の掟に背く戀は、其戀の主の死によつて、始めて社會から認められるのが常であつた。彼は萬一の悲劇を二人の間に描いて、覺えず慄然とした。

彼は又反對に、三千代と永遠の隔離を想像して見た。其時は天意に従ふ代りに、自己の意志に殉ずる人にならなければ濟まなかつた。彼は其手段として、父や嫂から勧められてゐた結婚に思ひ至つた。さうして、此結婚を肯ふ事が、凡ての關係を新にするものと考へた。

#### 十四

自然の兒にならうか、又意志の人にならうかと代助は迷つた。彼は彼の主義として、彈力性のない硬張つた方針の下に、寒暑にさへすぐ反應を呈する自己を、器械の様に束縛するの愚を忌んだ。同時に彼は、彼の生活が、一大斷案を受くべき危機に達して居る事を切に自覺した。

彼は結婚問題に就て、まあ能く考へて見ると云はれて歸つたぎり、未だに、それを本氣に考へる閑を作らなかつた。歸つた時、まあ今日も虎口を逃れて難有かつたと感謝したぎり、放り出して仕舞つた。父からはまだ何とも催促されないが、此二三日は又青山へ呼び出されさうな氣がしてならなかつた。代助は固より呼び出される迄何も考へずに居る氣であつた。呼び出されたら、父の顔色と相談の上、又何とか即席に返事を拵らえる心組であつた。代助はあながち父を馬鹿にする了見ではなかつた。あらゆる返事は、斯う云ふ具合に、相手と自分を商量して、臨機に湧いて來るのが本當だと思つてゐた。

もし、三千代に對する自分の態度が、最後の一步前迄押し詰められた様な氣持がなかつたなら、



代助は父に對して無論さう云ふ所置を取つたらう。けれども、代助は今相手の顔色如何に拘はらず、手に持つた賽を投げなければならなかつた。上になつた目が、平岡に都合が悪からうと、父の氣に入らなからうと、賽を投げる以上は、天の法則通りになるより外に仕方はなかつた。賽を手に持つ以上は、又賽が投げられ可く作られたる以上は、賽の目を極めるものは自分以外にあらう筈はなかつた。代助は、最後の權威は自己にあるものと、腹のうちで定めた。父も兄も嫂も平岡も、決斷の地平線には出て來なかつた。

彼はたゞ彼の運命に對してのみ卑怯であつた。此四五日は掌に載せた賽を眺め暮らした。今日もまだ握つてゐた。早く運命が戶外から來て、其手を軽く敲いて呉れ、ば好いと思つた。が、一方では、まだ握つてゐられると云ふ意識が大層嬉しかつた。

門野は時々書齋へ來た。來る度に代助は洋卓の前に凝としてゐた。

「些と散歩にでも御出になつたら如何です。左様御勉強ぢや身體に悪いでせう」と云つた事が一二度あつた。成程顔色が好くなかつた。夏向になつたので、門野が湯を毎日沸かして呉れた。代助は風呂場に行くたびに、長い間鏡を見た。髯の濃い男なので、少し延びると、自分には大層

見苦しく見えた。觸つて、ざら／＼すると猶不愉快だつた。

飯は依然として、普通の如く食つた。けれども運動の不足と、睡眠の不規則と、それから、腦の屈託とで、排泄機能に變化を起した。然し代助はそれを何とも思はなかつた。生理状態は殆んど苦にする暇のない位、一つ事をぐる／＼回つて考へた。それが習慣になると、終局なく、ぐるぐる回つてゐる方が、埒の外へ飛び出す努力よりも却つて樂になつた。

代助は最後に不決斷の自己嫌惡に陥つた。已を得ないから、三千代と自分の關係を發展させる手段として、佐川の縁談を斷らうかと迄考へて、覺えず驚ろいた。然し三千代と自分の關係を絶つ手段として、結婚を許諾して見様かといふ氣は、ぐる／＼回轉してゐるうちに一度も出て來なかつた。

縁談を斷る方は單獨にも何遍となく決定が出來た。たゞ斷つた後、其反動として、自分をまとも三千代の上に浴せかけねば已まぬ必然の勢力が來るに違ないと考へると、其所に至つて、又恐ろしくなつた。

代助は父からの催促を心待に待つてゐた。しかし父からは何の便もなかつた。三千代にもう一



遍逢はうかと思つた。けれども、それ程の勇氣も出なかつた。

一番仕舞に、結婚は道德の形式に於て、自分と三千代を遮断するが、道德の内容に於て、何等の影響を二人の上に及ぼさうもないと云ふ考が、段々代助の腦裏に勢力を得て來た。既に平岡に嫁いだ三千代に對して、こんな關係が起り得るならば、此上自分に既婚者の資格を與へたからと云つて、同様の關係が續かない譯には行かない。それを續かないと見るのはたゞ表向の沙汰で、心を束縛する事の出來ない形式は、いくら重ねても苦痛を増す許である。と云ふのが代助の論法であつた。代助は縁談を斷るより外に道はなくなつた。

斯う決心した翌日、代助は久し振りに髪を刈つて髯を剃つた。梅雨に入つて二三日凄まじく降つた揚句なので、地面にも、木の枝にも、埃らしいものは悉くしつとりと靜まつてゐた。日の色は以前より薄かつた。雲の切れ間から、落ちて來る光線は、下界の濕り氣のために、半ば反射力を失つた様に柔らかに見えた。代助は床屋の鏡で、わが姿を映しながら、例の如くふつくらした頬を撫で、今日から愈々積極的生活に入るのだと思つた。

青山へ來て見ると、玄關に車が二臺程あつた。供待の車夫は蹴込に倚り懸つて眠つた儘、代助

の通り過ぎるの知らなかつた。座敷には梅子が新聞を膝の上へ乗せて、込み入つた庭の縁をぼんやり眺めてゐた。是もぼかんと眠むさうであつた。代助はいきなり梅子の前へ坐つた。

「御父さんは居ますか」

嫂は返事をする前に、一應代助の様子を、試験官の眼で見たま。

「代さん、少し瘠せた様ぢやありませんか」と云つた。代助は又頬を撫でて、

「そんな事も無いだらう」と打ち消した。

「だつて、色澤が悪いのよ」と梅子は眼を寄せて代助の顔を覗き込んだ。

「庭の所爲だ。青葉が映るんだ」と庭の植込の方を見たが、「だから貴方だつて、矢つ張り蒼いですよ」と續けた。

「私、此二三日具合が好くないんですもの」

「道理でぼかんとして居ると思つた。何うかしたんですか。風邪ですか」

「何だか知らないけれど生欠許り出て」

梅子は斯う答へて、すぐ新聞を膝から卸すと、手を鳴らして、小間使を呼んだ。代助は再び父



の在、不在を確めた。梅子は其間をもう忘れてゐた。聞いて見ると、玄關にあつた車は、父の客の乗つて来たものであつた。代助は長く懸くらなければ、客の歸る迄待たうと思つた。嫂は判然しないから、風呂場へ行つて、水で顔を拭いて來ると云つて立つた。下女が好い香のする葛の粽を、深い皿に入れて持つて來た。代助は粽の尾をぶら下げて、頻りに嗅いで見た。梅子が涼しい眼付になつて風呂場から歸つた時、代助は粽の一つを振子の様に振りながら、今度は、

「兄さんは何うしました」と聞いた。梅子はすぐ此陳腐な質問に答へる義務がないかの如く、しばらく椽鼻に立つて、庭を眺めてゐたが、

「二三日の雨で、苔の色が悉皆出た事」と平生に似合はぬ觀察をして、故の席に返つた。さうして、

「兄さんが何うしましたつて」と聞き直した。代助が先の質問を繰り返した時、嫂は尤も無頓着な調子で、

「何うしましたつて、例の如くですわ」と答へた。

「相變らず、留守勝ですか」

「えゝ、えゝ、朝も晩も滅多に宅に居た事はありません」

「姊さんは夫で淋しくはないですか」

「今更改まつて、そんな事を聞いたつて仕方がないぢやありませんか」と梅子は笑ひ出した。

調戲ふんだと思つたのか、あんまり小供染みてゐると思つたのか殆んど取り合ふ氣色はなかつた。代助も平生の自分を振り返つて見て、眞面目に斯んな質問を掛けた今の自分を、寧ろ奇體に思つた。今日迄兄と嫂の關係を長い間目撃してゐながら、ついぞ其所には氣が付かなかつた。嫂も亦代助の氣が付く程物足りない素振は見せた事がなかつた。

「世間の夫婦は夫で濟んで行くものかな」と獨言の様に云つたが、別に梅子の返事を豫期する氣でもなかつたので、代助は向の顔も見ず、たゞ疊の上に置いてある新聞に眼を落した。すると梅子は忽ち、

「何ですつて」と切り込む様に云つた。代助の眼が、其調子に驚ろいて、ふと自分の方に視線を移した時、



「だから、貴方が奥さんを御貰ひなすつたら、始終宅に許ゐて、たんと可愛がつて御上げなさいな」と云つた。代助は始めて相手が梅子であつて、自分が平生の代助でなかつた事を自覺した。それで成るべく不斷の調子を出さうと力めた。

けれども、代助の精神は、結婚謝絶と、其謝絶に次いで起るべき、三千代と自分の關係にばかり注がれてゐた。従つて、いくら平生の自分に歸つて、梅子の相手になる積でも、梅子の豫期してゐない、變つた音色が、時々會話の中に、思はず知らず出て來た。

「代さん、貴方今日は何うかしてゐるのね」と仕舞に梅子が云つた。代助は固より嫂の言葉を側面へ摺らして受ける法をいくらでも心得てゐた。然るに、それを遣るのが、輕薄のようで、又面倒な様で、今日は厭になつた。却つて眞面目に、何處が變か教へて呉れと頼んだ。梅子は代助の間が馬鹿氣てゐるので妙な顔をした。が、代助が益頼むので、では云つて上げませうと前置をして、代助の何うかしてゐる例を擧げ出した。梅子は勿論わざと眞面目を装つてゐるものと代助を解釋した。其中に、

「だつて、兄さんが留守勝で、嘸御淋しいでせうなんて、あんまり思遣りが好過ぎる事を仰し

やるからさ」と云ふ言葉があつた。代助は其所へ自分を挾んだ。

「いや、僕の知つた女に、左様云ふのが一人あつて、實は甚だ氣の毒だから、つい他の女の心持も聞いて見たくなつて、伺つたんで、決して冷かした積ぢやないんです」

「本當に？夫や一寸何てえ方なの」

「名前は云ひ悪いんです」

「ぢや、貴方が其旦那に忠告をして、奥さんをもつと可愛がるやうにして御上になれば可いのに」

代助は微笑した。

「姉さんも、さう思ひますか」

「當り前ですわ」

「もし其夫が僕の忠告を聞かなかつたら、何うします」

「そりや、何うも仕様がないわ」

「放つて置くんですか」



「放つて置かなけりや、何うなさるの」

「ぢや、其細君は夫に對して細君の道を守る義務があるでせうか」

「大變理責めなのね。夫や旦那の不親切の度合にも因るでせう」

「もし、其細君に好きな人があつたら何うです」

「知らないわ。馬鹿らしい。好きな人がある位なら、始めつから其方へ行つたら好いちやありませんか」

代助は黙つて考へた。しばらくしてから、姉さんと云つた。梅子は其深い調子に驚ろかされて、改めて代助の顔を見た。代助は同じ調子で猶云つた。

「僕は今度の縁談を斷らうと思ふ」

代助の巻烟草を持つた手が少し顫へた。梅子は寧ろ表情を失つた顔付をして、謝絶の言葉を聞いた。代助は相手の様子に頓着なく進行した。

「僕は今迄結婚問題に就いて、貴方に何返となく迷惑を掛けた上に、今度も亦心配して貰つてゐる。僕ももう三十だから、貴方の云ふ通り、大抵な所で、御勧め次第になつて好いのですが、

少し考があるから、この縁談もまあ已めにしたい希望です。御父さんにも、兄さんにも濟まないが、仕方がない。何も當人が氣に入らないと云ふ譯ではないが、斷るんです。此間御父さんによく考へて見ると云はれて、大分考へて見たが、矢つ張り斷る方が好い様だから斷ります。實は今日は其用で御父さんに逢ひに来たんですが、今御客の様だから、序と云つては失禮だが、貴方にも御話をして置きます」

梅子は代助の様子が眞面目なので、何時もの如く無駄口も入れずに聞いてゐたが、聞き終つた時、始めて自分の意見を述べた。それが極めて簡単な且つ極めて實際的な短かい句であつた。

「でも、御父さんは屹度御困りですよ」

「御父さんには僕が直に話すから構ひません」

「でも、話がある此所迄進んでゐるんだから」

「話が何所迄進んでゐやうと、僕はまだ貰ひますと云つた事はありません」

「けれども判然貰はないとも仰しやらなかつたでせう」

「それを今云ひに来た所です」



代助と梅子は向ひ合つたなり、しばらく黙つた。

代助の方では、もう云ふ可き事を云ひ盡くした様な気がした。少なくとも、是より進んで、梅子に自分を説明しやうといふ考へは丸で無かつた。梅子は語るべき事、聞くべき事を澤山持つてゐた。たゞ夫が咄嗟の間に、前の問答に繋がり好く、口へ出て來なかつたのである。

「貴方の知らない間に、縁談が何れ程進んだのか、私にも能く分らないけれど、誰にしたつて、貴方が、さう的確御断りなさらうとは思ひ掛けないうですもの」と梅子は漸くにして云つた。

「何故です」と代助は冷かに落ち付いて聞いた。梅子は眉を動かした。

「何故ですつて聞いたつて、理窟ぢやありませんよ」

「理窟でなくつても構はないから話して下さい」

「貴方の様にさう何遍断つたつて、詰り同じ事ぢやありませんか」と梅子は説明した。けれども、其意味がすぐ代助の頭には響かなかつた。不可解の眼を擧げて梅子を見た。梅子は始めて自分の本意を布衍しに掛かつた。

「つまり、貴方だつて、何時か一度は、御奥さんを貰ふ積なんでせう。厭だつて、仕方がない

ぢやありませんか。其様何時迄も我儘を云つた日には、御父さんに濟まない女ですわ。だからね。何うせ誰を持つて行つても氣に入らない貴方なだから、つまり誰を持たしたつて同じだらうつて云ふ譯なんです。貴方には何んな人を見せても駄目なんです。世の中に一人も氣に入る様なものは生きてやしませんよ。だから、奥さんと云ふものは、始めから氣に入らないものと、諦らめて貰ふより外に仕方がないぢやありませんか。だから私達が一番好いと思ふのを、黙つて貰へば、夫で何所も彼所も丸く治まつちまふから、——だから、御父さんが、殊によると、今度は、貴方に一から十迄相談して、何か爲さらないかも知れませんか。御父さんから見れば夫が當り前ですもの。さうでも、爲なくつちや、生きてる内に、貴方の奥さんの顔を見る事は出來ないぢやありませんか」

代助は落ち付いて嫂の云ふ事を聴いてゐた。梅子の言葉が切れても、容易に口を動かさなかつた。若し反駁をする日には、話が段々込み入る許で、此方の思ふ所は決して、梅子の耳へ通らな

いと考へた。けれども向ふの云ひ分を肯ふ氣は丸でなかつた。實際問題として、雙方が困る様になる許と信じたからである。それで、嫂に向つて、



「貴方の仰しやる所も、一理あるが、私にも私の考があるから、まあ打遣つて置いて下さい」と云つた。其調子には梅子の干渉を面倒がる氣色が自然と見えた。すると梅子は黙つてゐなかつた。

「そりや代さんだつて、小供ぢやないから、一人前の考の御有な事は勿論ですわ。私なんぞの要らない差出口は御迷惑でせうから、もう何にも申しませぬ。然し御父さんの身になつて御覽なさい。月々の生活費は貴方の要ると云ふ文今でも出して入らつしやるんだから、つまり貴方は書生時代よりも餘計御父さんの厄介になつてる譯でせう。さうして置いて、世話になる事は、元より世話になるが、年を取つて一人前になつたから、云ふ事は元の通りには聞かれないつて威張つたつて通用しないぢやありませんか」

梅子は少し激したと見えて猶も云ひ募らうとしたのを、代助が遮つた。

「だつて、女房を持ってば此上猶御父さんの厄介に爲らなくつちや爲らないでせう」

「宜いぢやありませんか、御父さんが、其方が好いと仰しやるんだから」

「ぢや、御父さんは、いくら僕の氣に入らない女房でも、是非持たせる決心なんですわね」

「だつて、貴方に好いたのがあればですけども、そんなのは日本中探して歩いたつて無いんぢやありませんか」

「何うして、夫が分ります」

梅子は張の強い眼を据ゑて、代助を見た。さうして、

「貴方は丸で代言人の様な事を仰しやるのね」と云つた。代助は蒼白くなつた額を嫂の傍へ寄せた。

「姉さん、私は好いた女があるんです」と低い聲で云ひ切つた。

代助は今迄冗談に斯んな事を梅子に向つて云つた事が能くあつた。梅子も始めはそれを本氣に受けた。そつと手を廻して真相を探つて見た杯といふ滑稽もあつた。事實が分つて以後は、代助の所謂好いた女は、梅子に對して一向利目がなくなつた。代助がそれを云ひ出して、丸で取り合はなかつた。でなければ、茶化してゐた。代助の方でも夫で平氣であつた。然し此場合文は彼に取つて、全く特別であつた。顔付と云ひ、眼付と云ひ、聲の低い底に籠る力と云ひ、此所迄押し通つて來た前後の關係と云ひ、凡ての點から云つて、梅子をはつと思はせない譯に行かなかつ



た。嫂は此短い句を、閃めく懐劍の如くに感じた。

代助は帯の間から時計を出して見た。父の所へ来てゐる客は申々歸りさうにもなかつた。空は又曇つて来た。代助は一旦引き上げて又改ためて、父と話を付けに出直す方が便宜だと考へた。

「僕は又來ます。出直して來て御父さんに御目に掛る方が好いでせう」と立ちにかゝつた。梅子は其間に回復した。梅子は飽く迄人の世話を焼く實意のある丈に、物を中途で投げる事の出来ない女であつた。抑える様に代助を引き留めて、女の名を聞いた。代助は固より答へなかつた。梅子は是非にと逼つた。代助は夫でも應じなかつた。すると梅子は何故其女を貰はないのかと聞き出した。代助は單純に貰へないから、貰はないのだと答へた。梅子は仕舞に涙を流した。他の盡力を出し抜いたと云つて恨んだ。何故始から打ち明けて話さないかと云つて責めた。かと思ふと、氣の毒だと云つて同情して呉れた。けれども代助は三千代に就ては、遂に何事も語らなかつた。梅子はどうも我を折つた。代助の愈歸ると云ふ間際になつて、

「ぢや、貴方から直に御父さんに御話なさるんですね。それ迄は私は黙つてゐた方が好いでせう」と聞いた。代助は黙つてゐて貰ふ方が好いか、話して貰ふ方が好いか、自分にも分らなかつ

た。

「左様ですね」と躊躇したが、「どうせ、斷りに來るんだから」と云つて嫂の顔を見た。

「ぢや、若し話す方が都合が好さうだつたら話しませう。もし又悪るい様だつたら、何にも云はずに置くから、貴方が始から御話なさい。夫が宜いでせう」と梅子は親切に云つて呉れた。

代助は、

「何分宜しく」と頼んで外へ出た。角へ來て、四谷から歩く積で、わざと、鹽町行の電車に乗つた。練兵場の横を通るとき、重い雲が西で切れて、梅雨には珍らしい夕陽が、眞赤になつて廣い原一面を照らしてゐた。それが向を行く車の輪に中つて、輪が回る度に鋼鐵の如く光つた。車は遠い原の中に小さく見えた。原は車の小さく見える程、廣かつた。日は血の様に毒々しく照つた。代助は此光景を斜めに見ながら、風を切つて電車に持つて行かれた。重い頭の中がふらふらした。終點迄來た時は、精神が身體を冒したのか、精神の方が身體に冒されたのか、厭な心持がして早く電車を降りたかつた。代助は雨の用心に持つた蝙蝠傘を、杖の如く引き摺つて歩いた。歩きながら、自分は今日、自ら進んで、自分の運命の半分を破壊したのも同じ事だと、心のう



ちに嘯いだ。今迄は父や嫂を相手に、好い加減な間隔を取つて、柔らかに自我を通して来た。今度は愈本性を露はさなければ、それを通し切れなくなつた。同時に、此方面に向つて、在來の満足を求め得る希望は少なくなつた。けれども、まだ逆戻りをする餘地はあつた。たゞ、夫には又父を胡魔化す必要が出て来るに違なかつた。代助は腹の中で今迄の我を冷笑した。彼は何うしても、今日の告白を以て、自己の運命の半分を破壊したものと認めたかつた。さうして、それから受ける打撃の反動として、思ひ切つて三千代の上に、掩つ被さる様に烈しく働き掛けたかつた。彼は此次父に逢ふときは、もう一步も後へ引けない様に、自分の方を拵へて置きたかつた。それで三千代と會見する前に、又父から呼び出される事を深く恐れた。彼は今日嫂に、自分の意思を父に話す話さないの自由を興へたのを悔いた。今夜にも話されれば、明日の朝呼ばれるかも知れない。すると今夜中に三千代に逢つて己れを語つて置く必要が出来る。然し夜だから都合がよくないと思つた。

津守を下りた時、日は暮れ掛かつた。士官學校の前を眞直に濠端へ出て、二三町來ると砂土原町へ曲がるべき所を、代助はわざと電車路に付いて歩いた。彼は例の如くに宅へ歸つて、一夜を

安閑と、書齋の中で暮すに堪えなかつたのである。濠を隔て、高い土手の松が、眼のつゞく限り黒く竝んでゐる底の方を、電車がしきりに通つた。代助は軽い箱が、軌道の上を、苦もなく滑つて行つては、又滑つて歸る迅速な手際に、輕快の感じを得た。其代り自分と同じ路を容赦なく往來する外濠線の車を、常よりは騒々敷悪んだ。牛込見附迄來た時、遠くの小石川の森に數點の灯影を認めた。代助は夕飯を食ふ考もなく、三千代のゐる方角へ向いて歩いて行つた。

約二十分の後、彼は安藤坂を上つて、傳通院の燒跡の前へ出た。大きな木が、左右から被さつてゐる間を左りへ抜けて、平岡の家の傍迄來ると、板塀から例の如く灯が射してゐた。代助は塀の本に身を寄せて、凝と様子を窺つた。しばらくは、何の音もなく、家のうちは全く静であつた。代助は門を潜つて、格子の外から、頼むと聲を掛けて見様かと思つた。すると、椽側に近く、びしやりと脛を叩く音がした。それから、人が立つて、奥へ這入つて行く氣色であつた。やがて話聲が聞えた。何の事が善く聴き取れなかつたが、聲は慥に、平岡と三千代であつた。話聲はしばらくで歇んで仕舞つた。すると又足音が椽側迄近付いて、どざりと尻を卸す音が手に取る様に聞えた。代助は夫なり塀の傍を退いた。さうして元來た道とは反對の方角に歩き出した。



しばらくは、何處を何う歩いてゐるか夢中であつた。其間代助の頭には今見た光景ばかりが煎り付く様に踴つてゐた。それが、少し衰へると、今度は自己の行爲に對して、云ふべからざる汚辱の意味を感じた。彼は何の故に、斯ゝる下劣な眞似をして、恰かも驚ろかされたかの如くに退却したのかを怪しんだ。彼は暗い小路に立つて、世界が今夜に支配されつゝある事を私かに喜んだ。しかも五月雨の重い空氣に鎖されて、歩けば歩く程、窒息する様な心持がした。神樂坂上へ出た時、急に眼がきら／＼した。身を包む無数の人と、無数の光が頭を遠慮なく焼いた。代助は逃げる様に薬店を上つた。

家へ歸ると、門野が例の如く漫然たる顔をして、

「大分遅うがしたな。御飯はもう御済みになりましたか」と聞いた。

代助は飯が欲しくなかつたので、要らない由を答へて、門野を追ひ歸す様に、書齋から退ぞけた。が、二三分立たない内に、又手を鳴らして呼び出した。

「宅から使は來やしなかつたかね」

「いゝえ」

代助は、

「ぢや、宜しい」と云つた限であつた。門野は物足りなさうに入口に立つてゐたが、

「先生は、何ですか、御宅へ御出になつたんぢや無かつたんですか」

「何故」と代助は六づかしい顔をした。

「だつて、御出掛になるとき、そんな御話でしたから」

代助は門野を相手にするのが面倒になつた。

「宅へは行つたさ。——宅から使が來なければそれで、好いぢやないか」

門野は不得要領に、

「はあ左様ですか」と云ひ放して出て行つた。代助は、父があらゆる世界に對してよりも、自分に對して、性急であるといふ事を知つてゐるので、ことによると、歸つた後から直使でも寄りしはしまいかと恐れて聞き糺したのであつた。門野が書生部屋へ引き取つたあとで、明日は是非共三千代に逢はなければならぬと決心した。

其夜代助は寐ながら、何う云ふ手段で三千代に逢はうかと云ふ問題を考へた。手紙を車夫に持



たせて宅へ呼びに遣れば、来る事は来るだらうが、既に今日、嫂との會談が済んだ以上は、明日にも、兄か嫂の爲に、向ふから襲はれないとも限らない。又平岡のうちへ行つて逢ふ事は代助に取つて一種の苦痛があつた。代助は已を得ず、自分にも三千代にも關係のない所で逢ふより外に道はないと思つた。

夜半から強く雨が降り出した。釣つてある蚊帳が、却つて寒く見える位な音がどう／＼と家を包んだ。代助は其音の中に夜の明けるのを待つた。

雨は翌日迄晴れなかつた。代助は濕っぽい椽側に立つて、暗い空模様を眺めて、昨夕の計畫を又變へた。彼は三千代を普通の待合杯へ呼んで、話をするのが不愉快であつた。已むなくんば、蒼い空の下と思つてゐたが、此天氣では夫も覺束なかつた。と云つて、平岡の家へ出向く氣は始めから無かつた。彼は何うしても、三千代を自分の宅へ連れて来るより外に道はないと極めた。門野が少し邪魔になるが、話のし具合では書生部屋に洩れない様にも出来るかと考へた。

午少し前迄は、ぼんやり雨を眺めてゐた。午飯を済ますや否や、護謨の合羽を引き掛けて表へ出た。降る中を神樂坂下迄来て青山の宅へ電話を掛けた。明日此方から行く積であるからと、機

先を制して置いた。電話口へは嫂が現れた。先達ての事は、まだ父に話さないでゐるから、もう一遍よく考へ直して御覽なさないかと云はれた。代助は感謝の辭と共に號鈴を鳴らして談話を切つた。次に平岡の新聞社の番號を呼んで、彼の出版社の有無を確かめた。平岡は社に出てゐると云ふ返事を得た。代助は雨を衝いて又坂を上つた。花屋へ這入つて、大きな白百合の花を澤山買つて、夫を提げて、宅へ歸つた。花は濡れた儘、二つの花瓶に分けて插した。まだ餘つてゐるのを、此間の鉢に水を張つて置いて、莖を短かく切つて、すば／＼放り込んだ。それから、机に向つて、三千代へ手紙を書いた。文句は極めて短かいものであつた。たゞ至急御目に掛つて、御話しい事があるから来て呉れると云ふ丈であつた。

代助は手を打つて、門野を呼んだ。門野は鼻を鳴らして現れた。手紙を受取りながら、「大變好い香ですな」と云つた。代助は、「車を持つて行つて、乗せて来るんだよ」と念を押した。門野は雨の中を乗りつけの帳場迄出

て行つた。代助は、百合の花を眺めながら、部屋を掩ふ強い香の中に、残りなく自己を放擲した。彼は此



嗅覺の刺激のうちに、三千代の過去を分明に認め、其過去には離すべからざる、わが昔の影が烟の如く這ひ纏はつてゐた。彼はしばらくして、

「今日始めて自然の昔に歸るんだ」と胸の中で云つた。斯う云ひ得た時、彼は年頃になく安慰を總身に覺えた。何故もつと早く歸る事が出来なかつたのかと思つた。始から何故自然に抵抗したのかと思つた。彼は雨の中に、百合の中に、再現の昔のなかに、純一無雜に平和な生命を見出した。其生命の裏にも表にも、慾得はなかつた、利害はなかつた、自己を壓迫する道徳はなかつた。雲の様な自由と、水の如き自然とがあつた。さうして凡てが幸であつた。だから凡てが美しかつた。

やがて、夢から覺めた。此一刻の幸から生ずる永久の苦痛が其時卒然として、代助の頭を冒して來た。彼の唇は色を失つた。彼は默然として、我と吾手を眺めた。爪の甲の底に流れてゐる血潮が、ぶる／＼顫へる様に思はれた。彼は立つて百合の花の傍へ行つた。唇が瓣に着く程近く寄つて、強い香を眼の眩う迄嗅いだ。彼は花から花へ唇を移して、甘い香に咽せて、失心して室の中に倒れたかつた。彼はやがて、腕を組んで、書齋と座敷の間を往つたり來たりした。彼の胸

は始終鼓動を感じてゐた。彼は時々椅子の角や、洋卓の前へ來て留まつた。それから又歩き出した。彼の心の動搖は、彼をして長く一所に留まる事を許さなかつた。同時に彼は何物をか考へる爲に、無暗な所に立ち留まらざるを得なかつた。

其内には段々移つた。代助は斷えず時計の針を見た。又覗く様に、軒から外の雨を見た。雨は依然として、空から眞直に降つてゐた。空は前よりも稍暗くなつた。重なる雲が一つ所で渦を捲いて、次第に地面の上へ押し寄せるかと怪しまれた。其時雨に光る車を門から中へ引き込んだ。輪の音が、雨を壓して代助の耳に響いた時、彼は蒼白い頬に微笑を洩しながら、右の手を胸に當てた。

三千代は玄關から、門野に連れられて、廊下傳ひに這入つて來た。銘仙の紺紵に、唐草模様の一重帯を締めて、此前とは丸で違つた服装をしてゐるので、一目見た代助には、新しい感じがした。色は不斷の通り好くなかつたが、座敷の入口で、代助と顔を合せた時、眼も眉も口もびたりと活動を中止した様に固くなつた。敷居に立つてゐる間は、足も動けなくなつたとしか受取れなかつた。三千代は固より手紙を見た時から、何事かを豫期して來た。其豫期のうちには恐れと、



喜と、心配とがあつた。車から降りて、座敷へ案内される迄、三千代の顔は其豫期の色をもつて漲つて居た。三千代の表情はそこで、はたと留まつた。代助の様子は三千代に夫丈の打衝を興へる程に強烈であつた。

代助は椅子の一つを指さした。三千代は命ぜられた通りに腰を掛けた。代助は其向に席を占めた。二人は始めて相對した。然し良少時は二人とも、口を開かなかつた。

「何か御用なの」と三千代は漸くにして問ふた。代助は、たゞ、

「え」と云つた。二人は夫限で、又しばらく雨の音を聴いた。

「何か急な御用なの」と三千代が又尋ねた。代助は又、

「え」と云つた。雙方共何時もの様に軽くは話し得なかつた。代助は酒の力を借りて、己れを語らなければならぬ様な自分を恥ぢた。彼は打ち明けるときは、必ず平生の自分でなければならぬものゝ兼て覺悟をして居た。けれども、改たまつて、三千代に對して見ると、始めて、一滴の酒精が戀しくなつた。ひそかに次の間へ立つて、例のキスキーを洋盃で傾け様かと思つたが、遂に其決心に堪えなかつた。彼は青天白日の下に、尋常の態度で、相手に公言し得る事では

ければ自己の誠でないと思つたからである。酔と云ふ牆壁を築いて、其掩護に乗じて、自己を大膽にするのは、卑怯で、残酷で、相手に汚辱を興へる様な氣がしてならなかつたからである。彼は社會の習慣に對しては、徳義的な態度を取る事が出来なくなつた、其代り三千代に對しては一點も不徳義な動機を蓄へぬ積であつた。否、彼をして卑吝に陥らしむる餘地が丸でない程に、代助は三千代を愛した。けれども、彼は三千代から何の用かを聞かれた時に、すぐ己れを傾ける事が出来なかつた。二度聞かれた時に猶躊躇した。三度目には、已を得ず、

「まあ、緩くり話ませう」と云つて、巻烟草に火を點けた。三千代の顔は返事を延ばされる度に悪くなつた。

雨は依然として、長く、密に、物に音を立て、降つた。二人は雨の爲に、雨の持ち來す音の爲に、世間から切り離された。同じ家に住む門野からも婆さんからも切り離された。二人は孤立の儘、白百合の香の中に封じ込められた。

「先刻表へ出て、あの花を買つて來ました」と代助は自分の周圍を顧みた。三千代の眼は代助に隨いて室の中を一回した。其後で三千代は鼻から強く息を吸ひ込んだ。



「兄さんと貴方と清水町にゐた時分の事を思ひ出さうと思つて、成るべく澤山買つて來ました」と代助が云つた。

「好い香ですこと」と三千代は翻がへる様に綻びた大きな花瓣を眺めてゐたが、夫から眼を放して代助に移した時、ほうと頬を薄赤くした。

「あの時分の事を考へると」と半分云つて已めた。

「覚えてゐますか」

「覚えてゐますわ」

「貴方は派手な半襟を掛けて、銀杏返しに結つてゐましたね」

「だつて、東京へ來立だつたんですもの。ぢき已めて仕舞つたわ」

「此間百合の花を持つて來て下さつた時も、銀杏返しぢやなかつたですか」

「あら、氣が付いて。あれは、あの時限なのよ」

「あの時はあんな鬚に結び度なつたんですか」

「え、氣迷れに一寸結つて見たかつたの」

「僕はその鬚を見て、昔を思ひ出した」

「さう」と三千代は恥づかしさうに肯つた。

三千代が清水町にゐた頃、代助と心安く口を聞く様になつてからの事だが、始めて國から出て來た當時の髪を代助から賞められた事があつた。其時三千代は笑つてゐたが、それを聞いた後でも、決して銀杏返しには結はなかつた。二人は今も此事をよく記憶してゐた。けれども雙方共口へ出しては何も語らなかつた。

三千代の兄と云ふのは寧ろ豁達な氣性で、懸隔てのない交際振から、友達には甚く愛されてゐた。ことに代助は其親友であつた。此兄は自分が豁達である丈に、妹の大人しいのを可愛がつてゐた。國から連れて來て、一所に家を持つたのも、妹を教育しなければならぬと云ふ義務の念からではなくて、全く妹の未來に對する情合と、現在自分の傍に引き着けて置きたい欲望とからであつた。彼は三千代を呼ぶ前、既に代助に向つて其旨を打ち明けた事があつた。其時代助は普通の青年の様に、多大の好奇心を以て此計畫を迎へた。

三千代が來てから後、兄と代助とは益親しくなつた。何方が友情の歩を進めたかは、代助自



身にも分らなかつた。兄が死んだ後で、當時を振り返つて見る毎に、代助は此親密の裡に一種の意味を認めない譯に行かなかつた。兄は死ぬ時迄それを明言しなかつた。代助も敢て何事をも語らなかつた。斯くして、相互の思はくは、相互の間の秘密として葬られて仕舞つた。兄は存生中に此意味を私に三千代に洩らした事があるかどうか、其所は代助も知らなかつた。代助はたゞ三千代の舉止動作と言語談話からある特別な感じを得た丈であつた。

代助は其頃から趣味の人として、三千代の兄に臨んでゐた。三千代の兄は其方面に於て、普通以上の感受性を持つて居なかつた。深い話になると、正直に分らないと自白して、餘計な議論を避けた。何處からか arbiter elegantiarum と云ふ字を見付出して来て、それを代助の異名のように濫用したのは、其頃の事であつた。三千代は隣りの部屋で黙つて兄と代助の話を聞いてゐた。仕舞にはとうとう arbiter elegantiarum と云ふ字を覺えた。ある時其意味を兄に尋ねて、驚られた事があつた。

兄は趣味に關する妹の教育を、凡て代助に委任した如くに見えた。代助を待つて啓發されべき妹の頭腦に、接觸の機會を出来る丈興へる様に力めた。代助も辭退はしなかつた。後から顧み

ると、自ら進んで其任に當つたと思はれる痕跡もあつた。三千代は固より喜んで彼の指導を受けた。三人は斯くして、巴の如くに回轉しつゝ、月から月へと進んで行つた。有意識か無意識か、巴の輪は回るに従つて次第に狭まつて来た。遂に三巴が一所に寄つて、丸い圓にならうとする少し前の所で、忽然其一つが缺けたため、残る二つは平衡を失つた。

代助と三千代は五年の昔を心置なく語り始めた。語るに従つて、現在の自己が遠退いて、段々と當時の學生時代に返つて来た。二人の距離は又元の様に近くなつた。

「あの時兄さんが亡くならないで、未だ達者でゐたら、今頃私は何うしてゐるでせう」と三千代は、其時を戀しがる様に云つた。

「兄さんが達者でゐたら、別の人になつて居る譯ですか」

「別な人にはなりませんわ。貴方は？」

「僕も同じ事です」

三千代は其時、少し窘める様な調子で、「あら嘘」と云つた。代助は深い眼を三千代の上に据ゑて、



「僕は、あの時も今も、少しも違つてゐやしないのです」と答へた儘、猶しばらくは眼を相手から離さなかつた。三千代は忽ち視線を外らした。さうして、半ば獨り言の様に、

「だつて、あの時から、もう違つてゐらしたんですもの」と云つた。

三千代の言葉は普通の談話としては餘りに聲が低過た。代助は消えて行く影を踏まへる如くに、すぐ其尾を捕えた。

「違やしません。貴方にはたゞ左様見える文です。左様見えなかつて仕方がないが、それは僻目だ」

代助の方は通例よりも熱心に判然した聲で自己を辯護する如くに云つた。三千代の聲は益低かつた。

「僻目でも何でも可くつてよ」

代助は黙つて三千代の様子を窺つた。三千代は始めから、眼を伏せてゐた。代助には其長い睫毛の顫へる様が能く見えた。

「僕の存在には貴方が必要だ。何うしても必要だ。僕は夫丈の事を貴方に話したい爲にわざわ

ざ貴方を呼んだのです」

代助の言葉には、普通の愛人の用ひる様な甘い文彩を含んでゐなかつた。彼の調子は其言葉と共に簡單で素朴であつた。寧ろ嚴肅の域に逼つてゐた。但、夫丈の事を語る爲に、急用として、わざ／＼三千代を呼んだ所が、玩具の詩歌に類してゐた。けれども、三千代は固より、斯う云ふ意味での俗を離れた急用を理解し得る女であつた。其上世間の小説に出て来る青春時代の修辭には、多くの興味を持つてゐなかつた。代助の言葉が、三千代の官能に華やかな何物をも興へなかつたのは、事實であつた。三千代がそれに渴いてゐなかつたのも事實であつた。代助の言葉は官能を通り越して、すぐ三千代の心に達した。三千代は顫へる睫毛の間から、涙を頬の上に流した。

「僕はそれを貴方に承知して貰ひたいのです。承知して下さい」

三千代は猶泣いた。代助に返事をする所ではなかつた。袂から手帛を出して顔へ當てた。濃い眉の一部分と、額と生際丈が代助の眼に残つた。代助は椅子を三千代の方へ摺り寄せた。

「承知して下さいと耳の傍で云つた。三千代は、まだ顔を蔽つてゐた。しやくり上げながら、



「餘りだわ」と云ふ聲が手帛の中で聞えた。それが代助の聴覺を電流の如くに冒した。代助は自分の告白が遅過ぎたと云ふ事を切に自覺した。打ち明けるならば三千代が平岡へ嫁ぐ前に打ち明けなければならぬ筈であつた。彼は涙と涙の間をぼつ／＼綴る三千代の此一語を聞くに堪えなかつた。

「僕は三四年前に、貴方に左様打ち明ければならなかつたのです」と云つて、無然として口を閉ぢた。三千代は急に手帛を顔から離した。臉の赤くなつた眼を突然代助の上に睜つて、

「打ち明けて下さらなくつても可いから、何故」と云ひ掛けて、一寸躊躇したが、思ひ切つて、

「何故棄て、仕舞つたんです」と云ふや否や、又手帛を顔に當て、又泣いた。

「僕が悪い。勘忍して下さい」

代助は三千代の手頸を執つて、手帛を顔から離さうとした。三千代は逆はうともしなかつた。手帛は膝の上に落ちた。三千代は其膝の上を見た儘、微かな聲で、

「残酷だわ」と云つた。小さい口元の肉が顫ふ様に動いた。

「残酷と云はれても仕方がありません。其代り僕は夫丈の罰を受けてゐます」

「何うして」と聞いた。

「貴方が結婚して三年以上になるが、僕はまだ獨身でゐます」

「だつて、夫は貴方の御勝手ぢやありませんか」

「勝手ぢやありません。貰はうと思つても、貰へないので。それから以後、宅のものから何遍結婚を勧められたか分りません。けれども、みんな斷つて仕舞ひました。今度も亦一人斷りました。其結果僕と僕の父との間が何うなるか分りません。然し何うなつても構はない、斷るんです。貴方が僕に復讐してゐる間は斷らなければならぬんです」

「復讐」と三千代は云つた。此二字を恐るゝものゝ如くに眼を働かした。「私は是でも、嫁に行つてから、今日迄一日も早く、貴方が御結婚なされば可いと思はないで暮らした事はありません」と稍改たまつた物の言ひ振であつた。然し代助はそれに耳を貸さなかつた。

「いや僕は貴方に何所迄も復讐して貰ひたいのです。それが本望なのです。今日斯うやつて、貴方を呼んで、わざ／＼自分の胸を打ち明けるのも、實は貴方から復讐されてゐる一部分としか



思やしません。僕は是で社会的に罪を犯したも同じ事です。然し僕はさう生れて来た人間なので、罪を犯す方が、僕には自然なのです。世間に罪を得ても、貴方の前に懺悔する事が出来れば、夫で澤山なんです。是程嬉しい事はないと思つてゐるんです」

三千代は涙の中で始めて笑つた。けれども一言も口へは出さなかつた。代助は猶己れを語る隙を得た。――

「僕は今更こんな事を貴方に云ふのは、残酷だと承知してゐます。それが貴方に残酷に聞こえれば聞こえる程僕は貴方に對して成功したも同様になるんだから仕方がない。其上僕はこんな残酷な事を打ち明けなければ、もう生きてゐる事が出来なくなつた。つまり我儘です。だから詫るんです」

「残酷では御座いませぬ。だから詫まるのはもう廢して頂戴」

三千代の調子は、此時急に判然した。沈んではゐたが、前に比べると非常に落ち着いた。然ししばらくしてから、又

「たゞ、もう少し早く云つて下さると」と云ひ掛けて涙ぐんだ。代助は其時斯う聞いた。――

「ぢや僕が生涯黙つてゐた方が、貴方には幸福だつたんですか」

「左様ぢやないのよ」と三千代は力を籠めて打ち消した。「私だつて、貴方が左様云つて下さ

らなければ、生きてゐられなくなつたかも知れませぬわ」

今度は代助の方が微笑した。

「夫ぢや構はないでせう」

「構はないより難有いわ。たゞ――」

「たゞ平岡に濟まないと云ふんでせう」

三千代は不安らしく首肯いた。代助は斯う聞いた。――

「三千代さん、正直に云つて御覽。貴方は平岡を愛してゐるんですか」

三千代は答へなかつた。見るうちに、顔の色が蒼くなつた。眼も口も固くなつた。凡てが苦痛の表情であつた。代助は又聞いた。

「では、平岡は貴方を愛してゐるんですか」

三千代は矢張り俯つ向いてゐた。代助は思ひ切つた判断を、自分の質問の上に與へやうとして、



既に其言葉が口迄出掛つた時、三千代は不意に顔を上げた。其顔には今見た不安も苦痛も殆んど消えてゐた。涙さへ大抵は乾いた。頬の色は固より蒼かつたが、唇は確として、動く気色はなかつた。其間から、低く重い言葉が、繋がない様に、一字づゝ出た。

「仕様がな。覺悟を極めませう」

代助は脊中から水を被つた様に顛へた。社會から逐ひ放たるべき二人の魂は、たゞ二人對ひ合つて、互を穴の明く程眺めてゐた。さうして、凡てに逆つて、互を一所に持ち來たした力を互と怖れ戦いた。

しばらくすると、三千代は急に物に襲はれた様に、手を顔に當てて泣き出した。代助は三千代の泣く様を見るに忍びなかつた。肱を突いて額を五指の裏に隠した。二人は此態度を崩さずに、戀愛の彫刻の如く、凝としてゐた。

二人は斯う凝としてゐる中に、五十年を眼のあたりに縮めた程の精神の緊張を感じた。さうして其緊張と共に、二人が相並んで存在して居ると云ふ自覺を失はなかつた。彼等は愛の刑と愛の贅とを同時に享けて、同時に雙方を切實に味はつた。

しばらくして、三千代は手帛を取つて、涙を奇麗に拭いたが、靜かに、

「私もう歸つてよ」と云つた。代助は、

「御歸りなさい」と答へた。

雨は小降になつたが、代助は固より三千代を獨り返す氣はなかつた。わざと車を雇はずに、自分で送つて出た。平岡の家迄附いて行く所を、江戸川の橋の上で別れた。代助は橋の上に立つて、三千代が横町を曲る迄見送つてゐた。夫から緩くり歩を回らしながら、腹の中で、

「萬事終る」と宣告した。

雨は夕方歇んで、夜に入つたら、雲がしきりに飛んだ。其中洗つた様な月が出た。代助は光を浴びる庭の濡葉を長い間椽側から眺めてゐたが、仕舞に下駄を穿いて下へ降りた。固より広い庭でない上に立木の數が存外多いので、代助の歩く積はたと無かつた。代助は其真中に立つて、大きな空を仰いだ。やがて、座敷から、晝間買った百合の花を取つて來て、自分の周圍に蒔き散らした。白い花瓣が點々として月の光に冴えた。あるものは、木下闇に仄めいた。代助は何をするともなく其間に曲んでゐた。



寐る時になつて始めて再び座敷へ上がった。室の中は花の香がまだ全く抜けてゐなかつた。

十五

三千代に逢つて、云ふべき事を云つて仕舞つた代助は、逢はない前に比べると、餘程心の平和に接近し易くなつた。然し是は彼の豫期する通りに行つた迄で、別に意外の結果と云ふ程のものではなかつた。

會見の翌日彼は永らく手に持つてゐた賽を思ひ切つて投げた人の決心を以て起きた。彼は自分と三千代の運命に對して、昨日から一種の責任を帯びねば濟まぬ身になつたと自覺した。しかも夫は自ら進んで求めた責任に違ひなかつた。従つて、それを自分の脊に負ふて、苦しいとは思へなかつた。その重みに押されるがため、却つて自然と足が前に出る様な氣がした。彼は自ら切り開いた此運命の斷片を頭に乗せて、父と決戦すべき準備を整へた。父の後には兄がゐた、嫂がゐた。是等と戦つた後には平岡がゐた。是等を切り抜けても大きな社會があつた。個人の自由と情實を毫も斟酌して呉れない器械の様な社會があつた。代助には此社會が今全然暗黒に見えた。代

助は凡てと戦ふ覺悟をした。

彼は自分で自分の勇氣と膽力に驚ろいた。彼は今日迄、熱烈を厭ふ、危きに近寄り得ぬ、勝負事を好まぬ、用心深い、太平の好紳士と自分を見做してゐた。徳義上重大な意味の卑怯はまだ犯した事がないけれども、臆病と云ふ自覺はどうしても彼の心から取り去る事が出来なかつた。

彼は通俗なある外國雜誌の購讀者であつた。其中のある號で、Mountain Accidents と題する一篇に遭つて、かつて心を駭かした。夫には高山を攀ぢ上る冒險者の、怪我過が澤山に並べてあつた。登山の途中雪崩れに壓されて、行き方知れずになつたものゝ骨が、四十年後に氷河の先へ引懸つて出た話や、四人の冒險者が懸崖の半腹にある、眞直に立つた大きな平岩を越すとき、肩から肩の上へ猿の様に重なり合つて、最上の一人の手が岩の鼻へ掛かるや否や、岩が崩れて、腰の繩が切れて、上の三人が折り重なつて、眞逆様に四番目の男の傍を遙かの下に落ちて行つた話などが、幾何となく載せてあつた間に、煉瓦の壁程急な山腹に蝙蝠の様に吸ひ付いた人間を二三ヶ所點綴した挿畫があつた。其時代助は其絶壁の横にある白い空間のあなたに、廣い空や、遙かの谷を想像して、怖ろしさから來る眩暈を、頭の中に再現せずには居られなかつた。



代助は今道徳界に於て、是等の登攀者と同一な地位に立つてゐると云ふ事を知つた。けれども自ら其場に臨んで見ると、怯む氣は少しもなかつた。怯んで猶豫する方が彼に取つては幾倍の苦痛であつた。

彼は一日も早く父に逢つて話をしたかつた。萬一の差支を恐れて、三千代が來た翌日、又電話を掛けて都合を聞き合せた。父は留守だと云ふ返事を得た。次の日又問ひ合せたら、今度は差支があると云つて斷られた。其次には此方から知らせる迄は來るに及ばんといふ挨拶であつた。代助は命令通り控へてゐた。其間、嫂からも兄からも便は一向なかつた。代助は始めは家のものが自分出来る丈け長い、反省再考の時間を與へる爲の策略ではあるまいかと推察して、平氣に構へてゐた。三度の食事も旨く食つた。夜も比較的安らかな夢を見た。雨の晴間には門野を連れて散歩を二度した。然し宅からは使も手紙も來なかつた。代助は絶壁の途中で休息する時間の長過ぎるのに安からずなつた。仕舞に思ひ切つて、自分の方から青山へ出掛けて行つた。兄は例の如く留守であつた。嫂は代助を見て氣の毒さうな顔をした。が、例の事件に就ては何にも語らなかつた。代助の來意を聞いて、では私が一寸奥へ行つて御父さんの御都合を伺つて來ませうと云

つて立つた。梅子の態度は、父の怒りから代助を庇ふ様子にも見えた。又彼を疎外する様にも取られた。代助は兩方の何れだらうかと煩つて待つてゐた。待ちながらも、何うせ覺悟の前だと何遍も口のうちに繰り返した。

奥から梅子が出て來る迄には、大分暇が掛つた。代助を見て、又氣の毒さうに、今日は御都合が悪いさうですよと云つた。代助は仕方なしに、何時來たら宜からうかと尋ねた。固より例の様な元氣はなく悄然とした問ひ振りであつた。梅子は代助の様子に同情の念を起した調子で、二三日中に屹度自分が責任を以て都合の好い時日を知らせるから今日は歸れと云つた。代助が内玄關を出る時、梅子はわざと送つて來て、

「今度こそ能く考へて入らつしやいよ」と注意した。代助は返事もせず門を出た。

歸る途中も不愉快で堪らなかつた。此間三千代に逢つて以後、味はう事を知つた心の平和を、父や嫂の態度で幾分か破壊されたと云ふ心持が路々募つた。自分は自分の思ふ通りを父に告げる、父は父の考へを遠慮なく自分に洩らす、それで衝突する、衝突の結果はどうあらうとも潔よく自分で受ける。是が代助の豫期であつた。父の仕打は彼の豫期以外に面白くないものであつた。其



仕打は父の人格を反射する丈夫丈多く代助を不愉快にした。

代助は途すがら、何を苦んで、父との會見を左迄に急いだものかと思ひ出した。元來が父の要求に對する自分の返事に過ぎないのだから、便宜は寧ろ、是を待ち受ける父の方にあるべき筈であつた。其父がわざとらしく自分を避ける様にして、面會を延ばすならば、それは自己の問題を解決する時間が遅くなると云ふ不結果を生ずる外に何も起り様がない。代助は自分の未來に關する主要な部分は、もう既に片付けて仕舞つた積でゐた。彼は父から時日を指定して呼び出される迄は、宅の方の所置を其儘にして放つて置く事に極めた。

彼は家に歸つた。父に對しては只薄暗い不愉快の影が頭に残つてゐた。けれども此影は近き未來に於て必ず其暗さを増してくるべき性質のものであつた。其他には眼前に運命の二つの潮流を認めた。一つは三千代と自分が是から流れて行くべき方向を示してゐた。一つは平岡と自分を是非共一所に捲き込むべき凄じいものであつた。代助は此間三千代に逢つたなりで、片片の方は捨てゝある。よし是から三千代の顔を見るにした所で、——また長い間見ずにゐる氣はなかつたが、——二人の向後取るべき方針に就て云へば、當分は一步も現在状態より踏み出さず見は持たなかつた。

此點に關して、代助は我ながら明瞭な計畫を拵えてゐなかつた。平岡と自分を運び去るべき將來に就ても、彼はたゞ何時、何事にでも用意ありと云ふ丈であつた。無論彼は機を見て、積極的に働らき掛ける心組はあつた。けれども具體的な案は一つも準備しなかつた。あらゆる場合に於て、彼の決して仕損じまいと誓つたのは、凡てを平岡に打ち明けると云ふ事であつた。従つて平岡と自分とで構成すべき運命の流は黒く恐ろしいものであつた。一つの心配は此恐ろしい暴風の中から、如何にして三千代を救ひ得べきかの問題であつた。

最後に彼の周圍を人間のあらん限り包む社會に對しては、彼は何の考も纏めなかつた。事實として、社會は制裁の權を有してゐた。けれども動機行爲の權は全く自己の天分から湧いて出るより外に道はないと信じた。かれは此點に於て、社會と自分との間には全く交渉のないものと認め進行する氣であつた。

代助は彼の小さな世界の中心に立つて、彼の世界を斯様に觀て、一順其關係比例を頭の中で調べた上、

「善からう」と云つて、又家を出た。さうして一二丁歩いて、乗り付けの帳場迄來て、奇麗で



早さうな奴を擇んで飛び乗つた。何處へ行く當もないのを好加減な町を名指して二時間程ぐるぐる乗り廻して歸つた。

翌日も書齋の中で前日同様、自分の世界の中心に立つて、左右前後を一應隈なく見渡した後、「宜しい」と云つて外へ出て、用もない所を今度は足に任せてぶらぶら歩いて歸つた。

三日目にも同じ事を繰り返した。が、今度は表へ出るや否や、すぐ江戸川を渡つて、三千代の所へ来た。三千代は二人の間に何事も起らなかつたかの様に、

「何故夫から入らつしやらなかつたの」と聞いた。代助は寧ろ其落ち付き拂つた態度に驚ろかされた。三千代はわざと平岡の机の前に据ゑてあつた蒲團を代助の前へ押し遣つて、

「何でそんなに、そわ／＼して居らつしやるの」と無理に其上に坐らした。

一時間ばかり話してゐるうちに、代助の頭は次第に穩やかになつた。車へ乗つて、當もなく乗り回すより、三十分でも好いから、早く此所へ遊びに来れば可かつたと思ひ出した。歸るとき代助は、

「又來ます。大丈夫だから安心して入らつしやい」と三千代を慰める様に云つた。三千代はた

だ微笑した丈であつた。

其夕方始めて父からの報知に接した。其時代助は婆さんの給仕で飯を食つてゐた。茶碗を膳の上へ置いて、門野から手紙を受取つて讀むと、明朝何時迄に御出の事といふ文句があつた。代助は、

「御役所風だね」と云ひながら、わざと端書を門野に見せた。門野は、

「青山の御宅からですか」と叮嚀に眺めてゐたが、別に云ふ事がないものだから、表を引つ繰り返して、

「何うも何ですな。昔の人は矢つ張り手蹟が好い様ですな」と御世辭を置き去りにして出て行つた。婆さんは先刻から暦の話をしきりに爲てゐた。みづのえだのかのとだの、八朔だの友引だの、爪を切る日だの普請をする日だのと頗る煩いものであつた。代助は固より上の空で聞いてゐた。婆さんは又門野の職の事を頼んだ。拾五圓でも宜いから何方へ出して遣つて呉れないかと云つた。代助は自分ながら、何んな返事をしたか分らない位氣にも留めなかつた。たゞ心のうちでは、門野所か、この己が危しい位だと思つた。



食事を終るや否や、本郷から寺尾が来た。代助は門野の顔を見て暫らく考へてゐた。門野は無雑作に、

「断りますか」と聞いた。代助は此間から珍らしくある會を二回缺席した。來客も逢はないで済むと思ふ分は兩度程謝絶した。

代助は思ひ切つて寺尾に逢つた。寺尾は何時もの様に、血眼になつて、何か探してゐた。代助は其様子を見て、例の如く皮肉で持ち切る氣にもなれなかつた。翻譯だらうが焼き直したらうが、生きてゐるうちは何處迄も遣る覺悟だから、寺尾の方がまだ自分より社會の兒らしく見えた。自分も失脚して、彼と同様の地位に置かれたら、果して何の位の仕事に堪えるだらうと思ふと、代助は自分に對して氣の毒になつた。さうして、自分が遠からず、彼よりも甚く失脚するのは、殆んど未發の事實の如く確だと諦めてゐたから、彼は侮蔑の眼を以て寺尾を迎へる譯には行かなかつた。

寺尾は、此間の翻譯を漸くの事で月末迄に片付けたら、本屋の方で、都合が悪いから秋迄出版を見合はせると云ひ出したので、すぐ勞力を金に換算する事が出來ずに、困つた結果遣つて來た

のであつた。では書肆と契約なしに手を着けたのかと聞くと、全く左様でもないらしい。と云つて、本屋の方が丸で約束を無視した様にも云はない。要するに曖昧であつた。たゞ困つてゐる事丈は事實らしかつた。けれども斯う云ふ手違に慣れた寺尾は、別に徳義問題として誰にも不満を抱いてゐる様にも見えなかつた。失敬だとか怪しからんと云ふのは、たゞ口の先許で、腹の中の屈托は、全然飯と肉に集注してゐるらしかつた。

代助は氣の毒になつて、當座の經濟に幾分の補助を與へた。寺尾は感謝の意を表して歸つた。歸る前に、實は本屋からも少しは前借はしたんだが、それは疾の昔に使つて仕舞つたんだと自白した。寺尾の歸つたあとで、代助はあゝ云ふのも一種の人格だと思つた。たゞ斯う樂に活計をたつて決して爲れる譯のものぢやない。今の所謂文壇が、あゝ云ふ人格を必要と認めて、自然に産み出した程、今の文壇は悲しむべき状況の下に呻吟してゐるのではなからうかと考へて茫乎した。

代助は其晩自分の前途をひどく氣に掛けた。もし父から物質的に供給の道を鎖された時、彼は果して第二の寺尾になり得る決心があるだらうかを疑つた。もし筆を執つて寺尾の眞似さへ出來



なかつたなら、彼は當然餓死すべきである。もし筆を執らなかつたら、彼は何をする能力があるだらう。

彼は眼を開けて時々蚊帳の外に置いてある洋燈を眺めた。夜中に燐寸を擦つて烟草を吹かした。寐返りを何遍も打つた。固より寐苦しい程暑い晩ではなかつた。雨が又ざあ／＼と降つた。代助は此雨の音で寐付くかと思ふと、又雨の音で不意に眼を覺ました。夜は半醒半睡のうちに明け離れた。

定刻になつて、代助は出掛けた。足駄穿で雨傘を提げて電車に乗つたが、一方の窓が締め切つてある上に、革紐にぶら下がつてゐる人が一杯なので、しばらくすると胸がむかついて、頭が重くなつた。睡眠不足が影響したらしく思はれるので、手を窮屈に伸ばして、自分の後丈を開け放つた。雨は容赦なく襟から帽子に吹き付けた。二三分の後隣の人の迷惑さうな顔に気が付いて、又元の通りに硝子窓を上げた。硝子の表側には、弾けた雨の珠が溜つて、往來が多少歪んで見えた。代助は首から上を振ぢ曲げて眼を外面に着けながら、幾たびか自分の眼を擦すつた。然し何遍擦つても、世界の恰好が少し變つて來たと云ふ自覺が取れなかつた。硝子を通して斜に遠方を

透かして見るときは猶左様いふ感じがした。

辨慶橋で乗り換えてからは、人もまばらに、雨も小降りになつた。頭も樂に濡れた世の中を眺める事が出來た。けれども機嫌の悪い父の顔が、色々な表情を以て彼の腦髓を刺戟した。想像の談話さへ明かに耳に響いた。

玄關を上つて、奥へ通る前に、例の如く一應 嫂に逢つた。嫂は、

「鬱陶しい御天氣ぢやありませんか」と愛想よく自分で茶を汲んで呉れた。然し代助は飲む氣にもならなかつた。

「御父さんが待つて御出でせうから、一寸行つて話をして來ませう」と立ち掛けた。嫂は不安らしい顔をして、

「代さん、成らう事なら、年寄に心配を掛けない様になさいよ。御父さんだつて、もう長い事はありませんから」と云つた。代助は梅子の口から、こんな陰氣な言葉を聞くのは始めてであつた。不意に穴倉へ落ちた様な心持がした。

父は烟草盆を前に控えて、俯向いてゐた。代助の足音を聞いても顔を上げなかつた。代助は父



の前へ出て、叮嚀に御辭儀をした。定めて六づかしい眼付をされると思ひの外、父は存外穩かなもので、

「降るのに御苦勞だつた」と勞はつて呉れた。

其時始めて氣が付いて見ると、父の頬が何時の間にかぐつと瘡けてゐた。元來が肉の多い方だつたので、此變化が代助には餘計目立つて見えた。代助は覺えず、

「何うか爲さいましたか」と聞いた。

父は親らしい色を一寸顔に動かした丈で、別に代助の心配を物にする様子もなかつたが、少時話してゐるうちに、

「已も大分年を取つてな」と云ひ出した。其調子が何時もの父とは全く違つてゐたので、代助は最前嫂の云つた事を愈々重く見なければならなくなつた。

父は年の所爲で健康の衰へたのを理由として、近々實業界を退く意志のある事を代助に洩らした。けれども今は日露戦争後の商工業膨脹の反動を受けて、自分の經營にかゝる事業が不景氣の極端に達してゐる最中だから、此難關を漕ぎ抜けた上でなくては、無責任の非難を免かれる事が

出来ないで、當分已を得ずに辛抱してゐるより外に仕方がないのだと云ふ事情を委しく話した。代助は父の言葉を至極尤もだと思つた。

父は普通の實業なるものゝ困難と危険と繁劇と、それ等から生ずる當事者の心の苦痛及び緊張の恐るべきを説いた。最後に地方の大地主の、一見地味であつて、其實自分等よりはつと鞏固の基礎を有して居る事を述べた。さうして、此比較を論據として、新たに今度の結婚を成立させやうと力めた。

「さう云ふ親類が一軒位あるのは、大變な便利で、且つ此際甚だ必要ぢやないか」と云つた。

代助は、父としては寧ろ露骨過ぎる此政略的結婚の申し出に對して、今更驚ろく程、始めから父を買ひ被つてはゐなかつた。最後の會見に、父が従來の假面を脱いで掛かつたのを、寧ろ快よく感じた。彼自身も、斯んな意味の結婚を敢てし得る程度の人間だと自ら見積てゐた。

其上父に對して何時にない同情があつた。其顔、其聲、其代助を動かさうとする努力、凡てに老後の憐れを認める事が出來た。代助はこれをも、父の策略とは受取り得なかつた。私は何うでも宜う御座いますから、貴方の御都合の好い様に御極めなさいと云ひたかつた。



けれども三千代と最後の會見を遂げた今更、父の意に叶ふ様な當座の孝行は代助には出来かねた。彼は元來が何方付かすの男であつた。誰の命令も文字通りに拜承した事のない代りには、誰の意見にも露に抵抗した試がなかつた。解釋のしやうでは、策士の態度とも取れ、優柔の生れ付とも思はれる遣口であつた。彼自身さへ、此二つの非難の何れかを聞いた時に、左様かも知れないと、腹の中で首を振らぬ譯には行かなかつた。然し其原因の大部分は策略でもなく、優柔でもなく、寧ろ彼に融通の利く兩つの眼が付いてゐて、雙方を一時に見る便宜を有してゐたからであつた。かれは此能力の爲に、今日迄一圖に物に向つて突進する勇氣を挫かれた。即かす離れず現狀に立ち竦んでゐる事が屢あつた。此現狀維持の外觀が、思慮の缺乏から生ずるのでなくて、却つて明白な判断に本いて起ると云ふ事實は、彼が犯すべからざる敢爲の氣象を以て、彼の信する所を斷行した時に、彼自身にも始めて解つたのである。三千代の場合、即ち其適例であつた。彼は三千代の前に告白した己れを、父の前で白紙にしやうとは想ひ到らなかつた。同時に父に對しては、心から氣の毒であつた。平生の代助が此際に執るべき方針は云はずして明らかであつた。三千代との關係を撤回する不便なしに、父に満足と與へる爲の結婚を承諾するに外ならな

つた。代助は斯くして雙方を調和する事が出来た。何方付かすに眞中へ立つて、黄え切らずに前進する事は容易であつた。けれども、今の彼は、不斷の彼とは趣を異にしてゐた。再び半身を埒外に挺でて、餘人と握手するのは既に遅かつた。彼は三千代に對する自己の責任を夫程深く重いものと信じてゐた。彼の信念は半ば頭の判断から來た。半ば心の憧憬から來た。二つのものが大きな濤の如くに彼を支配した。彼は平生の自分から生れ變つた様に父の前に立つた。彼は平生の代助の如く、成る可く口敷を利かすに控えてゐた。父から見れば何時もの代助と異なる所はなかつた。代助の方では却つて父の變つてゐるのに驚ろいた。實は此間から幾度も會見を謝絶されたのも、自分が父の意志に背く恐があるから父の方でわざと、延ばしたものと推してゐた。今日逢つたら、定めて苦い顔をされる事と覺悟を極めてゐた。ことよれば、頭から叱り飛ばされるかも知れないと思つた。代助には寧ろ其方が都合が好かつた。三分の一は、父の暴怒に對する自己の反動を、心理的に利用して、判然斷らうと云ふ下心さへあつた。代助は父の様子、父の言葉遣、父の主意、凡てが豫期に反して、自分の決心を鈍らせる傾向に出たのを心苦しう思つた。けれども彼は此心苦しさにさへ打ち勝つべき決心を蓄へた。



「貴方の仰しやる所は一々御尤もだと思ひますが、私には結婚を承諾する程の勇氣がありませんから、斷るより外に仕方がなからうと思ひます」ととう／＼云つて仕舞つた。其時父はたゞ代助の顔を見てゐた。良あつて、

「勇氣が要るのかい」と手に持つてゐた烟管を疊の上に放り出した。代助は膝頭を見詰めて黙つてゐた。

「當人が氣に入らないのかい」と父が又聞いた。代助は猶返事をしなかつた。彼は今迄父に對して己れの四半分も打ち明けてはゐなかつた。その御蔭で父と平和の關係を漸く持續して來た。けれども三千代の事丈は始めから決して隠す氣はなかつた。自分の頭の上に當然落ちかゝるべき結果を、策で避ける卑怯が面白くなかつたからである。彼はたゞ自白の期に達してゐないと考へた。従つて三千代の名は丸で口へは出さなかつた。父は最後に、

「ぢや何でも御前の勝手にするさ」と云つて苦い顔をした。

代助も不愉快であつた。然し仕方がないから、禮をして父の前を退がらうとした。ときに父は呼び留めて、

「己の方でも、もう御前の世話はせんから」と云つた。座敷へ歸つた時、梅子は待ち構へた様に、

「何うなすつて」と聞いた。代助は答へ様もなかつた。

## 十六

られそ

翌日眼が覺めても代助の耳の底には父の最後の言葉が鳴つてゐた。彼は前後の事情から、平生以上の重みを其内容に附着しなければならなかつた。少なくとも、自分丈では、父から受ける物質的の供給がもう絶えたものと覺悟する必要があるがあつた。代助の尤も恐るゝ時期は近づいた。父の機嫌を取り戻すには、今度の結婚を斷るにしても、あらゆる結婚に反對してはならなかつた。あらゆる結婚に反對しても、父を首肯させるに足る程の理由を、明白に述べなければならなかつた。代助に取つては二つのうち何れも不可能であつた。人生に對する自家の哲學の根本に觸れる問題に就いて、父を欺くのは猶更不可能であつた。代助は昨日の會見を回顧して、凡てが進むべき方向に進んだとしか考へ得なかつた。けれども恐ろしかつた。自己が自己に自然な因果を發展さ



せながら、其因果の重みを脊中に負つて、高い絶壁の端迄押し出された様な心持であつた。

彼は第一の手段として、何か職業を求めなければならぬと思つた。けれども彼の頭の中には職業と云ふ文字がある丈で、職業其物は體を具へて現はれて來なかつた。彼は今日迄如何なる職業にも興味を有つてゐなかつた結果として、如何なる職業を想ひ浮べて見ても、只其上を上滑りに滑つて行く丈で、中に踏み込んで内部から考へる事は到底出來なかつた。彼には世間が平たい複雑な色分の如くに見えた。さうして彼自身は何等の色を帯びてゐないとか考へられなかつた。凡ての職業を見渡した後、彼の眼は漂泊者の上に来て、そこで留まつた。彼は明らかに自分の影を、犬と人の境を迷ふ乞食の群の中に見出した。生活の墮落は精神の自由を殺す點に於て彼の尤も苦痛とする所であつた。彼は自分の肉體に、あらゆる醜穢を塗り付けた後、自分の心の状態が如何に落魄するだらうと考へて、ぞつと身振をした。

此落魄のうちに、彼は三千代を引張り廻さなければならなかつた。三千代は精神的に云つて、既に平岡の所有ではなかつた。代助は死に至る迄彼女に對して責任を負ふ積であつた。けれども相當の地位を有つてゐる人の不實と、零落の極に達した人の親切とは、結果に於て大した差違は

ないと今更ながら思はれた。死ぬ迄三千代に對して責任を負ふと云ふのは、負ふ目的があるといふ迄で、負つた事實には決してなれなかつた。代助は惘然として黒内障に罹つた人の如くに自失した。

彼は又三千代を訪ねた。三千代は前日の如く靜に落ち着いてゐた。微笑と光輝とに満ちてゐた。春風はゆたかに彼女の眉を吹いた。代助は三千代が己を擧げて自分に信賴してゐる事を知つた。其證據を又眼のあたりに見た時、彼は愛憐の情と氣の毒の念に堪えなかつた。さうして自己を惡漢の如くに呵責した。思ふ事は全く云ひそびれて仕舞つた。歸るとき、

「又都合して宅へ來ませんか」と云つた。三千代はえゝと首肯して微笑した。代助は身を切られる程酷かつた。

代助は此間から三千代を訪問する毎に、不愉快ながら平岡の居ない時を擇まなければならなかつた。始めはそれを左程にも思はなかつたが、近頃では不愉快と云ふよりも寧ろ、行き悪い度の日毎に強くなつて來た。其上留守の訪問が重なれば、下女に不審を起させる恐れがあつた。氣の所爲か、茶を運ぶ時にも、妙に疑ぐり深い眼付をして、見られる様でならなかつた。然し三千代



は全く知らぬ顔をしてゐた。少なくとも上部丈は平氣であつた。

平岡との關係に就ては、無論詳しく尋ねる機會もなかつた。會に一言一言夫となく問を掛けて見ても、三千代は寧ろ應じなかつた。たゞ代助の顔を見れば、見てゐる其間丈の嬉しさに溺れ盡すのが自然の傾向であるかの如くに思はれた。前後を取り圍む黒い雲が、今にも逼つて來はしまいかと云ふ心配は、陰ではいざ知らず、代助の前には影さへ見せなかつた。三千代は元來神經質の女であつた。昨今の態度は、何うしても此女の手際ではないと思ふと、三千代の周圍の事情が、まだ夫程險惡に近づかない證據になるよりも、自分の責任が一層重くなつたのだと解釋せざるを得なかつた。

「すこし又話したい事があるから來て下さい」と前よりは稍眞面目に云つて代助は三千代と別れた。

中二日置いて三千代が來る迄、代助の頭は何等の新しい路を開拓し得なかつた。彼の頭の中には職業の二字が大きな楷書で焼き付けられてゐた。それを押し退けると、物質的供給の杜絶がしきりに踴り狂つた。それが影を隠すと、三千代の未來が凄しく荒れた。彼の頭には不安の旋風が

吹き込んだ。三つのものが巴の如く瞬時の休みなく回轉した。其結果として、彼の周圍が悉く回轉した。彼は船に乗つた人と一般であつた。回轉する頭と、回轉する世界の中に、依然として落ち付いてゐた。

青山の宅からは何の消息もなかつた。代助は固よりそれを豫期してゐなかつた。彼は力めて門野を相手にして他愛ない雑談に耽つた。門野は此暑さに自分の身體を持ち扱つてゐる位、用のない男であつたから、頗る得意に代助の思ふ通り口を動かした。それでも話し草臥れると、

「先生、將棋は何うです」杯と持ち掛けた。夕方には庭に水を打つた。二人共跣足になつて、手桶を一杯宛持つて、無分別に其所等を濡らして歩いた。門野が隣の梧桐の天邊迄水にして御目にかけると云つて、手桶の底を振り上げる拍子に、滑つて尻持を突いた。白粉草が垣根の傍で花を着けた。手水鉢の蔭に生えた秋海棠の葉が著るしく大きくなつた。梅雨は漸く晴れて、晝は雲の峯の世界となつた。強い日は大きな空を透き通す程焼いて、空一杯の熱を地上に射り付ける天氣となつた。

代助は夜に入つて頭の上の星ばかり眺めてゐた。朝は書齋に這入つた。二三日は朝から蟬の聲



が聞える様になつた。風呂場へ行つて、度々頭を冷した。すると門野がもう好い時分だと思つて、「何うも非常な暑さですな」と云つて、這入つて来た。代助は斯う云ふ上の空の生活を二日程送つた。三日目の日盛に、彼は書齋の中から、ぎら／＼する空の色を見詰めて、上から吐き下す餒の息を嗅いだ時に、非常に恐ろしくなつた。それは彼の精神が此猛烈なる氣候から永久の變化を受けつゝあると考へた爲であつた。

三千代は此暑を冒して前日の約を履んだ。代助は女の聲を聞き付けた時、自分で玄關迄飛び出した。三千代は傘をつぼめて、風呂敷包を抱へて、格子の外に立つてゐた。不斷着の儘宅を出たと見えて、質素な白地の浴衣の袂から手帛を出し掛けた所であつた。代助は其姿を一目見た時、運命が三千代の未來を切り抜いて、意地悪く自分の眼の前に持つて来た様に感じた。われ知らず、笑ひながら、

「馳落でもしさうな風ぢやありませんか」と云つた。三千代は穩かに、

「でも買物をした序でないと上り悪いから」と真面目な答をして、代助の後に跟いて奥迄這入つて来た。代助はすぐ團扇を出した。照り付けられた所爲で三千代の頬が心持よく輝やいた。何

時もの疲れた色は何處にも見えなかつた。眼の中にも若い澤が宿つてゐた。代助は生々した此美くしさに、自己の感覺を溺らして、しばらくは何事も忘れて仕舞つた。が、やがて、此美くしさを冥々の裡に打ち崩しつゝあるものは自分であると考へ出したら悲しくなつた。彼は今日も此美しくしさの一部分を曇らす爲に三千代を呼んだに違なかつた。

代助は幾度か己れを語る事を躊躇した。自分の前に、これ程幸福に見える若い女を、眉一筋にしろ心配の爲に動かさせるのは、代助から云ふと非常な不徳義であつた。もし三千代に對する義務の心が、彼の胸のうちに鋭どく働らいてゐなかつたなら、彼は夫から以後の事情を打ち明ける事の代りに、先達ての告白を再び同じ室のうちに繰り返して、單純なる愛の快感の下に、一切を放抛して仕舞つたかも知れなかつた。

代助は漸くにして思ひ切つた。

「其後貴方と平岡との關係は別に變りはありませんか」

三千代は此問を受けた時でも、依然として幸福であつた。

「あつたつて、構はないわ」



「貴方は夫程僕を信用してゐるんですか」

「信用してゐなくつちや、斯うして居られないぢやありませんか」

代助は目映しさに、熱い鏡の様な遠い空を眺めた。

「僕には夫程信用される資格がなさうだ」と苦笑しながら答へたが、頭の中は焙爐の如く火照つてゐた。然し三千代は氣にも掛からなかつたと見えて、何故とも聞き返さなかつた。たゞ簡単に、

「まあ」とわざとらしく驚ろいて見せた。代助は眞面目になつた。

「僕は白状するが、實を云ふと、平岡君より頼にならない男なんです。買ひ被つてゐられると困るから、みんな話して仕舞ふが」と前置をして、夫から自分と父との今日迄の關係を詳しく述べた上、

「僕の身分は是から先何うなるか分らない。少なくとも當分は一人前ぢやない。半人前にもなれない。だから」と云ひ淀んだ。

「だから、何うなさるんです」

「だから、僕の思ふ通り、貴方に對して責任が盡せないだらうと心配してゐるんです」

「責任つて、何んな責任なの。もつと判然仰しやなくつちや解らないわ」

代助は平生から物質的状況に重きを置くの結果、たゞ貧苦が愛人の満足に價しないと云ふ事を知つてゐた。だから富が三千代に對する責任の一つと考へたのみで、夫より外に明らかな觀念は丸で持つてゐなかつた。

「徳義上の責任ぢやない、物質上の責任です」

「そんなものは欲しくないわ」

「欲しくないと言つたつて、是非必要になるんです。是から先僕が貴方と何んな新しい關係に移つて行くにしても、物質上の供給が半分は解決者ですよ」

「解決者でも何でも、今更左様な事を氣にしたつて仕方がないわ」

「口ではさうも云へるが、いざと云ふ場合になると困るのは眼に見えてゐます」

三千代は少し色を變へた。

「今貴方の御父様の御話を伺つて見ると、斯うなるのは始めから解つてゐるぢやありませんか。」



貴方だつて、其位な事は疾うから氣が付いて入つしやる筈だと思ひますわ」  
代助は返事が出来なかつた。頭を抑えて、

「少し腦が何うかしてゐるんだ」と獨り言の様に云つた。三千代は少し涙ぐんだ。

「もし、夫が氣になるなら、私の方は何うでも宜う御座んすから、御父様と仲直りをなすつて、今迄通り御交際になつたら好いぢやありませんか」

代助は急に三千代の手頸を握つてそれを振る様に力を入れて云つた。――

「そんな事を爲る氣なら始めから心配をしやしない。たゞ氣の毒だから貴方に詫るんです」

「詫まるなんて」と三千代は聲を顫はしながら遮つた。「私が原因で左様なつたのに、貴方に

詫まらしちや濟まないぢやありませんか」

三千代は聲を立て、泣いた。代助は慰撫める様に、

「ぢや我慢しますか」と聞いた。

「我慢はしません。當り前ですもの」

「是から先まだ變化がありますよ」

「ある事は承知してゐます。何んな變化があつたつて構やしません。私は此間から、――此間

から私は、若もの事があれば、死ぬ積で覺悟を極めてゐるんですもの」

代助は慄然として戰いた。

「貴方に是から先何したら好いと云ふ希望はありませんか」と聞いた。

「希望なんか無いわ。何でも貴方の云ふ通りになるわ」

「漂泊――」

「漂泊でも好いわ。死ぬと仰しやれば死ぬわ」

代助は又竦とした。

「此儘では」

「此儘でも構はないわ」

「平岡君は全く氣が付いてゐない様ですか」

「氣が付いてゐるかも知れません。けれども私もう度胸を据ゑてゐるから大丈夫なのよ。だつて何時殺されたつて好いんですもの」



「さう死ぬの殺されるのと安つぽく云ふものぢやない」

「だつて、放つて置いたつて、永く生きられる身體ぢやないぢやありませんか」

代助は硬くなつて、竦むが如く三千代を見詰めた。三千代は歇私的里の發作に襲はれた様に思ひ切つて泣いた。

一仕切經つと、發作は次第に收まつた。後は例の通り靜かな、しとやかな、奥行のある、美しい女になつた。眉のあたりが殊に晴々しく見えた。其時代助は、

「僕が自分で平岡君に逢つて解決を付けても宜う御座んすか」と聞いた。

「そんな事が出来て」と三千代は驚ろいた様であつた。代助は、

「出来る積です」と確り答へた。

「ぢや、何うでも」と三千代が云つた。

「さうしませう。二人が平岡君を欺いて事をするのは可くない様だ。無論事實を能く納得出来る様に話す丈です。さうして、僕の悪い所はちやんと詫まる覺悟です。其結果は僕の思ふ様に行かないかも知れない。けれども何う間違つたつて、そんな無暗な事は起らない様にする積です。

斯う中途半端にしてゐては、御互も苦痛だし、平岡君に對しても悪い。たゞ僕が思ひ切つて左様すると、あなたが、嘸平岡君に面目なからうと思つてね。其所が御氣の毒なんだが、然し面目ないと云へば、僕だつて面目ないんだから。自分の所爲に對しては、如何に面目なくつても、徳義上の責任を負ふのが當然だとすれば、外に何等の利益がないとしても、御互の間に有た事文は平岡君に話さなければならぬでせう。其上今の場合は是からの所置を付ける大事の自由なんだから、猶更必要になると思ひます」

「能く解りましたわ。何うせ間違へば死ぬ積なんですから」

「死ぬなんて。――よし死ぬにしたつて、是から先何の位間があるか――又そんな危険がある位なら、なんで平岡君に僕から話すもんですか」

三千代は又泣き出した。

「ぢや能く詫ります」

代助は日の傾くのを待つて三千代を歸した。然し此前の時の様に送つては行かなかつた。一時間程書齋の中で蟬の聲を聞いて暮した。三千代に逢つて自分の未來を打ち明けてから、氣分が薩



張りした。平岡へ手紙を書いて、會見の都合を聞き合せ様として、筆を持つて見たが、急に責任の重いのが苦になつて、拜啓以後を書き續ける勇氣が出なかつた。卒然、襦衣一枚になつて素足で庭へ飛び出した。三千代が歸る時は正體なく午睡をしてゐた門野が、

「まだ早いぢやありませんか。日が當つてゐますぜ」と云ひながら、坊主頭を両手で抑えて椽端にあらはれた。代助は返事もせず、庭の隅へ潜り込んで竹の落葉を前の方へ掃き出した。門野も已を得ず着物を脱いで下りて來た。

狭い庭だけでも、土が乾いてゐるので、たつぷり濡らすには大分骨が折れた。代助は腕が痛い云つて、好加減にして足を拭いて上つた。烟草を吹いて、椽側に休んでゐると、門野が其姿を見て、

「先生心臓の鼓動が少々狂やしませんか」と下から調戲つた。

晩には門野を連れて、神樂坂の縁日へ出掛けて、秋草を二鉢三鉢買つて來て、露の下りる軒の外へ竝べて置いた。夜は深く空は高かつた。星の色は濃く繁く光つた。

代助は其晩わざと雨戸を引かずに寝た。無用心と云ふ恐れが彼の頭には全く無かつた。彼は

洋燈を消して、蚊帳の中に獨り寐轉びながら、暗い所から暗い空を透かして見た。頭の中には晝の事が鮮かに輝いた。もう二三日のうちには最後の解決が出來ると思つて幾度か胸を躍らせた。が、そのうち大いなる空と、大いなる夢のうちに、吾知らず吸收された。

翌日の朝彼は思ひ切つて平岡に手紙を出した。たゞ、内々で少し話したい事があるが、君の都合を知らせて貰ひたい。此方は何時でも差支ない。と書いた丈だが、彼はわざとそれを封書にした。状袋の糊を濡めして、赤い切手をとんと張つた時には、愈クライシスに證券を興へた様な氣がした。彼は門野に云ひ付けて、此運命の使を郵便函に投げ込ました。手渡しにする時、少し手先が顫へたが、渡したあとでは却つて茫然として自失した。三年前三千代と平岡の間に立つて幹旋の勞を取つた事を追想すると丸で夢の様であつた。

翌日は平岡の返事を心待ちに待ち暮らした。其明る日も當にして終日宅にゐた。三日四日と経つた。が、平岡からは何の便もなかつた。其中例月の通り、青山へ金を貰ひに行くべき日が來た。代助の懷中は甚だ手薄になつた。代助は此前父に逢つた時以後、もう宅からは補助を受けられないものと覺悟を極めてゐた。今更平氣な顔をして、のそ／＼出掛て行く了見は丸でなかつた。何



二ヶ月や三ヶ月は、書物か衣類を賣り拂つても何うかなると腹の中で高を括つて落ち付いてゐた。事の落着次第緩くり職業を探すと云ふ分別もあつた。彼は平生から人のよく口癖にする、人間は容易な事で餓死するものぢやない、何うにかなつて行くものだと云ふ半諺の眞理を、経験しない前から信じ出した。

五日目に暑を冒して、電車へ乗つて、平岡の社迄出掛けて行つて見て、平岡は二三日出社しないと云ふ事が分つた。代助は表へ出て薄汚ない編輯局の窓を見上げながら、足を運ぶ前に、一應電話で聞き合すべき筈だつたと思つた。先達ての手紙は、果して平岡の手に渡つたかどうか、夫さへ疑はしくなつた。代助はわざと新聞社宛でそれを出したからである。歸りに神田へ廻つて、買ひつけの古本屋に、賣拂ひたい不用の書物があるから、見に来てくれると頼んだ。

其晩は水を打つ勇氣も失せて、ぼんやり、白い網襦袢を着た門野の姿を眺めてゐた。「先生今日は御疲ですか」と門野が馬尻を鳴らしながら云つた。代助の胸は不安に壓されて、明らかな返事も出なかつた。夕食のとき、飯の味は殆んどなかつた。呑み込む様に咽喉を通して、箸を投げた。門野を呼んで、

「君、平岡の所へ行つてね、先達ての手紙は御覽になりましたか。御覽になつたら、御返事を願ひますつて、返事を聞いて来て呉れ玉へ」と頼んだ。猶要領を得ぬ恐がありさうなので、先達てこれ／＼の手紙を新聞社の方へ出して置いたのだと云ふ事迄説明して聞かした。

門野を出した後で、代助は椽側に出て、椅子に腰を掛けた。門野の歸つた時は、洋燈を吹き消して、暗い中に凝としてゐた。門野は暗がりて、

「行つて参りました」と挨拶をした。「平岡さんは御居でました。手紙は御覽になつたさうです。明日の朝行くからといふ事です」

「左様かい、御苦勞さま」と代助は答へた。「實はもつと早く出るんだつたが、うちに病人が出来たんで遅くなつたから、宜しく云つてくれろと云はれました」

「病人？」と代助は思はず問ひ返した。門野は暗い中で、「え、何でも奥さんが御悪い様です」と答へた。門野の着てゐる白地の浴衣丈がぼんやり代助の眼に入つた。夜の明りは二人の顔を照らすには餘り不充分であつた。代助は掛けてゐる藤椅

られそ

助の眼に入つた。夜の明りは二人の顔を照らすには餘り不充分であつた。代助は掛けてゐる藤椅



子の肱掛を両手で握つた。

「餘程悪いのか」と強く聞いた。

「何うですか、能く分りませんが。何でもさう軽さうでもない様でした。然し平岡さんが明日御出になられる位なんだから、大した事ぢやないでせう」

代助は少し安心した。

「何だい。病氣は」

「つい聞き落しましたかな」

二人の間答は夫で絶えた。門野は暗い廊下を引き返して、自分の部屋へ這入つた。靜かに聞いてゐると、しばらくして、洋燈の蓋をホヤに打つける音がした。門野は灯火を點けたと見えた。代助は夜の中に猶凝としてゐた。凝としてゐながら、胸がわく／＼した。握つてゐる肱掛に、手から膏が出た。代助は又手を鳴らして門野を呼び出した。門野のぼんやりした白地が又廊下のはづれに現はれた。

「まだ暗闇ですな。洋燈を點けますか」と聞いた。代助は洋燈を斷つて、もう一度、三千代の

病氣を尋ねた。看護婦の有無やら、平岡の様子やら、新聞社を休んだのは、細君の病氣の爲だか、何うだか、と云ふ點に至る迄、考へられる丈問ひ盡した。けれども門野の答は必竟前と同じ事を繰り返すのみであつた。でなければ、好加減な當すつぽうに過ぎなかつた。それでも、代助には一人で黙つてゐるよりも堪へ易かつた。

寐る前に門野が夜中投函から手紙を一本出して來た。代助は暗い中でそれを受取つた儘、別に見様もしなかつた。門野は、

「御宅からの様です、灯火を持つて來ませうか」と促がす如くに注意した。

代助は始めて洋燈を書齋に入れさして、其下で、状袋の封を切つた。手紙は梅子から自分に宛てた可なり長いものであつた。――

「此間から奥さんの事で貴方も嘸御迷惑なすつたらう。此方でも御父様始め兄さんや、私は随分心配をしました。けれども其甲斐もなく先達で御出の時、とう／＼御父さんに斷然御断りなすつた御様子、甚だ残念ながら、今では仕方がないと諦らめてゐます。けれども其節御父様は、もう御前の事は構はないから、其積でゐると御怒りなされた由、後で承りました。其後あなたが



御出にならないのも、全く其爲ぢやなからうかと思つてゐます。例月のものを上げる日には何うかとも思ひましたが、矢張り御出にならないので、心配してゐます。御父さんは打遣つて置けと仰います。兄さんは例の通り呑氣で、困つたら其内來るだらう。其時親爺によく詫らせるが可い。もし來ない様だつたら、おれの方から行つてよく異見してやると云つてゐます。けれども、結婚の事は三人とももう断念してゐるんですから、其點では御迷惑になる様な事はありますまい。尤も御父さんは未だ怒つて御出の様子です。私の考では當分昔の通りになる事は、六づかしいと思ひます。それを考へると、貴方が入らつしやらない方が却つて貴方の爲に宜いかも知れませぬ。たゞ心配になるのは月々上げる御金の事です。貴方の事だから、さう急に自分で御金を取る氣遣はなからうと思ふと、差し當り御困りになるのが眼の前に見える様で、御氣の毒で堪りませぬ。で、私の取計らひで例月分を送つて上げるから、御受取の上は是で來月迄持ち應へて入らつしやい。其内には御父さんの御機嫌も直るでせう。又兄さんからも、さう云つて頂く積です。私も好い折があれば、御詫をして上げます。それ迄は今迄通り遠慮して入らつしやる方が宜う御座います。……」

まだ後が大分あつたが、女の事だから、大抵は重複に過ぎなかつた。代助は中に這入つてゐた小切手を引き抜いて、手紙丈をもう一遍よく読み直した上、丁寧に元の如くに巻き收めて、無言の感謝を改めて嫂に致した。梅子よりと書いた字は寧ろ拙であつた。手紙の體の言文一致なのは、かねて代助の勧めた通りを用ひたのであつた。代助は洋燈の前にある封筒を、猶つくと眺めた。古い壽命が又一ヶ月延びた。晩かれ早かれ、自己を新たにする必要のある代助には、嫂の志は難有いにもせよ、却つて毒になる許であつた。たゞ平岡と事を決する前は、麵麴の爲に働らく事を肯はぬ心を持つてゐたから、嫂の贈物が、此際糧食として彼には貴とかつた。其晩も蚊帳へ這入る前に、ふつと洋燈を消した。兩戸は門野が立てに來たから、故障も云はずに、其儘にして置いた。硝子戸だから、戸越しにも空は見えた。たゞ昨夕より暗かつた。曇つたのかと思つて、わざ／＼椽側迄出て、透かす様にして軒を仰ぐと、光るものが筋を引いて斜めに空を流れた。代助は又蚊帳を捲つて這入つた。寐付かれないので團扇をはた／＼云はせた。家の事は左のみ氣に掛からなかつた。職業もなるが儘になれと度胸を据ゑた。たゞ三千代の病



氣と、其原因と其結果が、ひどく代助の頭を悩ました。それから平岡との會見の様子も、様々に想像して見た。それも一方ならず彼の脳髓を刺激した。平岡は明日の朝九時頃あんまり暑くならないうちに來るといふ傳言であつた。代助は固より、平岡に向つて何う切り出さう杯と形式的の文句を考へる男ではなかつた。話す事は始めから極つてゐて、話す順序は其時の模様次第だから、決して心配にはならなかつたが、たゞ成る可く穩かに自分の思ふ事が向ふに徹する様にしたかつた。それで過度の興奮を思んで、一夜の安靜を切に冀つた。成るべく熟睡したいと心掛けて眼を合せたが、生憎眼が冴えて昨夕よりは却つて寐苦しかつた。其内夏の夜がぼうと白み渡つて來た。代助は堪りかねて跳ね起きた。跣足で庭先へ飛び下りて冷たい露を存分に踏んだ。夫から又椽側の藤椅子に倚つて、日の出を待つてゐるうちに、うと／＼した。

門野が寐惚け眼を擦りながら、雨戸を開けに出た時、代助ははつとして、此假睡から覺めた。世界の半面はもう赤い日に洗はれてゐた。

「大變御早うがすな」と門野が驚ろいて云つた。代助はすぐ風呂場へ行つて水を浴びた。朝飯は食はずに只紅茶を一杯飲んだ。新聞を見たが、殆んど何が書いてあるか解らなかつた。讀むに

従つて、讀んだ事が群がつて消えて行つた。たゞ時計の針ばかりが氣になつた。平岡が來る迄にはまだ二時間あまりあつた。代助は其間を何うして暮らさうかと思つた。凝としてはゐられなかつた。けれども何をしても手に付かなかつた。責めて此二時間をぐつと寐込んで、眼を開けて見ると、自分の前に平岡が來てゐる様にしたかつた。

仕舞に何か用事を考へ出さうとした。不圖机の上に乗せてあつた梅子の封筒が眼に付いた。代助は是だと思つて、強いて机の前に坐つて、嫂へ謝狀を書いた。成るべく叮嚀に書く積であつたが、状態へ入れて宛名迄認めて仕舞つて、時計を眺めると、たつた十五分程しか経つてゐなかつた。代助は席に着いた儘、安からぬ眼を空に据ゑて、頭の中で何か捜す様に見えた。が、急に起つた。

「平岡が來たら、すぐ歸るからつて、少し待たして置いて呉れ」と門野に云ひ置いて表へ出た。強い日が正面から射竦める様な勢で、代助の顔を打つた。代助は歩きながら絶えず眼と眉を動かした。牛込見附を這入つて、飯田町を抜けて、九段坂下へ出て、昨日寄つた古本屋迄來て、

「昨日不要の本を取りに來て呉れと頼んで置いたが、少し都合があつて見合せる事にしたから、



其積で」と断つた。歸りには、暑さが餘り酷かつたので、電車で飯田橋へ回つて、それから揚場を筋違に毘沙門前へ出た。

家の前には車が一臺下りてゐた。玄關には靴が揃へてあつた。代助は門野の注意を待たないで、平岡の來てゐる事を悟つた。汗を拭いて、着物を洗ひ立ての浴衣に改めて、座敷へ出た。

「いや、御使で」と平岡が云つた。矢張り洋服を着て、蒸される様に扇を使つた。

「何うも暑い所を」と代助も自から表立た言葉遣をしなければならなかつた。

二人はしばらく時候の話をした。代助はすぐ三千代の様子を聞いて見たかつた。然しそれが何う云ふものか聞き悪かつた。其内通例の挨拶も濟んで仕舞つた。話は呼び寄せた方から、切り出すのが順當であつた。

「三千代さんは病氣だつてね」

「うん。夫で社の方も二三日休ませられた様な譯で。つい君の所へ返事を出すのも忘れて仕舞つた」

「そりや何うでも構はないが、三千代さんはそれ程悪いのかい」

平岡は断然たる答を一言でなし得なかつた。さう急に何うの斯うのといふ心配もない様だが、決して軽い方ではないといふ意味を手短かに述べた。

此前暑い盛りに、神樂坂へ買物に出た序に、代助の所へ寄つた明日の朝、三千代は平岡の社へ出掛ける世話をしておながら、突然夫の襟飾を持つた儘卒倒した。平岡も驚ろいて、自分の支度は其儘に三千代を介抱した。十分の後三千代はもう大丈夫だから社へ出て呉れと云ひ出した。口元には微笑の影さへ見えた。横にはなつてゐたが、心配する程の様子もないので、もし悪い様だつたら醫者を呼ぶ様に、必要があつたら社へ電話を掛ける様に云ひ置いて平岡は出勤した。其晩は遅く歸つた。三千代は心持が悪いといつて先へ寝てゐた。何んな具合かと聞いても、判然とした返事をしなかつた。翌日朝起きて見ると三千代の色澤が非常に可くなかつた。平岡は寧ろ驚ろいて醫者を迎へた。醫者は三千代の心臓を診察して眉をひそめた。卒倒は貧血の爲だと云つた。随分強い神経衰弱に罹つてゐると注意した。平岡は夫から社を休んだ。本人は大丈夫だから出て呉れると頼む様に云つたが、平岡は聞かなかつた。看護をしてから二日目の晩に、三千代が涙を流して、是非詫まらなければならぬ事があるから、代助の所へ行つて其譯を聞いて呉れると夫に



告げた。平岡は始めて夫を聞いた時には、本當にしなかつた。腦の加減が悪いのだらうと思つて、好し／＼と氣休めを云つて慰めてゐた。三日目にも同じ願が繰り返された。其時平岡は漸やく三千代の言葉に一種の意味を認めた。すると夕方になつて、門野が代助から出した手紙の返事を聞きにわざ／＼小石川迄遣つて來た。

「君の用事と三千代の云ふ事と何か關係があるのかい」と平岡は不思議さうに代助を見た。

平岡の話は先刻から深い感動を代助に與へてゐたが、突然此思はざる間に來た時、代助はぐつと詰つた。平岡の問は實に意表に、無邪氣に、代助の胸に應へた。彼は何時になく少し赤面して俯向いた。然し再顔を上げた時は、平生の通り靜かな悪びれない態度を回復してゐた。

「三千代さんの君に詫まる事と、僕の君に話したい事とは、恐らく大いなる關係があるだらう。或は同じ事かも知れない。僕は何うしても、それを君に話さなければならぬ。話す義務があると思ふから話すんだから、今日迄の友誼に免じて、快よく僕に僕の義務を果さして呉れ給へ」

「何だい。改たまつて」と平岡は始めて眉を正した。

「いや前置をすると言譯らしくなつて不可ないから、僕も成る可くなら率直に云つて仕舞ひた

いのだが、少し重大な事件だし、夫に習慣に反した嫌もあるもので、若し途中で君に激されて仕舞ふと、甚だ困るから、是非仕舞迄君に聞いて貰ひたいと思つて」

「まあ何だい。其話と云ふのは」

好奇心と共に平岡の顔が益眞面目になつた。

「其代り、みんな話した後で、僕は何んな事を君から云はれても、矢張り大人しく仕舞迄聞く積だ」

平岡は何にも云はなかつた。たゞ眼鏡の奥から大きな眼を代助の上に据ゑた。外はぎら／＼する日が照り付けて、椽側迄射返したが、二人は殆んど暑さを度外に置いた。

代助は一段聲を潜めた。さうして、平岡夫婦が東京へ來てから以來、自分と三千代との關係が何んな變化を受けて、今日に至つたかを、詳しく語り出した。平岡は堅く唇を結んで代助の一語一句に耳を傾けた。代助は凡てを語るに約一時間餘を費やした。其間に平岡から四遍程極めて單簡な質問を受けた。

「ざつと斯う云ふ經過だ」と説明の結末を付けた時、平岡はたゞ唸る様に深い溜息を以て代助



に答へた。代助は非常に酷かつた。

「君の立場から見れば、僕は君を裏切りした様に當る。怪しからん友達だと思ふだらう。左様思はれても一言もない。濟まない事になつた」

「すると君は自分のした事を悪いと思つてるんだね」

「無論」

「悪いと思ひながら今日迄歩を進めて來たんだね」と平岡は重ねて聞いた。語氣は前よりも稍切迫してゐた。

「左様だ。だから、此事に對して、君の僕等に與へやうとする制裁は潔よく受ける覺悟だ。今のはたゞ事實を其儘に話した丈で、君の處分の材料にする考だ」

平岡は答へなかつた。しばらくしてから、代助の前へ顔を寄せて云つた。

「僕の毀損された名譽が、回復出來る様な手段が、世の中にあり得ると、君は思つてゐるのか」  
今度は代助の方が答へなかつた。

「法律や社會の制裁は僕にも何にもならない」と平岡は又云つた。

「すると君は當事者丈のうちで、名譽を回復する手段があるかと聞くんだね」

「左様さ」

「三千代さんの心機を一轉して、君を元よりも倍以上に愛させる様にして、其上僕を蛇蝎の様に悪ませさへすれば幾分か償にはなる」

「夫が君の手際で出來るか」

「出來ない」と代助は云ひ切つた。

「すると君は悪いと思つてる事を今日迄發展さして置いて、猶其悪いと思ふ方針によつて、極端迄押して行かうとするのぢやないか」

「矛盾かも知れない。然し夫は世間の掟と定めてある夫婦關係と、自然の事實として成り上がった夫婦關係とが一致しなかつたと云ふ矛盾なのだから仕方がない。僕は世間の掟として、三千代さんの夫たる君に詫まる。然し僕の行爲其物に對しては矛盾も何も犯してゐない積だ」

「ぢや」と平岡は稍聲を高めた。「ぢや、僕等二人は世間の掟に叶ふ様な夫婦關係は結べないと云ふ意見だね」



代助は同情のある氣の毒さうな眼をして平岡を見た。平岡の険しい眉が少し解けた。

「平岡君。世間から云へば、これは男子の面目に關する大事件だ。だから君が自己の權利を維持する爲に、——故意に維持しやうと思はないでも、暗に其心が働いて、自然と激して來るの已を得ないが、——けれども、こんな關係の起らない學校時代の君になつて、もう一遍僕の云ふ事をよく聞いて呉れないか」

平岡は何とも云はなかつた。代助も一寸控えてゐた。烟草を一吹吹いた後で、思ひ切つて、

「君は三千代さんを愛してゐなかつた」と靜かに云つた。

「そりや」

「そりや餘計な事だけれども、僕は云はなければならぬ。今度の事件に就て凡ての解決者はそれだらうと思ふ」

「君には責任がないのか」

「僕は三千代さんを愛してゐる」

「他の妻を愛する權利が君にあるか」

「仕方がない。三千代さんは公然君の所有だ。けれども物件ぢやない人間だから、心迄所有する事は誰にも出來ない。本人以外にどんなものが出て來たつて、愛情の増減や方向を命令する譯には行かない。夫の權利は其所迄は届きやしない。だから細君の愛を他へ移さない様にするのが、却つて夫の義務だらう」

「よし僕が君の期待する通り三千代を愛してゐなかつた事が事實としても」と平岡は強いて己を抑える様に云つた。拳を握つてゐた。代助は相手の言葉の盡きるのを待つた。

「君は三年前の事を覚えて居るだらう」と平岡は又句を更へた。

「三年前は君が三千代さんと結婚した時だ」

「さうだ。其時の記憶が君の頭の中に残つてゐるか」

代助の頭は急に三年前に飛び返つた。當時の記憶が、闇を回る松明の如く輝いた。

「三千代を僕に周旋しやうと云ひ出したものは君だ」

「貰ひたいと云ふ意志を僕に打ち明けたものは君だ」

「それは僕だつて忘れやしない。今に至る迄君の厚意を感謝してゐる」



平岡は斯う云つて、しばらく冥想してゐた。

「二人で、夜上野を抜けて谷中へ下りる時だつた。雨上りで谷中の下は道が悪かつた。博物館の前から話しつゞけて、あの橋の所迄来た時、君は僕の爲に泣いて呉れた」

代助は黙然としてゐた。

「僕は其時程朋友を難有いと思つた事はない。嬉しくつて其晩は少しも寐られなかつた。月のある晩だつたので、月の消える迄起きてゐた」

「僕もあの時は愉快だつた」と代助が夢の様に云つた。それを平岡は打ち切る勢で遮つた。

「君は何だつて、あの時僕の爲に泣いて呉れたのだ。なんだつて、僕の爲に三千代を周旋しやうと盟つたのだ。今日の様な事を引き起す位なら、何故あの時、ふんと云つたなり放つて置いて呉れなかつたのだ。僕は君からは程深刻な復讐を取られる程、君に向つて悪い事をした覺がないぢやないか」

平岡は聲を顫はした。代助の蒼い額に汗の珠が溜つた。さうして訴へる如くに云つた。

「平岡、僕は君より前から三千代さんを愛してゐたのだよ」

平岡は茫然として、代助の苦痛の色を眺めた。

「其時の僕は、今の僕でなかつた。君から話を聞いた時、僕の未來を犠牲にしても、君の望みを叶へるのが、友達の本分だと思つた。それが悪かつた。今位頭が熟してゐれば、まだ考へ様があつたのだが、惜しい事に若かつたものだから、餘りに自然を輕蔑し過ぎた。僕はあの時の事を思つては、非常な後悔の念に襲はれてゐる。自分の爲ばかりぢやない。實際君の爲に後悔してゐる。僕が君に對して眞に濟まないと思ふのは、今度の事件より寧ろあの時僕がなまじひに遣り遂げた義侠心だ。君、どうぞ勸辨して呉れ。僕は此通り自然に復讐を取られて、君の前に手を突いて詫まつてゐる」

代助は涙を膝の上に零した。平岡の眼鏡が曇つた。

「どうも運命だから仕方がない」

平岡は呻吟く様な聲を出した。二人は漸く顔を見合せた。

「善後策に就て君の考があるなら聞かう」



「僕は君の前に詫まつてゐる人間だ。此方から先へそんな事を云ひ出す権利はない。君の考へから聞くのが順だ」と代助が云つた。

「僕には何にもない」と平岡は頭を抑えてゐた。

「では云ふ。三千代さんを呉れないか」と思ひ切つた調子に出た。

平岡は頭から手を離して、腕を棒の様に洋卓の上に倒した。同時に、

「うん遣らう」と云つた。さうして代助が返事をし得ないうちに、又繰り返した。

「遣る。遣るが、今は遣れない。僕は君の推察通り夫程三千代を愛して居なかつたかも知れない。けれども悪んぢやゐなかつた。三千代は今病氣だ。しかも餘り軽い方ぢやない。寐てゐる病人を君に遣るのは厭だ。病氣が癒る迄君に遣れないとすれば、夫迄は僕が夫だから、夫として看護する責任がある」

「僕は君に詫つた。三千代さんも君に詫まつてゐる。君から云へば二人とも、不埒な奴には相違ないが、——幾何詫まつても勘辨出来んかも知れないが、——何しろ病氣をして寐てゐるんだから」

「夫は分つてゐる。本人の病氣に付け込んで僕が意趣晴らしに、虐待するとも思つてゐるんだらうが、僕だつて、まさか」

代助は平岡の言葉を信じた。さうして腹の中で平岡に感謝した。平岡は次に斯う云つた。

「僕は今日の事がある以上は、世間的の夫の立場からして、もう君と交際する譯には行かない。

今日限り絶交するから左様思つて呉れ玉へ」

「仕方がない」と代助は首を垂れた。

「三千代の病氣は今云ふ通り軽い方ぢやない。此先何んな變化がないとも限らない。君も心配だらう。然し絶交した以上は已を得ない。僕の在不在に係はらず、宅へ出入りする事文は遠慮して貰ひたい」

「承知した」と代助はよろめく様に云つた。其頬は益々蒼かつた。平岡は立ち上がった。

「君、もう五分許坐つて呉れ」と代助が頼んだ。平岡は席に着いた儘無言でゐた。

「三千代さんの病氣は、急に危険な虞でもありさうなのかい」

「さあ」



「夫丈教へて呉れないか」

「まあ、さう心配しなくても可いだらう」

平岡は暗い調子で、地に息を吐く様に答へた。代助は堪えられない思ひがした。

「若しだね。若し萬一の事がありさうだつたら、其前にたつた一遍丈で可いから、逢はして呉れないか。外には決して何も頼まない。たゞ夫丈だ。夫丈を何うか承知して呉れ玉へ」

平岡は口を結んだなり、容易に返事をしなかつた。代助は苦痛の遣り所がなくて、両手の掌を、垢の縋れる程揉んだ。

「夫はまあ其時の場合にしやう」と平岡が重さうに答へた。

「ぢや、時々病人の様子を聞きに遣つても可いかね」

「夫は困るよ。君と僕とは何にも關係がないんだから。僕は是から先、君と交渉があれば、三千代を引き渡す時丈だと思つてるんだから」

代助は電流に感じた如く椅子の上で飛び上がった。

「あつ。解つた。三千代さんの死骸丈を僕に見せる積なんだ。それは苛い。それは残酷だ」

代助は洋卓の縁を回つて、平岡に近づいた。右の手で平岡の脊廣の肩を抑えて、前後に揺りながら、

「苛い、苛い」と云つた。

平岡は代助の眼のうちに狂へる恐ろしい光を見出した。肩を揺られながら、立ち上がった。

「左んな事があるものか」と云つて代助の手を抑えた。二人は魔に憑かれた様な顔をして互を見つめた。

「落ち付かなくつちや不可ない」と平岡が云つた。

「落ち付いてゐる」と代助が答へた。けれども其言葉は喘ぐ息の間を苦しさうに洩れて出た。

暫らくして發作の反動が來た。代助は己れを支ふる力を用ひ盡した人の様に、又椅子に腰を卸した。さうして両手で顔を抑えた。

## 十七

代助は夜の十時過になつて、こつそり家を出た。



「今から何方へ」と驚ろいた門野に、

「何一寸」と曖昧な答をして、寺町の通り迄来た。暑い時分の事なので、町はまだ宵の口であった。浴衣を着た人が幾人となく代助の前後を通つた。代助には夫が唯動くものとしか見えなかつた。左右の店は悉く明るかつた。代助は眩しさうに、電氣燈の少ない横町へ曲つた。江戸川の縁へ出た時、暗い風が微かに吹いた。黒い櫻の葉が少し動いた。橋の上に立つて、欄干から下を見下してゐたものが二人あつた。金剛寺坂でも誰にも逢はなかつた。岩崎家の高い石垣が左右から細い坂道を塞いでゐた。

平岡の住んでゐる町は、猶靜かであつた。大抵な家は灯影を洩らさなかつた。向ふから来た一臺の空車の輪の音が胸を躍らす様に響いた。代助は平岡の家の塀際迄来て留つた。身を寄せて中を窺ふと、中は暗かつた。立て切つた門の上に、軒燈が空しく標札を照らしてゐた。軒燈の硝子に守宮の影が斜めに映つた。

代助は今朝も此所へ来た。午からも町内を彷徨いた。下女が買物にでも出る所を捕まへて、三千代の容體を聞かうと思つた。然し下女は遂に出て來なかつた。平岡の影も見えなかつた。塀の

傍に寄つて耳を澄ましても、夫らしい人聲は聞えなかつた。醫者を突き留めて、詳しい様子を探らうと思つたが、醫者らしい車は平岡の門前には留らなかつた。そのうち、強い日に射付けられた頭が、海の様動き始めた。立ち留まつてゐると、倒れさうになつた。歩き出すと、大地が大きな波紋を描いた。代助は苦しさを忍んで這ふ様に家へ歸つた。夕食も食はずに倒れたなり動かずにゐた。其時恐るべき日は漸く落ちて、夜が次第に星の色を濃くした。代助は暗さと涼しさのうちに始めて蘇生つた。さうして頭を露に打たせながら、又三千代のゐる所迄遣つて來たのである。

代助は三千代の門前を二三度行つたり來たりした。軒燈の下へ來るたびに立ち留まつて、耳を澄ました。五分乃至十分は凝としてゐた。しかし家の中の様子は丸で分らなかつた。凡てが寂としてゐた。

代助が軒燈の下へ來て立ち留まるたびに、守宮が軒燈の硝子にびたりと身體を貼り付けてゐた。黒い影は斜に映つた儘何時でも動かなかつた。

代助は守宮に氣が付く毎に厭な心持がした。其動かない姿が妙に氣に掛つた。彼の精神は鋭さ



の餘りから來る迷信に陥つた。三千代は危険だと想像した。三千代は今苦しみつゝあると想像した。三千代は今死につゝあると想像した。三千代は死ぬ前に、もう一遍自分に逢ひたがつて、死に切れずに息を偷んで生きてゐると想像した。代助は拳を固めて、割れる程平岡の門を敲かすにはゐられなくなつた。忽ち自分は平岡のものに指さへ觸れる権利がない人間だと云ふ事に氣が付いた。代助は恐ろしさの餘り馳け出した。靜かな小路の中に、自分の足音文が高く響いた。代助は馳けながら猶恐ろしくなつた。足を緩めた時は、非常に呼吸が苦しくなつた。道端に石段があつた。代助は半ば夢中で其所へ腰を掛けたなり、額を手で抑えて、固くなつた。しばらくして、閉さいだ眼を開けて見ると、大きな黒い門があつた。門の上から太い松が生垣の外迄枝を張つてゐた。代助は寺の這入り口に休んでゐた。彼は立ち上がった。惘然として又歩き出した。少し來て、再び平岡の小路へ這入つた。夢の様に軒燈の前で立留つた。守宮はまだ一つ所に映つてゐた。代助は深い溜息を洩らして遂に小石川を南側へ降りた。

其晩は火の様に、熱くて赤い旋風の中に、頭が永久に回轉した。代助は死力を盡して、旋風の

中から逃れ出様と争つた。けれども彼の頭は毫も彼の命令に應じなかつた。木の葉の如く、遲疑する様子もなく、くるり／＼と燄の風に卷かれて行つた。

翌日は又燬け付く様に日が高く出た。外は猛烈な光で一面にいら／＼し始めた。代助は我慢して八時過に漸く起きた。起きるや否や眼がぐらついた。平生の如く水を浴びて、書齋へ這入つて凝と竦んだ。

所へ門野が來て、御客さまですと知らせたなり、入口に立つて、驚ろいた様に代助を見た。代助は返事をするのも退儀であつた。客は誰だと聞き返しませずに手で支へた儘の顔を、半分ばかり門野の方へ向き易へた。其時客の足音が椽側にして、案内も待たずに兄の誠吾が這入つて來た。「やあ、此方へ」と席を勧めたのが代助にはやう／＼であつた。誠吾は席に着くや否や、扇子を出して、上布の襟を開く様に、風を送つた。此暑さに脂肪が焼けて苦しいと見えて、荒い息遣をした。

「暑いな」と云つた。

「御宅でも別に御變りもありませんか」と代助は、左も疲れ果てた人の如くに尋ねた。



二人は少時例の通りの世間話をした。代助の調子態度は固より尋常ではなかつた。けれども兄は決して何うしたとも聞かなかつた。話の切れ目へ来た時、

「今日は實は」と云ひながら、懐へ手を入れて、一通の手紙を取り出した。

「實は御前に少し聞きたい事があつて来たんだがね」と封筒の裏を代助の方へ向けて、

「此男を知つてるかい」と聞いた。其所には平岡の宿所姓名が自筆で書いてあつた。

「知つてます」と代助は殆んど器械的に答へた。

「元、御前の同級生だつて云ふが、本當か」

「さうです」

「此男の細君も知つてるのかい」

「知つてゐます」

兄は又扇を取り上げて、二三度ばかりと鳴らした。それから、少し前へ乗り出す様に、聲を一段落した。

「此男の細君と、御前が何か關係があるのかい」

代助は始めから萬事を隠す氣はなかつた。けれども斯う單簡に聞かれたときに、何うして此複雑な経過を、一言で答へ得るだらうと思ふと、返事は容易に口へは出なかつた。兄は封筒の中から、手紙を取り出した。それを四五寸ばかり捲き返して、

「實は平岡と云ふ人が、斯う云ふ手紙を御父さんの所へ宛々寄こしたんだがね。——讀んで見るか」と云つて、代助に渡した。代助は黙つて手紙を受取つて、讀み始めた。兄は凝と代助の額の所を見詰めてゐた。

手紙は細かい字で書いてあつた。一行二行と讀むうちに、讀み終つた分が、代助の手先から長く垂れた。それが二尺餘になつても、まだ盡きる氣色はなかつた。代助の眼はちら／＼した。頭が鐵の様に重かつた。代助は強いても仕舞迄讀み通さなければならぬと考へた。總身が名状しがたい壓迫を受けて、腋の下から汗が流れた。漸く結末へ来た時は、手に持つた手紙を巻き納める勇氣もなかつた。手紙は廣げられた儘洋卓の上に横はつた。

「其所に書いてある事は本當なのかい」と兄が低い聲で聞いた。代助はたゞ、  
「本當です」と答へた。兄は打衝を受けた人の様に一寸扇の音を留めた。しばらくは二人とも



口を聞き得なかつた。良あつて兄が、

「まあ、何う云ふ了見で、そんな馬鹿な事をしたのだ」と呆れた調子で云つた。代助は依然として、口を開かなかつた。

「何んな女だつて、貰はうと思へば、いくらでも貰へるぢやないか」と兄がまた云つた。代助はそれでも猶黙つてゐた。三度目に兄が斯う云つた。――

「御前だつて満更道樂をした事のない人間でもあるまい。こんな不始末を仕出かす位なら、今迄折角金を使つた甲斐がないぢやないか」

代助は今更兄に向つて、自分の立場を説明する勇氣もなかつた。彼はつい此間迄全く兄と同意見であつたのである。

「姉さんは泣いてゐるぜ」と兄が云つた。

「さうですか」と代助は夢の様に答へた。

「御父さんは怒つてゐる」

代助は答をしなかつた。たゞ遠い所を見る眼をして、兄を眺めてゐた。

「御前は平生から能く分らない男だつた。夫でも、いつか分る時機が来るだらうと思つて今日迄交際つてゐた。然し今度と云ふ今度は、全く分らない人間だと、おれも諦らめて仕舞つた。世の中に分らない人間程危険なものはない。何を爲るんだか、何を考へてゐるんだか安心が出来ない。御前は夫が自分の勝手だから可からうが、御父さんやおれの、社會上の地位を思つて見る。御前だつて家族の名譽と云ふ觀念は有つてゐるだらう」

兄の言葉は、代助の耳を掠めて外へ零れた。彼はたゞ全身に苦痛を感じた。けれども兄の前に良心の鞭撻を蒙る程動揺してはゐなかつた。凡てを都合よく辯解して、世間的の兄から、今更同情を得やうと云ふ芝居氣は固より起らなかつた。彼は彼の頭の中に、彼自身に正當な道を歩んだといふ自信があつた。彼は夫で満足であつた。その満足を理解して呉れるものは三千代丈であつた。三千代以外には、父も兄も社會も人間も悉く敵であつた。彼等は赫々たる炎火の裡に、二人を包んで焼き殺さうとしてゐる。代助は無言の儘、三千代と抱き合つて、此燄の風に早く己れを焼き盡すのを、此上もない本望とした。彼は兄には何の答もしなかつた。重い頭を支へて石の様に動かなかつた。



「代助」と兄が呼んだ。「今日はおれは御父さんの使に來たのだ。御前は此間から家へ寄り付かない様になつてゐる。平生なら御父さんが呼び付けて聞き糺す所だけれども、今日は顔を見るのが厭だから、此方から行つて實否を確かめて來いと云ふ譯で來たのだ。それで——もし本人に辯解があるなら辯解を聞きし。又辯解も何もない、平岡の云ふ所が一々根據のある事實なら、——御父さんは斯う云はれるのだ。——もう生涯代助には逢はない。何處へ行つて、何をしやうと當人の勝手だ。其代り、以來子としても取り扱はない。又親とも思つて呉れるな。——尤もの事だ。そこで今御前の話を聞いて見ると、平岡の手紙には嘘は一つも書いてないんだから仕方がない。其上御前は、此事に就て後悔もしなければ、謝罪もしない様に見受けられる。それぢや、おれだつて、歸つて御父さんに取り成し様がない。御父さんから云はれた通りを其儘御前に傳へて歸る丈の事だ。好いか。御父さんの云はれる事は分つたか」

「よく分りました」と代助は簡明に答へた。

「貴様は馬鹿だ」と兄が大きな聲を出した。代助は俯向いた儘顔を上げなかつた。

「愚圖だ」と兄が又云つた。「不斷は人並以上に減らず口を敲く癖に、いざと云ふ場合には、

丸で啞の様に黙つてゐる。さうして、陰で親の名譽に關はる様な惡戯をしてゐる。今日迄何の爲に教育を受けたのだ」

兄は洋卓の上の手紙を取つて自分で巻き始めた。靜かな部屋の中に、半切の音がかさ／＼鳴つた。兄はそれを元の如くに封筒に納めて懐中した。

「ぢや歸るよ」と今度は普通の調子で云つた。代助は叮嚀に挨拶をした。兄は、

「おれも、もう逢はんから」と云ひ捨てて支關に出た。

兄の去つた後、代助はしばらく元の儘じつと動かずにゐた。門野が茶器を取り片付けに來た時、急に立ち上がつて、

「門野さん。僕は一寸職業を探して來る」と云ふや否や、烏打帽を被つて、傘も指さずに日盛りの表へ飛び出した。

代助は暑い中を馳けない許に、急ぎ足に歩いた。日は代助の頭の上から眞直に射下した。乾いた埃が、火の粉の様に彼の素足を包んだ。彼はぢり／＼と焦る心持がした。

「焦る／＼」と歩きながら口の内で云つた。



飯田橋へ来て電車に乗った。電車は真直に走り出した。代助は車のなかで、

「あゝ動く。世の中が動く」と傍の人に聞える様に云った。彼の頭は電車の速力を以て回轉し出した。回轉するに従つて火の様に焙つて來た。是で半日乗り續けたら焼き盡す事が出来るだらうと思つた。

忽ち赤い郵便筒が眼に付いた。すると其赤い色が忽ち代助の頭の中に飛び込んで、くる／＼と回轉し始めた。傘屋の看板に、赤い蝙蝠傘を四つ重ねて高く釣るしてあつた。傘の色が、又代助の頭に飛び込んで、くる／＼と渦を捲いた。四つ角に、大きい眞赤な風船玉を賣つてるものがあつた。電車が急に角を曲るとき、風船玉は追懸て來て、代助の頭に飛び付いた。小包郵便を載せた赤い車はつと電車と摺れ違ふとき、又代助の頭の中に吸ひ込まれた。烟草屋の暖簾が赤かつた。賣出しの旗も赤かつた。電柱が赤かつた。赤ペンキの看板がそれから、それへと續いた。仕舞には世の中が眞赤になつた。さうして、代助の頭を中心としてくるり／＼と燄の息を吹いて回轉した。代助は自分の頭が焼け盡きる迄電車に乗つて行かうと決心した。

## 解 說



### 『三四郎』解説

『三四郎』は、明治四十一年九月一日から十二月二十九日まで、百十七回に亘つて、朝日新聞に掲載された。この年漱石は、元日から四月九日まで、九十六回に亘つて、同じ新聞に『坑夫』を發表してゐる。その外に『文鳥』を書き、『夢十夜』を書き、朝日新聞主催の講演會では『創作家の態度』を講演してゐる。漱石は、一年の三分の二以上、社の爲に働き續けた勘定である。

八月十九日に出た『三四郎』の豫告で、漱石は「田舎の高等學校を卒業して東京の大學に這入つた三四郎が新しい空氣に觸れる。さうして同輩だの先輩だの若い女だのに接觸して、色々に動いて來る。手間は此空氣のうちには是等の人間を放す丈である。あとは人間が勝手に泳いで、自から波瀾が出来るだらうと思ふ。さうかうしてゐるうちに讀者も作者も此空氣にかぶれて、是等の人間を知る様になる事と信ずる。もしかぶれ甲斐のしない空氣で、知り榮のしない人間であつたら御互に不運と諦めるより仕方がない。たゞ尋常である。摩訶不思議は書けない。」と書いた。



是は、『三四郎』に於いて取り扱はれる事件の性質と、その發展の大體の方向とを豫告する。同時に是は、漱石が此所で「かぶれ甲斐のしない空氣」と「知り榮のしない人間」とを、書くまいと決心してゐる事を豫告する。

漱石によると、小説は、書き込んで行く内に、次第にそれ自身に獨特な法則を持ち始める。作者がかうしたいと思つてゐても、それがその小説自身の法則に適合するのでない限り、なかなか作者の思ひ通りにはならない。それを強ひて思ひ通りに動かさうとすると、その小説は屹度、不自然な、拵へ物になつてしまふ。さういふ場合作者は、氣長く、事件が自然に、思ひ通りの方向へ發展して行つてくれるのを、待つてゐるより仕方がないのださうである。漱石が此所で、「かぶれ甲斐のしない空氣」と「知り榮のしない人間」とを書くまいと決心はしてゐても、書いて行くうちに自然に出來あがる、小説自身の世界の法則は、或は漱石のその決心を、決心通りに遂行する事を、沮まないとは限られない。その上、漱石にとつてはそれが「かぶれ甲斐」のある空氣で「知り榮」のする人間であると信じられても、讀者にとつてはさうでないといふ場合も亦、決してあり得ない事ではない。それだから漱石は、萬一さういふ場合が出て來るとすれば、それは「御互に不運と諦めるより仕方がない」といふのである。然し、少くとも自分の意志で左右し得る限り、漱石が此所で、「かぶれ甲斐のしない空氣」と「知り榮のしない人間」とを書くまいとし

てゐた事だけは、明白である。——この事は『三四郎』を讀む上に、先づ注意する必要がある事ではないかと思ふ。

『虞美人草』で漱石は、自分の嫌ひなタイプの人間を、幾人かかいてゐる。さうして漱石は、自分がさういふ人間の何所が嫌ひであるかといふ事を、はつきりしすぎる位はつきりと、説明した。『坑夫』は勿論、さういふ事を目的としたものではなかつたが、それでも其所には、漱石の嫌ひな人間は、幾人も出て來る。ある意味から言へば『坑夫』は、厭な、輕蔑すべき、人間の屑の塊りのやうな人間の中にも、かういふ愛すべき、尊敬すべき人間もゐるのだといふ事を、一つの重點として書いた小説であるとも、言ふ事が出来るのである。然るに『三四郎』では、作者から言つても、讀者から言つても、厭な、不愉快な、輕蔑すべき人間は、一人も出て來ない。假令此所の空氣を「かぶれ甲斐のしない空氣」であり、此所の人間を「知り榮のしない人間」であると言ふ人があつたとしても、その人は恐らく、此所の空氣と此所の人間とを、輕蔑したり弾劾したりする氣にはならないに違ひない。

『虞美人草』では漱石は、自分の好きな人間は愛撫するが、嫌ひな人間は思ひ切り叩きつける、審判く者としての自分の位地を自覺し、且つ審判く者としての自分の役目を行使する。『虞美人草』の一つ前の『野分』でも、作者としての漱石の、作中の人物に對する態度は、同様である。



『坑夫』はそれらとは違つて、作者は所謂「遠のいた」立場から作中の人物を眺めてゐるが、それでも審判く者としての作者の自覺は、なほ多少その餘波を止めてゐる。然し『三四郎』の作者は、審判く者としての立場には、決して立つてゐない。此所では作者は、『坑夫』の作者と同じやうに、「遠のいた」立場に立つとともに、作中の人物を、一樣に愛しつつ、高い所から眺めてゐる。『三四郎』の作者の『三四郎』の中の人物に對する關係は、自分の周圍に唐子を集めて、ここにこしながらそれを眺めてゐる、布袋様のやうに、靜かで、穩やかで、平和で、樂しげである。是は、漱石が「かぶれ甲斐のしない空氣」と「知り榮のしない人間」とを書かなかつたから、さういふ感じを興へるのか、それとも漱石の内にさういふ感じが充ちてゐたから、そんなものは書くまいと決心したのか、それは遽かにどれときめる譯にも行かないが、ともかく『三四郎』に来て漱石の、初めて長篇作家として違つた舞臺に登場した興奮が、平靜に復し、且つ是までイリタルを極めてゐた漱石の内生活が、漸く寛ろぎと落つきとを持ち始めたといふ事は、どうも疑ひのない事のやうである。少くとも此所では、『野分』のやうな、もしくは『虞美人草』のやうな、氣に入らないものにはおつかぶさつて行つて、それを叩き潰さうとするやうな、露骨は少しも見出される事がない。

漱石は『虞美人草』の中で、「女の二十四は男の三十にあたる。理も知らぬ、非も知らぬ。世の

中が何故廻轉して、何故落ち付くかは無論知らぬ。大いなる古今の舞臺の極まりなく發展するうちに、自己は如何なる地位を占めて、如何なる役割を演じつゝあるかは固より知らぬ。只口丈は巧者である。天下を相手にする事も國家を向ふへ廻す事も、一團の群衆を眼前に、事を處する事も、女には出來ぬ。女は只一人を相手にする藝當を心得て居る。一人と一人と戰ふ時、勝つものは必ず女である。」と言つて、女性一般を罵倒しつつ、藤尾を罵倒した。『三四郎』では、與次郎が三四郎に、「廿前後の同じ年の男女を二人竝べて見る。女の方が萬事上手だうはてあね。男は馬鹿にされる許だ。女だつて、自分の輕蔑する男の所へ嫁に行く氣は出ないやね。尤も自分が世界で一番偉いと思つてる女は例外だ。輕蔑する所へ行かなければ獨身で暮すより外に方法はないんだから。よく金持の娘や何かにそんなのがあるぢやないか、望んで嫁に来て置きながら、亭主を輕蔑してゐるのが。美禰子さんは夫よりずつと偉い。其代り、夫として尊敬の出來ない人の所へは始から行く氣はないんだから、相手になるものは其氣で居なくつちや不可ない。さういふ點で君だの僕だのは、あの女の夫になる資格はないんだよ」と言つて、それと類似の意見を持つてゐる事を示すが、然しその結論は、『虞美人草』の作者のやうに、倫理的に美禰子の無價値を罵倒するのではなくて、寧ろ美禰子の聰明を讚美する貌になつてゐるのである。

元より「美禰子さんは夫よりずつと偉い」といふ言葉は、與次郎の言葉で、漱石の言葉ではな



かつた。然し與次郎の言葉と矛盾するものを美禰子が少しも示して居らず、また與次郎のこの言葉が、何所ででも、また誰からも反對されずに、『三四郎』の中で通用してゐるとすれば、作者としての漱石も亦、この與次郎の批評を自分の批評とはしないまでも、少くともそれを黙認してゐるものと、見做して差支ない筈である。といふ事は、此所では作者は、女性觀としては『虞美人草』と同じやうな女性觀を持つてゐるにも拘はらず、その女性觀から美禰子を見ようとはしなかつた、少くともその女性觀を前景に出す事なしに、此所に出て來る凡ての女性を眺めようとしてゐたといふ事を意味する。「知り榮のしない人間」を書くまいと決心した漱石は、或はかういふ點でも、その決心を裏切らない用意を施してゐるのかも知れないと思はれる。

『三四郎』の中で、最も多く作者を代表してゐる者を求めるならば、誰でもそれは、廣田先生であると答へるに違ひない。然もその廣田先生は、女性一般に愛想をつかしてゐる爲に、獨身で暮してゐる人間である。然しその廣田先生は、どうして獨身でゐるのかと三四郎に訊かれて、初めて口を開いて、女に愛想をつかしてゐるから、それで結婚しないのだと答へる。それさへ直接に露骨にさう答へるのではなくて、仄かに、それらしい返事をするに過ぎないのである。従つて廣田先生は、自分が女性一般に愛想をつかしてゐるからと言つて、自分の所に入入する美禰子やよし子を、決してさういふ眼で見るやうな事はしない。のみならず廣田先生はそれらの女性を、

假令積極的ではないまでも、愛を持つて眺めてゐるのである。まして廣田先生は、その美禰子との戀愛の爲に、三四郎が囚はれ迷ひ惱んで、落ちつかなくなつてゐるのを見ても、自分の女性觀を三四郎の前に披瀝して、三四郎の沸騰してゐる頭に、風を入れようなどと試みる事をしない。廣田先生は、ただ黙つて見てゐる。恐らくその結果がどうなるといふ事を知つてゐながら、ただ黙つて見てゐるのである。もしくは廣田先生は、無言の間に、三四郎が美禰子に囚はれてゐる自分を、自分から一步立のいて觀察する事によつて、美禰子から超越する事を教へてゐるやうでもあるが、然し現在囚はれてゐる三四郎には、その廣田先生の無言の教訓は、教訓としての影響を少しも及ぼす事がないのである。

『虞美人草』では甲野さんが、一番作者に近い人物として描き出される。その點で此所の廣田先生は、甲野さんが相當の年配になつたら、或はかういふ風格を持つたのではないかと思はれるやうな、人間である。二人に關聯してハムレットといふ名前が出て來る事から考へても、作者がこの二人を、血の續いてゐる人間として把握してゐたに違ひない事を、暗示する。然し何をいふにも、『虞美人草』の甲野さんは、年が二十七であるといふだけに、若かつた。若いだけに、厭味があつた。傍觀者としての自分を、人人の前に標置するのは可いが、傍觀者らしい優越感を持つて、藤尾や藤尾の母に、愛のない皮肉を言ひ、彼等と自分との仲を、故意に疎隔するやうな、不



思議な言動を敢てして憚らない、多少の淺ましきを持つてゐないでもなかつた。それに比べると廣田先生は、生れ落ちるとから高い所に住んでゐた人のやうに、晏如として高い所におゐて、晏如として人生を傍觀し、然も自分が高い所にゐる事を、鼻の先きにぶら下げない、十分修業の出來てゐる人間である。廣田先生には、故意とらしい所がない。厭味がない。する事が凡て自然である。その對人關係に於いても、廣田先生は、一樣に公平に、一列に傍觀的に、穩やかで、和らかで、泰平であつた。例へば與次郎の策動がばれて、それが新聞に悪用され、廣田先生の體面が傷けられさうになつた場合でも、廣田先生は、與次郎に小言を言ひはしたが、然しその爲め廣田先生は、決して哲學者の平靜を失ふ事がなかつた。與次郎は廣田先生にとつて、さういふ事をしてもしなくつても、同じやうに愛すべく、同じやうに輕蔑すべき人間だつたのである。

勿論『三四郎』は、廣田先生一人を描寫する事を目的とした、小説ではなかつた。それは既に『三四郎』の豫告に就いて見ても、明らかである。廣田先生は、三四郎が東京に出て來て接觸する、多くの人間の内の、一人にしか過ぎない。然しその廣田先生の周圍には、若い一團の男女が集まり、三四郎はいつのまにかその一團の人人と知り合ひになつて、それが言はば三四郎の東京に於ける全世界になるのだから、ある意味から言へば、三四郎の東京に於ける全世界は、廣田先生であつたと言つても可いものであつた。然し若い三四郎にとつて、その中に包み込まれてしま

ふには、廣田先生は、あまりに高い所に立つてゐた。もしくは廣田先生は、あまりに傍觀者でありすぎた。三四郎から言へば「廣田先生の話し方は、丁度案内者が古戰場を説明する様なもので、實際を遠くから眺めた地位に自らを置いてゐる。それで頗る樂天の趣がある」が、「教場で講義を聞く」やうに、少しも現實の生活に觸れたやうな氣がしないのである。それだから三四郎は、進んで野々宮さんと接觸し、與次郎と接觸し、よし子と接觸し、美禰子と接觸する。然し生きた刺激は、——特に異性の生きた刺激は、不思議に快適な刺激となるとともに、不思議な困惑の刺激となつて、三四郎に甘い苦しみを與へる。その刺激に堪へられなくなつた時、三四郎の避難所となるのが、廣田先生である。廣田先生はいつでも泰然としてゐるだけに、三四郎にとつて廣田先生を訪ねる事は、自分の氣を大きくする所にはなるが、然し廣田先生の内部に動いてゐる脈脈たる愛情だけでは、三四郎は矢張り物足りない。——かうして三四郎は、廣田先生と美禰子との間を、あつちへ行つたり、こつちへ來たりする。

生きた刺激の欲しい三四郎は、美禰子を相手に戀をした。然しこの戀は、戀と言へば戀、戀でないと言へば戀でない、極めて心元ない戀であつた。それがはつきりした戀であり得る爲には、三四郎はあまりに初心でありすぎた。同時に相手の美禰子が、あまりに聰明でありすぎた。三四郎は美禰子との接觸によつて、物足りたやうな物足りないやうな、安心なやうな心配なやうな、



苦しいやうな嬉しいやうな、馬鹿らしいやうな難有いやうな、なんとも名状する事の出来ない心持を経験する。さうして與次郎から、「馬鹿だなあ、あんな女を思つて。思つたつて仕方がないよ。第一、君と同年位ぢやないか。同年位の男に惚れるのは昔の事だ。八百屋お七時代の戀だ」と言つて、たしなめられる。三四郎と美禰子とは、同い年の、二十三であつた。然も三四郎が九州の田舎で、母親の手一つで、世間を狭く育てられて來たのに反し、美禰子は、年寄のゐない、獨身の兄が家を繼いでゐる家庭に住んで、自由に自分のしたい事をする事を許された、のみならず東京育ちの女であつた。素材で、純粹で、度胸がなくて、女性的である三四郎に比べて、美禰子が「萬事上手」であつたのは、與次郎の言葉を俟つまでもなく、明白であつた。それにも拘はらず美禰子は、三四郎に牽かれてゐるのである。さうして其所に三四郎の、與次郎から冷やかされたりたしなめられたりするにも拘はらず、それを思ひ切る事の出来ない、特殊な戀の纏れの源が潜んでゐたのである。

漱石は、明治四十一年十月の『早稲田文學』に掲載された、談話筆記の中で、ゾーデルマンの『カッツェンシュテット』と『エス・ヴール』とを讀んで感心した旨を述べ、殊に『エス・ヴール』の中の女主人公が、現在所天のある身で、嘗て自分が戀した事のある男と再會し、それを追つかけて追つかけて竟に虜にする描寫の巧妙な事を推賞し、「之は女が男を追つかけるのだが、其

女のフェリシタスといふのは夫がある、有夫姦になるので男の方で始終逃げようとする。それを——フィジカリーに追つかけるのではないが——追つかけて／＼してキャプテイブトする仕方が如何にも巧妙に、何うしてあゝいふ風に想像がつくかと驚かれる位に書いてある。誰もあんなデヴェロップメントをクリエートする事は出来ない。さうして此女が非常にサツトルなデリケートな性質でね。私は此女を評して「無意識な偽善家」——偽善家と譯しては悪いが——と云つた事がある。その巧言令色が、努めてするのではなく、殆ど無意識に天性の發露のまゝで男を擒にする所、勿論善とか悪とかの道德的觀念も、無いで遣つてゐるかと思はれるやうなものです。こんな性質をあれ程に書いたものは外に何かありますか。——恐らく無いと思つてゐる。」と言ひ、更に語を繼いで、「『三四郎』は長くなるかといふのですか。さうですね、長く續かせるのですね。さあ何を書くかと云はれると又困りますがね。——實は今御話をした其フェリシタスですね、是を餘程前に見て面白いと思つてゐたところが、宅に居た森田白楊が今頻りに小説を書いてゐるので、そんなら僕は例の「無意識なる偽善者」を書いて見ようと、冗談半分に云ふと、森田が書いて御覽なさいと云ふので、森田に對してはさう云ふ女を書いて見せる義務があるのですが、外の人に公言した譯でもないから、どんな女が出來ても構はないだらうと思つてゐます。實際どんな女になるかも自分で判らない。且今御話した層々累々の敘述丈で進むのではなくエキステ



ンションも這入つてくるんだから、女は何うなつても構はない、と云ふと無責任ですが、出来損なつてもズーデルマン杯を引合に出して冷かしちゃいけません。」と言つてゐる。この談話筆記は、當時漱石の『三四郎』に對する田山花袋の冷評の種となり、それが又漱石の『田山花袋君に答ふ』となつて、文壇に一波瀾を起したが、それは今此所で、問題としようとする所ではない。問題になるのは、此所で漱石が『三四郎』の女主人公を、「無意識な偽善者」として書かうとしてゐるといふ事を、表白してゐる事である。

ヒポクリットはギリシヤ語のヒポクリテスから来て、ギリシヤでは第一に役者を意味したものでらしい。是を偽善者と譯してしまつては悪いと漱石が言つてゐるのは、偽善者といへば、既に其所に倫理的な判断が附隨してゐて、言葉に特別な色がつく爲であるに違ひない。従つて此所でいふ漱石の「アンコンシヤス・ヒポクリット」とは、意識して自分でないものになつて、人を喜ばせるやうな言動に出るのではなく、意識しないで自分でないものになつて、さういふ言動に出る人間を指す筈である。従つてそれは、結果から言へば、勿論倫理的判断の對象にならなければならぬものであるが、動機から言へば、寧ろ倫理的判断を超越した、倫理的判断以前の、生理心理的事實なのである。例へばフェリツィタスのやうな既婚の女が、自分で自分の立場を自覺し認識してゐる限り、自分の現在の立場を棄てる意志を動かす事なしに、他の男を戀愛的に牽

引しようと思つるといふ事は、健全な理性から言へば、不可能の事である。それにも拘はらずフェリツィタスが、單に自分の優越感の満足爲に、男を自分の虜にしようといふのでなく、反對に、自分には反省する事の出来ない、寧ろ反省を絶した奥の力に促がされて、他の男に戀愛的に牽引され、他の男を戀愛的に牽引しようとしたとすれば、其所に既に立破な「アンコンシヤス・ヒポクリット」が成立するのである。

自由で、聡明で、姉さんを以つて任じる事の好きな美禰子は、なるほど與次郎の言ふやうに、自分の尊敬する事の出来ない男の所へ、御嫁に行く氣遣ひはなかつたに違ひない。またその意味で與次郎だの三四郎だのは、美禰子の所天になる資格がなかつたに違ひない。然し美禰子は三四郎に對して、單に輕蔑だけではないもの、美禰子の意識に上ぼつて、美禰子から反省されてはゐなくても、少くとも意識の闕の向う側で、三四郎に牽かれるものを感じてはゐるのである。勿論美禰子が、三四郎の何所に牽かれたのかは、我我にはつきり分らない。然し美禰子は、三四郎が大學の池の端で、一目見て美禰子を戀した如くに、三四郎に牽かれた事は、確實である。その事は美禰子が、池の端で三四郎に初めて會つた時の一仕始終を、三四郎の如くに、いつまでもはつきり覺えてゐたのみならず、その時の服装とその時の持物とその時の姿勢とで、原口さんに畫にかかれようとしたのでも知れる。然し三四郎がその事を、自分の頭の中で繰り返して反芻して、



自分の美禰子に對する戀愛を、自分一人で大きく育てて行つたのに反して、美禰子はそれを反芻する事がなく、假令意識する事があつても、寧ろそれを否定して、決してそれを育て上げようとはしなかつた。従つて三四郎の頭の中の美禰子の影は、いつでも實際よりは廓大されて動いてゐるのに反して、美禰子の頭の中の三四郎の影は、實際よりも縮小されて動いてゐるのである。美禰子の見てゐる三四郎は、美禰子の感じてゐる三四郎よりも、影が薄かつた。少くとも美禰子は、反省して見る時には、三四郎を愛してはゐないのである。然し反省しない時には、もしくは反省の向う側では、確に三四郎を愛してゐるのである。それが三四郎に對する美禰子の、三四郎をからかつてゐるやうな、三四郎に訴へてゐるやうな、三四郎を突き放すやうな、三四郎に凭りかかるやうな、いろんな、端倪すべからざる態度となつて現はれる。

美禰子の三四郎に對する態度のむら、は、然し、美禰子の心に用意がある時とない時と、意識がはつきりしてゐる時とゐない時と、その時時によつて出て來るむらであつた。美禰子から言へば、それに對して自分が、どう責任の持ちやうもなかつたと、言つて可いのかも知れない。然し三四郎から言へば、さういふ美禰子の言動に牽かれ牽かれて、自分の熱度がぐいぐいと昂まつて行つた最後のどたん場で、美禰子からふいと御嫁に行かれてしまつたのである。美禰子から背負投を喰はされたと感じて、不愉快になるのは當然である。もつとも三四郎は、美禰子を憎み得る爲め

には、態度が可也遁腰の態度であつた。三四郎は憎み得る程、美禰子に打ち込んでゐなかつた。同時に美禰子の方も、三四郎に打ち込まれる程、實際には、三四郎の愛に應へてはゐなかつた。従つてこの經驗は、三四郎にとつて、經驗であるべくあまりに淡い經驗であつたに過ぎなかつたが、それでも是が三四郎にとつて、苦い經驗であつた事は、争はれない。

漱石は『坑夫』の中で、人間の「無性格」を論じ、小説家が甲の性格・乙の性格などと、一人の人間の性格を一つのものに固定し、それに外れる言動をすると、許すべからざる罪惡のやうに考へる癖を持つてゐるが、然しそれは自分の都合で自然を矯めるもので、是程實際を遠ざかつたものはない。實際の人間はその點では、寧ろ「無性格」と言つて可いほど、時時刻刻に變化して行くものである、といふ意味の事を言つた。美禰子は、言はば時時刻刻に變化する姿を示してゐるのだから、その意味では此所に人間の、最も自然な姿が描き出されてゐると、言つて可いのかも知れない。然し、今假に我が、三四郎の立場に我がを置いてみるとすると、この美禰子の變化ほど我がに、心元ない、心配な、落つかない、腹の立つ氣を起させる、變化もなかつたのではないかと思はれる。三四郎は、相手が自分を愛してゐるに違ひないと信じて安心してゐると、實は相手は、自分ではなく、野々宮さんを愛してゐるやうなのである。然も、相手は野々宮さんを愛してゐて、自分を愛してゐるのではないと悲觀し切つてゐると、今度は美禰子の方から積極的



に、私の愛してゐるのはあなただけですよと言つてゐるやうな、素振を示して來るのである。勿論是は、田舎者で、單純で、自分が相手を思つてゐる以上は相手も同様に自分を思つてゐるに違ひないときめてしまふほどお人好しの、三四郎の己惚が、半ば以上責任を負ふべきであるには違ひないが、然し三四郎が、自分の己惚に苦しむとともに、變幻極まりのない美禰子の「無性格」に――更にはつきり言へば、美禰子の「アンコンシマス・ヒポクリシー」に苦しめられたのだといふ事も、亦疑ふ譯に行かないのである。

多くの初戀がさうであるやうに、此所で三四郎が經驗する最初の戀愛の經驗も、淡く、品よく、可愛く取り扱はれて、嚴肅なものにならない内に、早くも幕が閉ぢられる。その上美禰子は、最後に、教會の前で自分の出て來るのを待つてゐた三四郎から、結婚なさるさうですとねと言はれて、「聞兼ねる程の嘆息をかすかに漏ら」すとともに、「細い手を濃い眉の上に加へ」て、「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」と、かすかな聲で、ズビデの歌の一句を口誦み、悔い改めて謝罪するやうな自分の心持を、何もか知れざるもの前に披瀝した。それを明らかに聴きとつた三四郎が、それで美禰子を赦し、美禰子と和解する心持になつたかどうかは、知る由もない。然し、ともかくさういふ、美禰子の側からの謝罪の申し出しのやうなものを以つて、三四郎は美禰子と、永久に別れる。

人間の、特に女の「アンコンシマス・ヒポクリシー」の問題は、漱石が單に『三四郎』の美禰子を描く爲に設けた問題ではなく、それは漱石の生活のもつと深い所に根ざしてゐて、漱石はその後絶えずそれを問題にしなければならなかつた、大問題の一つであつたやうに見える。殊に女が「アンコンシマス・ヒポクリット」であるとする見方は、『野分』や『虞美人草』に於ける、理非も道理も辨へる事のないのが女であるといふ見方と、十分脈絡する所を持つてゐる。美禰子を「アンコンシマス・ヒポクリット」であるとする見方は、美禰子を離れて見下ろした、廣田先生の見方であるとするれば、三四郎のやうに、美禰子を離れて見る事の出來ない、對等の立場から、然も三四郎よりもつと激しい感情を以つて批評するとすれば、美禰子も亦、理非も道理も辨へない、その時その時の感情にまかせて、反射的に言動する女であるといふより外はない筈だからである。

男にとつて女が謎であるといふ事は、大抵の場合、女が「アンコンシマス・ヒポクリット」である所から來る。それを謎と名づけずに「アンコンシマス・ヒポクリット」と名づけるといふ事は、その事實に倫理的判斷が加はつてゐない事を意味するに過ぎない。然も人が、女のその「アンコンシマス・ヒポクリシー」を相手として、何所にその本質があるのかを突き留めようと焦せる時、人は單にそれを「アンコンシマス・ヒポクリット」といふ名前前で片づけてしまふ事が出來



なくなつて、三四郎が苦しんだ方向に於いて、更に深刻に苦しまなければならなくなるのである。『彼岸過迄』の須永が苦しんだのも、『行人』の一郎が苦しんだのも、『道草』の健三が苦しんだのも、大ざつぱに言へば、凡てそれであつた。『明暗』にあつても、その意識されないヒポクリシーと意識されたヒポクリシーとが入り亂れ、男の中にも女の中にもそれが働いて、互に互を謎にし、互に互を不信にするのである。

『三四郎』に漱石の、社會に對する批評や、文壇に對する批評や、大學に對する批評や、人間に對する批評や、その他さまざまがある事は、言ふまでもない。漱石が三四郎と美禰子との戀愛の發展を、『三四郎』の唯一の興味とせず、それに「エキステンション」を與へようとしてゐる以上、此所に「推移趣味」のみならず「低徊趣味」の要素が加はつて、世界が「細い水が一本流れて行くやうな」ものにならずに、幅を持つたものになつて來るのは當然の事である。然しこれらの事よりも、此所に女の「アンコンシラス・ヒポクリシー」が取り上げられてゐるといふ事が、この作品を更に注目すべき作品たらしめる。ただ此所ではその問題が、まだ極めて若らしい、言はば芽生えの状態に於いてしか取り扱はれてゐないのみである。

昭和十一年五月十九日

小宮豊隆

### 『それから』解説

『虞美人草』は明治四十年六月四日から書き出され、明治四十年八月三十一日か九月一日のころ書き上げられた。百二十七回の續き物に凡そ九十日を要してゐる。『坑夫』は明治四十年十二月十日以後に書き出された筈であるが、書き上げられたのは明治四十一年一月二十九日である。是は九十六回で、凡そ五十日かかつてゐる。『三四郎』が書き出されたのは明治四十一年八月三日以後の事で、書き上げられたのは十月六日である。百十七回に、凡そ六十日が費されてゐる。『それから』は明治四十二年五月三十一日著手、同年八月十四日脱稿、百十回に漱石は七十六日かけてゐる。

元より書き出しから書き上げまで、漱石のコンディションが、四者いづれも同様であつたと言ふ事は出来ない。従つて四者の分量とそれに費された時日との比をもつて、直ちに、漱石がそれらのものを書くに費した苦心の程度を計る物指にする譯には行かない。然し極めて大づかみであ



る事に満足するとすれば、この比は『坑夫』と『三四郎』とに軽く『虞美人草』と『それから』とに重く、従つて漱石は四者の内で、『虞美人草』と『それから』とに、遙に多くの苦心を重ねたに違ひないといふ事が、凡そ想像出来るやうである。事實また漱石は、『虞美人草』を書く時と同じやうに、『それから』を書くのに苦心したらしく見える。『それから』を書き出す前に、漱石の立てたプランが、『日記及断片』の中に採録されてゐるが、是ほど精到に考へ通されたプランは、『虞美人草』でも『三四郎』でも、嘗て持った事がないのである。その上漱石は、明治四十二年八月九日の日記に、「それからの第百回〔本文第七一四頁第四行より第七一八頁第四行まで〕を半分程書いてから又書き直す。「それから」を書き直したのは是で二返目也。」と書いてゐるのである。漱石が『坑夫』や『三四郎』を書き直したといふ話を、私は聞いた事がなかつた。然し漱石は『虞美人草』を幾度も書き直してゐる。さうしてその反古の幾分は今日でも残つてゐる。

漱石が『それから』の豫告で、「色々な意味に於てそれからである。『三四郎』には大學生の事を描いたが、此小説にはそれから先の事を書いたからそれからである。『三四郎』の主人公はあの通り單純であるが、此主人公はそれから後の男であるから此點に於ても、それからである。此主人公は最後に、妙な運命に陥る。それからさき何うなるかは書いてない。此意味に於ても亦それからである。」と言つてゐるやうに、『それから』はある意味に於いて『三四郎』の續篇であつた。

さうしてこの二つは、次に来る『門』とともに、所謂三部作を形づくるものであつた。勿論この三つが三部作を形づくつてゐるといふ事は、必しも、主人公が三篇を通じて同様であり、一つは精確に他のものの事件を承けて、その先きを書き續けるものである事を要しなかつた。第一、新聞小説は目先の變化を必要とするものであると考へてゐた漱石が、ある意味では讀者に退屈を與へ得る、さういふプランを立てる筈もない。また純粹に創作活動の方面から言つても、局面が轉換した方が、遙に清新な氣持で筆を執る事が出来た筈である。従つて漱石は『それから』でも、『門』でも、『三四郎』とは全然舞臺も違ひ人間も違ふ世界を採り上げるのであるが、それでも三つの世界の間には、その根柢に於て相互に脈絡するものを持つてゐて、それぞれはつきり獨立してゐながら、それぞれはつきり關聯してゐるのである。それぞれはつきり獨立してゐながら、それぞれはつきり關聯してゐるとすれば、その根柢に於て相互を脈絡させてゐるものは、何であるか。——それは、言ふまでもなく、主人公の戀愛問題である。

『三四郎』に於ける三四郎の戀愛が、戀愛といふべく餘りに淡い戀愛であつたといふ事、殊にその戀愛は、三四郎の側から言へば、結著がついたともつかないとはつきりしないうちに、有耶無耶の内に葬り去られべく餘儀なくされた戀愛であつたといふ事は、既に述べた。然るに『そ



れから』では代助が、自分の若い時の戀愛を、戀愛であるとは自覺してゐながら、友人の懇望にほだされて、ヒロイックな氣持になり、潔くそれを友人に譲らうと決心するのみならず、自分で進んでその縁談を纏めてしまふのである。その點で三四郎の經驗と代助の經驗とは、決して同じものとは言へないのであるが、然し一旦立場を變へて、我我が、さうして代助から斡旋されて、平岡の所へ片づいて行つた、代助の相手の三千代の立場に立つて見れば、我我は、當時三千代の代助に對して懷いた感情が、三四郎の美禰子に對して懷いた感情と、丁度同じやうなものであつた事を、發見する事が出来るのではないかと思はれる。勿論代助は美禰子のやうに、ある意味では輕蔑しながら、三千代を愛してゐたのではなかつた。然しこの戀愛が、いかに自分の心の深所に根を張り、いかに自分にとつて運命的なものであつたかを認識する事が出来ずに、それをなほざりに取り扱ひ、自分のさかしらに眩惑されて、惜氣もなくそれを友人に譲つてしまはうとするのだから、美禰子とは逆な意味ではあるが、其所に代助の「アンコンシヤス・ヒポクリシー」が成立するのは、説明するまでもない事である。三千代は、言はば、その代助の「アンコンシヤス・ヒポクリシー」の犠牲になつて、代助の斡旋の下に、平岡の所へ片づかせられる。

然も『それから』では、さういふ過去を持つた代助が、竟に自分の「アンコンシヤス・ヒポクリシー」に堪へられなくなつて、本源的な自然に復らうとする所が描かれるのである。その點で

は代助は、三四郎を棄てて他に嫁いだ美禰子の、後日に經驗し得る、一つの場合を經驗したものであると、言ふ事も出来るかも知れない。代助は、自分が本能として、——自分の意識と反省とによつては十分把握する事が出来なかつた程の、廣がりと深みとを持つた、本源的なるものゝ要求として、——戀愛してゐた相手を、事實は空疎なヒロイズムに陶醉して棄ててしまひ、棄てたあとから、次第にそのヒロイズムが空疎であつた事の認識とともに、自分の戀愛の廣がりと深みとを深切に認識し始め、竟には何ものに代へてもこの戀愛を遂げようとする。『三四郎』と『それから』とは、男と女との關係が逆になつてゐるには違ひないが、然し、さういふ事に拘泥せず、一つの因果で結ばれたまま、離れ離れになつてゐた男と女とが、年月を経るに従つて、その因果を認識し始め、竟には如何なる犠牲を拂はうとも、この因果に従はうと決心するといふ風に、全體を把握するとすれば、『それから』が十分『三四郎』の續篇であり得る事は、言ふまでもない。ただ『それから』で取り扱はれる問題は、戀愛の相手が既に他人の所へ片づいてゐる女である爲に、『三四郎』で取り扱はれた問題のやうな、生やさしい問題ではなかつたといふ相違があるのみである。

『早稲田文學』に載つた談話筆記の中で、漱石は、森田草平が今小説を書いてゐると、言つてゐる。その小説とは、『煤烟』である。『煤烟』は、明治四十二年の元日から東京朝日新聞に連載



されて、當時の文壇の耳目を聳動した。然し漱石は、初めの内こそ口を極めてそれを推賞してゐたが、事件が段段發展し、主人公の要吉が女主人公の朋子と前景に出て来て活躍し始めるに及んで、次第に、藝術的にも倫理的にも、是を高く評價しなくなつた。明治四十二年三月六日の日記に、漱石は「要吉朋子九段の上での會合の場」と見出しを置いたあとで、「煤烟は劇烈なり。然し尤もと思ふ所なし。この男とこの女のパッションは普通の人間の胸のうちに呼應する聲を見出しがたし。たゞ此男と此女が丸で普通の人を遠ざかる故に吾々は好奇心を以て讀むなり。しかも其好奇心のうちには一種の氣の毒な感あり。彼等が入らざるパッションを燃やして、本氣で狂氣じみた芝居をしてゐるのを氣の毒に思ふなり。行雲流水、自然本能の發動はこんなものではない。此男と此女は世紀末の人工的パッションの爲に囚はれて、しかも、それに得意なり。それが自然の極端と思へり。だから氣の毒である。神聖の愛は文字を離れ言説を離る。ハイカラにして能く味はひ得んや。」と書いた。この時漱石に、既に「それから」のイデーが胚胎されてゐたものかどうかは、分からない。然し『煤烟』に對する、漱石のこの抗議は、同時に漱石の『それから』の底を貫ぬくイデーであつたやうに思はれる。代助が人妻に戀して、甘んじて社會の罪人となる事の唯一の辯護は、『薙露行』のギニアがランスロットに戀したやうに、鐵が磁石に引かれるやうに、已むに已まれぬ、自然の力に押し流されたといふ事である。「文字を離れ言説を離」れた、

運命的なものに驅り立てられたといふ事である。漱石は此所で、その「尤もと思ふ所」のない事が、『煤烟』の缺點だと言つてゐるのである。

『それから』が朝日新聞に載り始めたのは『煤烟』が完結したあと、一つ置いて、明治四十二年六月二十七日からの事であつた。その『それから』の代助は、また『煤烟』に就いて、「代助は門野の賞めた「煤烟」を讀んでゐる。今日は紅茶々碗の傍に新聞を置いたなり、開けて見る氣にならない。ダヌンチオの主人公は、皆金に不自由のない男だから、贅澤の結果あゝ云ふ惡戯いんげんをしても無理とは思へないが、「煤烟」の主人公に至つては、そんな餘地のない程に貧しい人である。それを彼所迄押しに行くには、全く情愛の力でなくつちや出来る筈のものでない。所が、要吉といふ人物にも、朋子といふ女にも、誠の愛で、已むなく社會の外に押し流されて行く様子が見えない。彼等を動かす内面の力は何であらうと考へると、代助は不審である。あゝ云ふ境遇に居て、あゝ云ふ事を斷行し得る主人公は、恐らく不安ぢやあるまい。これを斷行するに躊躇する自分の方にこそ寧ろ不安の分子があつて然るべき筈だ。代助は獨りで考へるたびに、自分は特殊人だと思ふ。けれども要吉の特殊人たるに至つては、自分より遙かに上手うはてであると承認した。それで此間迄は好奇心に驅られて「煤烟」を讀んでゐたが、昨今になつて、あまりに、自分と要吉の間に懸隔がある様に思はれ出したので、眼を通さない事がよくある。」と言つてゐるのである。漱石は



『それから』で、「誠の愛で、已むなく社會の外に押し流されて行く」二つの魂を描かうとした。その爲にはその「愛」は、押へられても押へられても、寧ろ押へられれば押へられるほど、その本然の力を旺盛にして、鞭うたれても焚かれても、相手と一つのものにならうとする、嚴肅な、必死な「愛」でなければならなかつた。さういふ「愛」があつてこそ、人は、人の掟には背いても、天の掟には背かない、飛躍を敢てする事が出来るのである。——漱石が『それから』に於いて、藝術家としての自分の前に置いた課題は、普通の道徳から言へば不都合極まる事ではあつても、更に高い道徳から言へば「尤もと思ふ」やうな、特殊な戀愛を描き出す事にあつた。

代助は、自分で自分をさう批評してゐるやうに、特殊人<sup>オリヂナル</sup>であつた。さうして代助の特殊人である點は、代助の頭だけが先に發達して、心が是に伴はない點にあつた。代助は、自然のままに大きく發育して行つたのではなくて、言はば、自然は置き去りにされて、頭だけ<sup>ソフリスティック</sup>巧にされてゐるのである。代助の中の自然がさうしたいと思つても、代助の頭が先き潜りをして結末を見とほし、それを決してさうさせない。従つて自然はいつのまにか、萎えしほれたやうになつて、存在を無視され勝ちである。代助にあつては、概念がいつでも先にのさばり出て、内容がそのあとから、跛をひきながらついて行く。——然も一面から言へば、代助ほど自分の肉體を愛し、自分の生命を愛し、他人に働らき掛けない限度に於いて、享樂的な生活を送つてゐる人間もなかつたのである。

である。

平岡によれば、代助は「世の中を、有の儘で受け取」つて、「意志を發展させる事の出来ない男」、「たゞ考へてゐる」「丈だから、頭の中の世界と、頭の外の世界を別々に建立して生きてゐる」、「此大不調和」に「始終物足りない」思ひを肚の底に持つてゐなければならぬ男であつた。もつとも代助から言へば、それは自分の罪ではなくて、日本の現在の社會の罪である。「斯う西洋の壓迫を受けてゐる國民は、頭に餘裕がないから、碌な仕事は出来ない。悉く切り詰めた教育で、さうして目の廻る程こき使はれるから、揃つて神經衰弱になつちまふ。話をして見給へ大抵は馬鹿だから。自分の事と、自分の今日の、只今の事より外に、何も考へてやしない。考へられない程疲勞してゐるんだから仕方がない。精神の困憊と、身體の衰弱とは不幸にして伴なつてゐる。のみならず、道徳の敗退も一所に來てゐる。日本國中何所を見渡したつて、輝いてる斷面は一寸四方も無いぢやないか。悉く暗黒だ。其間に立つて僕一人が、何と云つたつて、何を爲たつて、仕様がなない」。だから自分は、自分一人の世界に立て籠り、ありのままの世をありのままに受け取つて、その中から自分に最も快適なもの接觸して、満足してゐるといふのである。さうして代助は、自分の輕蔑してゐる父親から金をもらつて、自分の好きなやうに、我儘に生活してゐるのである。



代助のこの社會批評が、當つてゐるかゝないかは、今問題ではない。また代助のこの批評が、代助の現在の懷疑主義バクブツイスマスと簡人主義コノイスマスとを十分辯護し得るかどうかも、今問題ではない。問題なのは、さういふ「有の儘の世界を、有の儘で受取つて、」そのうちで自分に快適なものだけと接觸して満足し、「進んで外の人を、此方の考へ通りにするなんて」事は、夢にも思つてゐなかつた代助に、作者がどうして、凡てのものを放擲してもそれを獲得しなければならぬもの、自分一人で手を拱いてゐるのではなく、進んで人に働らき掛けなければならぬもの、——一口に言へば、代助に轉向の危機を將來する事が出来たかである。

無論それを可能にするものは、代助の、三千代に對する戀愛の認識であつた。漱石はその爲め、大阪に於ける平岡の不行跡や、その結果としての平岡の失業や、平岡一家の上京や、平岡の貧乏や、平岡の焦燥や、平岡の家庭の冷たさや、それらのものに苦しむ三千代への、代助の同情や奔走や、或は代助の父の所で詮考されてゐる代助の妻君の候補者や、その候補者の爲に催された、代助には不意撃の見合や、その他それに類似の事件を、序を追うて展開する。それらのものは寄つてたかつて、代助を刺激し、代助の心を三千代の方へ傾かしめる。然しこれらの刺激は、事實は、代助の眼の上にかぶさつてゐた薄膜を、一枚一枚剥ぎとる事には役立つても、決して偶然のものを必然に押しやる働きをするものではなかつた。かういふ刺激が重なつて來る時、嘗て代助

の魂にはつきり焼きつけられてゐた三千代の姿が、代助の眼の前に、次第に赫奕と輝き始めるのである。さうして代助は、自分の是までの懷疑主義バクブツイスマスも簡人主義コノイスマスも、畢竟はその源を、自分が三千代を平岡に譲つた事に發してゐるのだといふ事を、はつきり認識するのである。——この層層累と展開されて行く代助の内面は、實に巧妙に描き出されてゐると言つて可い。

『早稲田文學』の談話筆記の中で、漱石は、ズーデルマンの『カッツェンシュテット』が、無學文盲な、日本で言へば房州あたりの船頭の娘のやうな女と、今一人教育のある男とが、ある事情の爲に社會から隔離されて、一つ屋根の下に住んでゐる。然も身分がかけ離れてゐる所から、男はラヴどころかシムパンシーも持ち得ない。女はラヴといふものはどういふものかさへも知らない。然も男はその女だけから身の廻りの世話をしてもらはなければならぬ。さういふ境遇の下に置かれてゐる二人が、次第にくつついて行く経路を巧に描いてゐる事を賞讃し、「統一ユニテイもあつて且單調を避けん爲には、同じインテレストを以て各篇を貫くと同時に、エキザクトリーに同じインテレストを各章に繰り返してはならぬ……即ち同じ男女のラヴ・アツフェアズでも、毎日出逢つてゐるのに同じ戯けた話をして駄目だからして、何等かの變化を與へねばならぬ。然も夫が場所の動かない處であると、何うも單調になる、變化を與へる事が困難だ。然し變化ばかりあつて統一ユニテイを失つてはいけない。……詰りレベティションをするやうで、段々と新しい所を加へて



行くといふ書き方、それが甚だ困難である。／然しさう書いて行くと、エキステンションは勿論無い。だから興味は統一されるが、云はゞ細い水が一本流れて行くやうなもので、従つてナローになる。けれども同じインテレストでも加速度を以てアクセレレートして層々累々に新味を加へて行くとなると、其處に深さが生ずる。『レギーナ』は此困難な書き方で、餘程深さを表はしてゐる。あれがその、人里離れた處に男と女をたつた二人出してあるのだから周囲も變らない、同じ家に住んでゐるからして、場所も變らぬ、それでゐてズン／＼變化して行くのが、旨い具合に書いてある。』と言つてゐる。『レギーナ』とは、言ふまでもなく、『カツツェンシュテッヒ』の英譯の名である。然も漱石のこの評語は、多少の變更をさへ加へれば、移してそのまま、『それから』の評語とする事が出来るのではないかと思はれる。

勿論『それから』には、『カツツェンシュテッヒ』のやうに、センセーショナルな場面の續出がない。のみならず『それから』の主人公は、明治末期の、東京のインテリゲンツィアを代表してゐるやうな人間である。殊に『それから』の眼目とする所は、人間の私の計らひできめた掟が、天の自然に従ふ掟に敗北し、自らモダーンであり、オリヂナルであり、インテリゲンツィアである事を以つて任じてゐた代助が、誠吾の言つた意味とは全然別な、もつと根本的な意味ではあるが、「不斷は人並以上に減らず口を敲」いてゐる癖に、いざといふ場合にはへたへたとなつてし

まふ所を書かうとした點にあるのだから、内容的に言へば『それから』は『カツツェンシュテッヒ』とは全然その趣きを異にするものである。然し一旦離れてゐた代助と三千代とが、代助の必死な抗争にも拘はらず、加速度的に層層累累と接近して行く點から言へば、——然もその代助と三千代とは、同じ東京に住んでゐて、尋常の暮しをしてゐる人間であるのみならず、片方は「泣いて人を動かさうとする程、低級」なものはないと自信し、「凡そ何が氣障だつて、思はせ振りの、涙や、煩悶や、眞面目や、熱誠ほど氣障なものはないと自覺してゐる」代助であり、片方は、寂しいながらも、自分に興へられた運命に隨順して、自分の所天と定められた男に、決して二心を懐くまいとしてゐる三千代であり、その意味で割に接近させにくい二人を次第に接近させて行かうとする點から言へば、『それから』は『カツツェンシュテッヒ』と、丁度同じやうな困難な途があるき、また丁度同じやうな困難を克服してゐると言つて可いと思ふ。勿論「摸擬踏襲」を絶対に潔しとしなかつた漱石が、『それから』で『カツツェンシュテッヒ』の眞似をしたのでない事は、言ふまでもない。また眞似をして是だけ獨特なものが生れるとすれば、それは既に眞似ではない。是は恐らく漱石の中の藝術家が、『カツツェンシュテッヒ』に刺激されて、『カツツェンシュテッヒ』の向うを張る氣になつたものに相違ないのである。

ただ『それから』は、加速度的に層層累累と最高頂に向つて行く、その経路の描寫には少しも